

日本詩史序

北海先生著日本詩史而成，將上之梓，則命予序之。予受而卒業，自中古而今世，數百千歲之邈焉，自王公而士庶，暨緇流紅粉之雜焉，殘篇賸語膾炙人口，而其名堙晦，無聞者，廣蒐博采，人傳其略，芻及噉名俗子好事估客，苟其詩可觀者，竝錄而無遺，蓋不以人廢才也。可謂詞家苦心，藝苑盛舉哉。然而斯史也，逮于近世，則詳乎布韋，而予乎冠冕者，獨何也。先生博聞廣識，潛心于此者數年，豈其有遺漏哉。然則予之平日慨然於懷者，無乃其有徵乎。蓋吾邦先王之奉神道，以設其教，亦迨乎聘舶相通也。則禮樂政刑，無一而不資諸漢唐，以爲損益者，而其明經文章之選，亦惟無一而非金馬玉堂之則也。故公卿大夫翕然，皆用心於詩賦論頌，而若和歌，則其緒餘也耳。延

喜中敕編古今和歌集而掌其選者未必閱之胃也。則可知以和歌名其家者蓋當時縉紳名族之所未必屑也已。嗟夫自皇綱解紐學政不振文事頽敗殆幾泯沒於是乎和歌者流始擅藝柄夸張相尙卒乃世之所稱歌仙者推尊之甚比之神聖視其遺什猶典謨古言或難曉則附以神祕之缺齋戒傳授禮最崇重輒曰和歌之教之道而王公之學之禮而穆穆宮禁奉以爲盛典吾儕小人豈敢置一辭雖然三代聖人之道有何等祕訣而吾邦中古亦未聞有此儀也降此而曲藝末技之師亦皆藉此機以干進則種種銜餽靡所不屆而王公大人或爲之甘心至乃涓吉誓神恭執弟子禮傳祕探密惟日不給尙何暇屬辭苦心之業之爲宜乎近世廊廟之上文學寥寥亡聞于世者而惟衡門之寒衲衣之陋獨擅美于艸萊之下者其可勝嘆乎抑雖世變之使然乎亦未必無任其責者也予嘗持斯說將

以微諷之，而青雲之與泥塗，其相隔天壤不啻也。將質諸先覺，則自喪吾景山先生，而離群獨學，日就孤陋，故抑憤蓄疑，隱忍者久之，幸矣。斯史之作也，予多年之所懷，今而足以徵者，不亦喜乎？北海先生奕世名儒，學識瞻博，可以大有爲者，而作此區區文士之舉，蓋其意之所在，豈徒哉！以故詩論所及，諸子百家，無所不有，而非寓褒於貶，則視戒於寵，皮裡陽秋，不可測焉。不知先生托之以言其志者，如予所懷，亦在其中乎？庶幾王公大人一閱斯史，或有所憤發而小用心於文學乎？天廐之種，穀食之養，一日千里，豈敢凡骨駑材之所企及哉！時方昇平，地是土中，王室肅雝，公卿委蛇，有寧處之邊，而無執掌之勞，餘力學文，何求無成，況乃乘文明之運，而鳴秦平之美，豈翅鴻業潤飾，皇猷黼黻，可謂吾日出處之國光赫赫乎？足以輝萬邦哉！艸莽微臣如順，亦得被其末光者，其喜豈有窮已哉！然則詩史之作也。

其關係亦大矣哉、因不自揣、敢書鄙見、以爲之序、并質諸先生云爾。

明和庚寅冬十月

平安 醫員法眼 武川 幸順 撰

日本詩史序

余蚤歲從北海先生學，而得讀異邦之書，談異邦之詩，論異邦之世也。先生之言曰：晉杜征南旣建策平吳，又潛心訓詁春秋傳，其業可謂勤矣，而猶爲不足，刊其成業於碑，爲後世之名，其志可謂深矣。夫名不可以已者也，而狗名爲利，囚君子弗論也。余因竊謂狗名爲利，囚異邦人士滔滔皆是，蓋異邦自古者，聖明之主，莫不以舉能求賢爲先務，而周時取士，教官掌之，漢以後設選舉法，至後世科目益廣，乃童子有科目，耆老有禮徵，是以巖穴下，能屈王侯之尊，則終南爲仕進捷徑，亦何足恠哉。唐時以詩試士，一時躁競，唯詩是務，後人稱詩盛於唐，抑亦時政所使焉。吾邦自穹壤剖判，亘萬世一帝系統，政教槩不與異邦同，况復昇平日久，海內仰無爲之化，封建之制，上下

分定士民安業靡有覬覦之心靡有躁競之習卽有務爲名高者要是不爲科第則材學可稱詩篇可傳者有焉而後輩往往忽近不必傳者不少豈可不惜哉吾先生嘗有感於此近撰日本詩史竝考其世與其人以論其詩嗚呼先生之業可謂勤矣先生之志可謂深矣宜刊而傳之則後世其有所徵焉傳曰頌其詩讀其書不知其人可乎是以論其世也是尙友也先生斯舉其得之哉

明和庚寅仲冬

柚木太玄謹撰

日本詩史凡例

一 是編論詩以及人非傳人以及詩即巨儒宿學苟無篇章存在者亦不論載焉此所以名以詩史之義

一 是編本爲十卷起稿丙戌之秋戊子業就乃命男棕兼校焉但余罷仕八年於茲囊棄既竭劓劓殊艱因於割愛先梓其半部今茲庚寅二月棕乘羅疾沒鍾情之極閉戶謝客長夏無事殆難銷日乃修舊業且以遣憂會弟君錦白關東還乃使其重校以附劓劓初爲十卷尙未足稱詞壇陽秋況刪其半直是藝園芻狗即弊箒傳晒抑亦婆心後輩云

一 五卷中初卷商推中古近古朝廷文學管輅辭藻始自白鳳時訖于慶長末二卷者初卷緒餘其所論載爲武弁爲醫爲隱爲釋氏爲閨閣年代同上但閨閣不可多得則近時亦附焉第三卷論述元和以後京師藝文兼及他州第四卷東都兼及他州第五卷第三第四兩卷緒餘論及諸州

一 是編之作全在揄揚元和以後藝文而名以詩史則不得不原其始也是以溯洄古昔

者不必廣蒐。蓋古昔詩可徵于今者，莫先乎懷風藻。懷風藻作者六十餘人，詩凡百二十首。經國集雖殘缺，今存者二百餘首。麗藻集凡百首，無題詩集七百七十首。其餘中古近古諸集，諸選尚多。若人人而評之，篇篇而論之，蕞爾一書，非所能辨。故斷不言及。今初卷所錄，以林學士所撰一人一首爲標準，略陳瑜瑕，以成卷者。要之省筆減簡，不能不然。

一懷風藻所載朝紳，始自大納言中臣朝臣大鳥訖于中宮少輔葛井連廣成。人必具官銜者，於義當然。是編本擬亦據其例。至刪爲五卷，都除官稱單錄姓名，亦唯省筆減簡不能不然。

一是編初卷所論列，竝是朝紳絕無章布士。由古選所收然也。蓋一時藝文特在青雲上，而草莽士無染指者歟。不然則懷風藻經國無題等諸選，率朝紳所纂輯。是以採擇不及民間歟。是編第三卷以下所論，載靡匪布素。元和以後朝野文武靡然嚮學，青雲上定不乏佳撰。而余意竊謂以草莽士叨評論尊貴著撰，不敬之甚，以故全不論次。

一 是編刪爲五卷，闕略固所不論，而就其中言之，蓋亦非無差等。京師詳于東都，東都詳于諸州。此非有所私厚薄。余住京師者數十年，於京師文學頗得要領，東都隔遠，物色

既難，況乎他州。余近覽本朝詩集，私欽敬其盛舉，但其中錄次京師近時作者，大爲憤憤，其黨籍雜陳，亡論耳。若載余伯氏已錄，伯氏姓名，又別舉伯氏，舊名舊表號，此以伯氏一人爲二人，餘可準知。噫，以宗藩之勢，何求不得，加之文學之職，賓客之盛，承順其美贊，成其業，無所不至，而猶且如此，況余一人心力，管蠡海內，其謬誤奚啻千萬。

一 是編所論次近時作者，必蓋棺論定，而后敢論。若夫聲名顯著當今，下帷延徒，亡論余知與不知，竝不舉瑜瑕，蓋譽之似黨，毀之似讐，不能不避嫌疑，但不以講說爲業，及溷晦遠名，或羽翼未成者，不拘此例。

一 我邦多複姓，操觚之士，或以爲不雅馴，於是往往減爲單姓，不翹代北九十九姓，其義得失，姑置之。是編多完錄姓氏，要使後人易檢索，而亦不盡然者，有說也。余已載諸授業編，因不復贅地名，亦然。遠江州稱袁州，美濃州稱襄陽，金澤爲金陵，廣島爲廣陵，之類，於義有害，是以一槩不書。

一 古曰：作詩之難，論詩更難，非論之難，論而得中正之難。夫詩體裁隨時好尚，從人必欲使天下作者歸己所好，一非一是矯枉過正，其極變溫柔敦厚之教，開頓危爭競之端。悲夫，孟子曰：物之不齊，物之情也。五色各色，其色未嘗失爲其明，夫玄之與黃，孰是取

焉，孰非捨焉，余不好爲詭言異說，以建門戶，是編所論中古，卽以中古近時卽以近時，京師卽以京師，東都卽以東都，人人各逐其體，評論冀無寸木岑樓之差。

一 是編所論載詩，大率近體絕不及古詩者，中古朝紳詠言，近體間有可錄，至古詩殊失其旨，元和以後，作者輩出，近體詩實欲追步中土，作者但五言古詩未得其面目，瓊園諸子文集，其首必多載樂府擬古諸篇，然以余論之，尙有可議者，其詳載諸授業編云。

明和庚寅冬十月

北海江邨授題于賜杖堂

日本詩史卷之一

按史、應神天皇十五年、百濟國博士阿直幾來朝、獻周易論語、孝經等書、上悅、使阿直幾授經諸皇子、我邦經學、蓋肇於此云、後阿直幾薦王仁、上乃詔百濟王徵王仁、王仁至、與阿直幾同侍講諸皇子、上崩、仁德天皇卽位、遷都浪速、王仁獻梅花頌、所謂三十一言和歌者也、或曰、異域之人、何以作和歌、所獻、或是詩章、當時史臣譯通其義耳、或曰、王仁歸

平安 江邨綬君錫著

弟 清 絢君錦

同校

男 悰秉孔均

史を按ずるに、應神天皇十五年、百濟國博士阿直幾來朝し、周易論語、孝經等の書を獻ず、上悦ぶ、阿直幾をして經を諸皇子に授けしむ、我邦の經學、蓋此に肇まるといふ、後阿直幾、王仁を薦む、上乃百濟王に詔し、王仁を徵す、王仁至る、阿直幾と同じく諸皇子に侍講せしむ、上崩す、仁德天皇卽位に卽き、浪速に遷都す、王仁梅花の頌を獻ず、所謂三十一言の和歌なる者なり、或曰く、異域の人、何を以て和歌を作らん、獻する所、或は是れ詩章にして、當時の史臣譯して其義を通ぜしのみと、或曰く、王仁歸化既に久しく、我邦の語言に熟し、和歌を作るを學ぶと、未だ孰れか是なるを知らざるなり、之を要するに今を距るこ

化既久、孰我邦語言、學作和歌、未知孰是也、
要之距今千有四百年、載籍罕傳、其詳不可
得而知也、自仁德升遐、歷世三十、經年四百
五十、天智天皇登極、而後鸞鳳揚音、圭璧發
彩、藝文始足、商榷云。

史稱詩賦之興、自大津王始、紀淑望亦曰、皇
子大津始作詩賦、而其實大友皇子爲始、河
島王大津王次之、大友詩、五言四句、道德承
天訓、鹽梅寄眞宰、羞無監撫術、安能臨四海、
典重渾朴、爲詞壇鼻祖、而無愧者也、大友、天
智太子、與太叔龍戰於關原、天命不遂、安能
臨四海之語、爲讖、河島王有五言八句詩、大
津王兼作七言、才皆不及大友。

葛野王、大友長子、遊龍門山詩、命駕遊山水、

と千有四百年、載籍傳ふること罕にして、其詳なること
得て知る可らざるなり、仁徳の升遐より世を歴ること三
十年を経ること四百五十にして、天智天皇登極す、而し
て後ち鸞鳳音を揚げ、圭璧彩を發す、藝文始めて商榷す
るに足るといふ。

二

史に稱す、詩賦の興る、大津王より始まると、紀の淑望も
亦曰く、皇子大津始めて詩賦を作ると、而して其實は大
友皇子を始めと爲し、河島王、大津王之に次ぐ、大友の詩、
五言四句、道德天訓を承け、鹽梅寄眞宰に寄す、羞づ監撫の
術なし、安ぞ能く四海に臨まん」と、典重渾朴、詞壇の鼻祖
と爲して愧づる無き者なり、大友は天智の太子にして、
太叔と關原に龍戰し、天命遂げず、安ぞ能く四海に臨ま
んの語讖を爲す、河島王五言八句の詩あり、大津王は兼
て七言を作る、才皆な大友に及ばず。

葛野王は、大友の長子なり、龍門山に遊ぶ詩、駕を命して

長忘冠冕情、風骨蒼老不減。皇考詳詩、意壬申亂後潛晦形迹、縱情泉石、賦葛野王生河邊王、河邊王生淡海三船、世有才名。

至尊睿藻、見於古選者、文武天皇爲始、詠月五言八句、見懷風藻、又詠雪曰、林邊疑柳絮、梁上似歌塵、齊梁佳句。

平城天皇有詠櫻花詩。

嵯峨天皇、天資好文、睿才神敏、宸藻最稱富贍、其七言近體中、警聯殊多、但未免駢麗合掌、亦時風爾耳、如曰、家鄉杳杳多歸志、客路悠悠少故人、雲氣濕衣知近嶽、泉聲驚枕覺隣溪、冲澹清曠。

弘仁御寓日、平城讓皇在西內、淳和以皇太弟在東宮、三宮融睦、孝友天至、花晨月夕、讌

山水に遊ぶ、長く冠冕の情を忘ると、風骨蒼老、皇考に減せず、詩意を詳にするに壬申の亂後、形迹を潛晦し、情を泉石に縱まゝにするか、葛野王は河邊王を生み、河邊王は淡海三船を生む、世々才名あり。

至尊の睿藻、古選に見ゆる者、文武天皇を始めと爲す、月を詠する五言八句、懷風藻に見ゆ、又雪を詠して曰く、林邊柳絮かと疑ひ、梁上歌塵に似たり、と齊梁の佳句なり。

平城天皇、櫻花を詠する詩あり。

嵯峨天皇、天資文を好み、睿才神敏にして、宸藻最も富贍と稱す、其の七言近體中、警聯殊に多し、但未だ駢麗合掌を免れず、亦時風爾るのみ、家鄉杳杳歸志多く、客路悠悠故人少し、雲氣衣を濕して嶽に近づくを知り、泉聲枕を驚して溪に隣なるを覺ゆ、と曰ふ、如き、冲澹清曠なり。

弘仁御寓の日、平城讓皇西内に在り、淳和は皇太弟を以て東宮に在り、三宮融睦、孝友天至、花晨月夕、讌樂相接す、宸章往復、幾んど虚日なし、直に右文の美德なるのみな

樂相接、宸章往復、幾靡虛日、不直右文美德、實是曠代盛事也、但平城、淳和二帝睿藻、傳者不多。

宇多天皇、有翫殘菊七絕、醍醐天皇、有讀菅氏三代集七律、二帝御製、止此而已。

邨上天皇、亦稱好文、所傳宮營曉囀七絕、自以爲警絕、史稱、上親製詩題、召詞臣同賦、以爲娛樂、而餘不概見、惜夫。

永延帝、披書見往事七律、雖語重累、而足見睿思正大。

長曆、永承、延久三帝御製、散見諸書者、皆隻句斷章、無有完者、延久帝、聰明善斷、大有爲之君、而在位僅五年而崩、宸章亦淪亡、殊可慨嘆、是時上距天智卽位四百三十年、帝崩

らず、實に是れ曠代の盛事なり、但平城、淳和の二帝の睿藻、傳ふる者多からず。

宇多天皇、殘菊を翫ぶ七絶あり、醍醐天皇、菅氏三代集を讀む七律あり、二帝の御製、止此れのみ。

邨上天皇、亦好文と稱す、傳ふる所の宮營曉囀の七絶、自ら以て警絶と爲す、史に稱す、上親ら詩題を製し、詞臣を召して同じく賦し、以て娛樂と爲すと、而して餘は概見せず、惜いかな。

永延帝書を披いて往事を見る七律、語重累と雖、而して睿思の正大を見るに足る。

長曆、永承、延久三帝の御製、諸書に散見するものは、皆隻句斷章、完き者あることなし、延久帝、聰明善斷、大に爲す有るの君なり、而して在位僅に五年にして崩し、宸章も亦淪亡す、殊に慨嘆すべし、是の時上天智の卽位を距ること四百三十年、帝崩じて後、文教漸く振はず、世方に和

後、文教漸不振、世方向和歌、陵夷迄乎保元
 平治、朝廷多故、經學文藝、併不復講者、幾乎
 百年、尙幸有嘉應帝內宴御製一首、見著聞
 集、當時應制作者十餘人、其詩無傳、嘉應帝
 崩後、歷十七帝百七十年、康永帝即位、元年
 春、宴以山家春興命題、御製詩曰、桃花流水
 洞中天、不記煙霞多少年、滿目風光塵土外、
 等閒逢著是神仙、意境間雅、語亦圓暢、當時
 應制詞臣二十二人、詩今存者僅九首、其中
 如僧貞乘曰、微風時送幽香至、似報前山花
 已開、藤國俊曰、遊絲百尺飄天上、不及山翁
 心緒閑、雖韻格不高、頗見巧致、是時南北戰
 爭、四郊多壘、而帝能以文雅帥臣僚、不亦偉
 乎、自康永至天正、又二百年、其間無簪藻見、

歌を尙ぶ、陵夷して保元平治に迄り、朝廷多故、經學文藝
 併せて復講せざるもの、百年に幾し、尙幸に嘉應帝內宴
 の御製一首あり、著聞集に見ゆ、當時應制の作者十餘人、
 其詩傳ふるなし、嘉應帝崩後、十七帝百七十年を撻て、康
 永帝即位す、元年の春、宴す、山家春興を以て題に命ず、御
 製の詩に曰く、桃花流水洞中の天、記せず、煙霞多少の年、
 滿目の風光塵土の外、等閒に逢著するは是れ神仙、と意
 境間雅、語も亦圓暢なり、當時應制の詞臣二十二人、詩今
 存する者僅に九首、其中僧貞乘、微風時に幽香を送り
 至る、前山花已に開くを報するに似たり」と曰ひ、藤國俊、
 「遊絲百尺天上に飄るは、及ばず山翁心緒の閑なるに」と
 曰ふが如き、韻格高からずと雖も、頗る巧致を見る、是の
 時南北戰爭、四郊壘多し、而して帝能く文雅を以て臣僚
 を帥ふ、亦偉ならずや、康永より天正に至る、又二百年、其
 の間簪藻の史冊に見ゆる者無し、文祿改元の後に至り
 て、天子源通勝に賜ふ御製の詩あり、豈、否極まりて而し
 て泰、元和文明の運、已に此に兆す者か。

史冊者、至文祿改元之後、有天子賜源通勝御製詩、蓋否極而泰、元和文明之運、已兆于此者歟。

皇子諸王之詩、大友、大津、葛野之外、大石王、山前王、仲雄王、犬上王、境部王、大伴王等、令藻見古選者、不過數首、獨長屋王、則有數十首、要之魯衛之政、若論其才俊、無出兼明親王、次則具平、輔仁耳、兼明、醍醐皇子、二品中務卿、世稱前中書王、是也、自幼好學、才識絕倫、帝愛重之、欲立爲太子、而執政憚其賢明、帝不得已、以承平帝爲東宮、兼明爲右大臣、賜姓源氏、復爲執政所忌、不能入居台司、退隱嵯峨、作菟裘賦、以見其志、賦中有曰、扶桑豈無影乎、浮雲掩而乍昏、叢蘭豈不芳乎、秋

皇子諸王之詩、大友、大津、葛野の外、大石王、山前王、仲雄王、犬上王、境部王、大伴王等の令藻、古選に見ゆべもの、數首に過ぎず、獨、長屋王は、則ち數十首あり、之を要するに、魯衛の政なり、若し其才俊を論ぜば、兼明親王に出るは無し、次は則ち具平、輔仁のみ、兼明は醍醐の皇子、二品中務卿なり、世に前の中書王と稱するは是なり、幼より學を好み、才識絶倫、帝之を愛重し、立て、太子と爲さんと欲す、而して執政其の賢明を憚かる、帝已むを得ず、承平帝を以て東宮と爲す、兼明、右大臣と爲り、姓を源氏と賜ふ、復執政の忌む所と爲り、久しく台司に居る能はず、嵯峨に退隱す、菟裘の賦を作り、以て其の志を見はす、賦中に曰ふあり、「扶桑豈に影無らんや、浮雲掩ふて乍ち昏し、叢蘭豈に芳しからざらんや、秋風吹て先づ敗ると、抑鬱の懷想ふべきなり、嘗て禁中の竹を詠す、逆筍纒に抽んづ、鳴鳳の管、蟠根猶點す、臥龍の文」と、稱して警拔と爲す、

風吹而先散、抑鬱之懷可想也。嘗詠禁中竹、
 迸筍纒抽鳴鳳管、蟠根猶點臥龍文、稱爲警
 拔、又詠養生方、三言、憶龜山雜言、真情暢達、
 其餘詩賦見古選者、往往可吟哦。

具平親王、邨上皇子、二品中務卿、世稱後中
 書王、題橋郎中遺稿七律、悲惋悽惻、一時傳
 稱、其結句曰、未會茫茫天道理、滿朝朱紫彼
 何人、蓋亦爲藤原氏發也、又遙山暮烟七律、
 精詣被賞一時。

輔仁親王、延久帝子、詠賣炭婦七律、用意懇
 惻、語亦平整、以親王尊貴、注情於此、豈不賢
 乎、保平以降、帝子徽音、寥乎無聞、唯有貞常、
 貞敦、兩親王遺篇而已、貞常親王、貞和帝曾
 孫、落葉七絕、見康富日記、枯梢寂寂夕陽、

又養生の方を記する三言、龜山を憶ふ雜言、真情暢達其
 の餘詩賦古選に見ゆるもの、往々吟哦すべし。

具平親王は、邨上の皇子、二品中務卿なり、世に後の中書
 王と稱す、橋郎中遺稿に題する七律、悲惋悽惻、一時傳稱
 す、其の結句に曰く、未た會せず茫茫たる天道の理、滿朝
 の朱紫彼れ何人ぞと、蓋亦藤原氏の爲めに發するなり
 又遙山暮烟の七律、精詣一時に賞せらる。

輔仁親王は、延久帝の子賣炭婦を詠する七律、用意懇惻、
 語も亦平整、親王の尊貴を以て、情を此に注ぐ、豈賢なら
 ずや、保平より以降、帝子の徽音、寥乎とし聞ゆるなし、唯
 貞常、貞敦、兩親王の遺篇あるのみ、貞常親王は、貞和帝の
 曾孫、落葉の七絶、康富日記に見ゆ、枯梢寂寂夕陽を帶ぶ
 滿砌の飄塵、蘚苔を擁す、道ふ莫れ晚風葉を吹き盡すと、
 老紅却つて恐る曉來の霜と、語差、嘸と雖、用意自ら工な

夕内哀詩、瓊籟振雅藻、金閣啓良遊、鳳駕飛雲路、龍車度漢流、駸駸乎王、楊盧駱、其次參議宇合、史稱、宇合有文武才、嘗爲聘唐使、風采可觀、四子兵部卿萬里、少長簪裾、而不忘邱壑、嘗曰、當今上有聖主、下有賢臣、我曹何爲、放浪琴酒、自稱聖代狂士、懷風藻、載暮春讌會詩曰、城市元非好、山園賞有餘、記其實也。

武智房前二公子孫、南北分宗、世官宰輔、椒聊蕃衍、衣冠滿朝、而篇章傳世者、武智曾孫三成、有漁家雜言、房前曾孫左大臣冬嗣、有奉和聖製宿舊宮七律、左京大夫衛、有奉和聖製春日感懷應制七絕、參議道雄、有詠雪七絕、玄孫彈正少忠、令緒、有早春遊望七律、

次は參議宇合、史に稱す、宇合、文武の才あり、嘗て聘唐使と爲ると、風采想ふべし、四子兵部卿萬里、簪裾に少長し、而して邱壑を忘れず、常に曰く、當今上に聖主あり、下に賢臣あり、我が曹何をか爲さんと、琴酒に放浪し、自ら聖代の狂士と稱す、懷風藻に暮春讌會の詩を載す、曰く、城市元と好きに非ず、山園賞餘りあり、と其實を記するなり。

武智房前二公の子孫、南北宗を分ち、世宰輔に官す、椒聊蕃衍、衣冠朝に滿つ、而して篇章世に傳ふる者は、武智の曾孫三成、漁家の雜言あり、房前の曾孫左大臣冬嗣、聖製舊宮に宿するに奉和する七律あり、左京大夫衛、聖製春日感懷に奉和する應制の七絶あり、參議道雄、雪を詠する七絶あり、玄孫彈正少忠、令緒、早春遊望の七律あり、其餘多きなし。

其餘無多。

中納言葛野、亦房前曾孫、有辭才、延曆中爲聘唐使、惜著作無傳、葛野子刑部卿常嗣、博學強識、少知名、承和中爲聘唐使、父子妙選、世以爲榮、常嗣詩見古選、秋日登叡山五言、近體中曰、仙梵窓中曙、疎鐘枕上清、清迥不凡。

左大臣時平、有秋日會城南水石亭、壽藏大師七十詩、水石亭、公別業、藏大師、大外記大藏善行、公少受業善行、因有斯舉、公以陷蒼公、獲罪名教、其人固不足道、而崇師也、重業也、輒近未得其比、當時右文好尙可想、史稱此會、一時名士畢集、藤氏勢焰固當爾、而亦善行之榮幸也、詩今存者二十餘首、紀發昭、

中納言葛野、亦房前の曾孫にして、辭才あり、延曆中聘唐使と爲る、惜らくは著作傳ふるなし、葛野の子刑部卿常嗣、博學強識、少ふして名を知らる、承和中に聘唐使と爲る、父子妙選、世以て榮と爲す、常嗣の詩古選に見ゆる、秋日叡山に登る五言近體中に曰く、仙梵窓中に曙け、疎鐘枕上に清し、と、清迥にして凡ならず。

左大臣時平、秋日城南水石亭に會し、藏大師の七十を壽する詩あり、水石亭は公の別業、藏大師は、大外記大藏の善行なり、公少くして業を善行に受く、因て斯の舉あり、公、蒼公を陥るゝを以て、罪を名教に獲たり、其の人固より道ふに足らず、而して師を崇び業を重んずるは、輒近未だ其の比を得ず、當時右文の好尙想ふべし、史に稱す、此の會、一時の名士畢く集まる、藤氏の勢焰、固より當に爾るべし、而して亦善行の榮幸なり、詩今存する者二十餘首、紀の發昭、三、清行亦其の中に在り、而して清行が七律、驪珠を得たり、其餘は鑄甲、把翫するに足るもの

三善清行亦在其中、而清行七律得驪珠、其餘麟甲、無足把翫者。

參議菅根、有才子譽、嘗被菅公薦引、後阿附左相、而傾菅公、其人固卑、惜秋翫殘菊七律、殊不雅馴、此寬平中內宴應制詩、同時作者二十餘人、今存十三首、而藤原氏七人、大納言定國亦有作詩、皆不足錄。

藤原氏權勢、至太政大臣道長、窮極滿盛、所謂男公女后、富逾帝室者、其侈麗豪華、震耀一時、而其人好詩善書、亦可嘉尚、公嘗創法成寺、世稱御堂公、又營別業於宇治、高閣層軒、擅流峙之勝、公數往遊、有詩云、別業嘗傳宇治名、暮雲路僻隔華京、柴門月靜眠、霜色茅店風寒宿、浪聲排戶遙看漁艇去、捲簾斜

なし。

參議菅根、才子の譽あり、嘗て菅公の薦引を被むる、後左相に阿附して菅公を傾く、其の人は固より卑し、秋を惜んで殘菊を翫ぶ七律、殊に雅馴ならず、此れ寬平中の内宴の應制の詩、同時の作者二十餘人、今十三首を存す、而して藤原氏七人、大納言定國も亦作詩あり、皆錄するに足らず。

藤原氏の權勢、太政大臣道長に至りて、窮極滿盛、謂はゆる男は公、女は后、富帝室に逾ゆるもの、其の侈麗豪華、一時に震耀す、而して其の人は詩を好み書を善くす、亦嘉尚すべし、公嘗て法成寺を創す、世に御堂公と稱す、又別業を宇治に營み、高閣層軒、流峙の勝を擅にす、公數往て遊ぶ詩あり、云ふ、別業嘗て傳ふ宇治の名、暮雲路僻にして華京を隔つ、柴門月靜にして霜色に眠り、茅店風寒くして浪聲に宿す、戸を排して遙に看る漁艇の去るを、簾を捲て斜に望む雁橋の横はるを、勝遊此の地人老い難し、秋興將に移らんとす、潘令が情と、意境蕭散、絶えて擢

望雁橋橫、勝遊此地人難老、秋興將移潘令情、意境蕭散絕無權貴相、公姪內大臣伊周、中納言隆家、竝好文詞、而淫兒無取、詩亦不韻。

大納言公任、世稱其多才、大江匡衡嘗評一時詩人、以公任敵齊信、余索其遺篇、寥寥罕傳、若夫題山川晴景七律、穉拙不成章、匡衡之言溢美耳。

參議有國、重陽陪宴七言長篇、用事錯綜、足見才思、但章法句法、未透、難入選耳、有國參議眞夏之後、其高祖、創建大利於洛南、日野自以爲大功德、繇是稱日野氏、其父輔道、對策高第、至有國、家聲益振、子孫世名于儒林、五品爲時、題玉井別莊七律、玉井佳名世所

貴の相なし、公の姪内大臣伊周、中納言隆家、竝に文詞を好む、而れども淫兒取るなし、詩も亦不韻なり。

大納言公任、世に其の多才を稱す、大江匡衡、嘗て一時の詩人を評し、公任を以て齊信に敵す、余其の遺篇を索むるに、寥寥傳ふる罕なり、夫の山川晴景に題する七律の若きは、穉拙章を成さず、匡衡の言は溢美のみ。

參議有國、重陽、宴に陪するの七言長篇、用事錯綜、才思を見るに足る、但章法句法未だ透らず、選に入り難きのみ、有國は參議眞夏の後、其の高祖、大利を洛南の日野に創建し、自ら以て大功德と爲す、是に繇りて日野氏を稱す、其の父輔道、對策高第、有國に至りて、家聲益と振ふ、子孫世、儒林に名あり。

五品爲時、玉井の別莊に題する七律、玉井の佳名世の稱

稱松楹半按碧岩稜、山雲繞屋應、養慢、澗月
 臨、窓欲代燈、梅吐、寒花朝見雪、水收、幽響夜
 知、冰、池邊何物相尋到、雁作來賓、鶴作朋、雖
 乏聲格、首尾勻稱、足稱合作、爲時女紫式部
 以著原語稱于世。

木工頭輔尹賦、醉時心勝醒時心、鄙俚可咲、
 而大江匡衡數稱其才、時論之不足憑、古今
 同憤憤。

大納言仲實、賦德配天地、右京大夫公章廻
 文體、及正時賦、日月光華、長頼賦、海水不揚
 波、公明敦隆、俱賦、走脚體、憲光、尹經、俱賦、班
 萬玉、皆試場詩、殊無佳者、正時以下六人、未詳官衡。

三品實綱、賀新成太極殿、右大辨有信、三月
 盡、中納言實光、咏傀儡、左大辨宗光、尙齒會

する所、松楹^{ナカカ}半按す碧岩稜、山雲屋を繞りて應に養を養
 くべし、澗月窓に臨んで燈に代んと欲す、梅は寒花を吐
 て朝に雪を見、水は幽響を收めて夜氷を知る、池邊何物
 か相尋ね到る、雁は來賓と作り鶴は朋と作る、乏聲格に
 乏しと雖、首尾勻稱合作と稱するに足る、爲時が女紫式
 部、源語を著すを以て世に稱せらる。

木工の頭輔尹、醉時の心は醒時の心に勝るを賦す、鄙俚
 咲ふべし、而して大江匡衡數其才を稱す、時論の憑るに
 足らざる、古今同しく憤々たり。

大納言仲實、德天地に配するを賦す、右京大夫公章の廻
 文體、及び正時の日月光華を賦する、長頼の海水波を揚
 げざるを賦する、公明敦隆の、俱に走脚體を賦する、憲光、
 尹經の俱に萬玉を班つを賦する、皆試場の詩、殊に佳な
 る者なし、正時以下六人、未だ官衡を詳にせず。

三品實綱の、新成太極殿を賀す、右大辨有信の三月盡、中
 納言實光の傀儡を咏す、左大辨宗光の尙齒會の詩、少納

詩、少納言敦光夏夜吟、四品實範遍照寺作、五品季綱東光寺作、茂明勸學院作、知房、秋日卽事、竝七言律、見古選、其中不無半聯雙句佳者、而瑕類相半、全佳者絕無、但知房、郊扉暮掩茶烟細、岫幌晴褰桂月幽、意匠間澹、全章亦不甚拙。

左衛門尉周光、冬日山家卽事、雖有小疵、自是胸臆中語、故平澹中反覺有味、史稱周光官仕不達、有北門嘆、雖居鞶帶、常瞻山林、余閱無題詩集、載周光詩多至百首、大抵山居題詠、則史言誠是。

左大辨顯業、三月遊長樂寺七律、寺比五臺形勝地、時當三月、艷陽天、山樓鐘盡孤雲外、林戶花飛落日前、字句工麗、金石鏗鏘、但起

言敦光の夏夜の吟、四品實範の遍照寺の作、五品季綱の東光寺の作、茂明の勸學院の作、知房の秋日卽事、竝に七言律、古選に見ゆ、其の中、半聯雙句の佳なる者無きにもあらず、而して瑕類相半し、全く佳なるもの絶て無し、但、知房の郊扉暮に掩ふて茶烟細に、岫幌晴に褰けて桂月幽なり、意匠間澹、全章も亦甚拙ならず。

左衛門の尉周光の、冬日山家卽事、小疵ありと雖、自ら是れ胸臆中の語、故に平澹中反つて味あるを覺ゆ、史に稱す、周光官仕達せず、北門の嘆あり、鞶帶に居ると雖、常に山林を瞻ると、余無題詩集を閱するに、周光の詩を載する、多きこと百首に至る、大抵山居の題詠、則史の言誠に是なり。

左大辨顯業の、三月長樂寺に遊ぶの七律、寺は比す五臺形勝の地、時は當る三月、艷陽の天、山樓鐘盡く孤雲の外、林戶花は飛ぶ落日の前、字句工麗、金石鏗鏘、但起結語はず、殊に惜むべきなり、余前古の選集を覽るに、騷人文士、

結不諧、殊可惜也。余覽前古選集、騷人文士、留題長樂寺者甚多、藤原氏則敦宗、季綱實象、並有七律、據其詩、殿堂之美、林泉之勝、巍然一大刹、今則不然、桑滄之變、物外亦然。

東宮學士明衡、花下陰、雖造語不合、意義自全、明衡、宇合之裔、編本朝文粹、有功於藝苑、不眇、其子刑部卿敦基、夙有詩名、風生林機、時疑雨、浪洗石稜、夏見花、一時傳稱。

少納言通憲、文章博士實兼子、保元帝乳母夫也、博學多通、辨給而有才略、少時不遇、嘗作詩曰、顧身深識榮枯理、在世偏慵遊宦心、遂薙髮更名信西、保元帝即位、登庸掌機密、持才果用、志在革弊政、而苛刻少恩、終以此敗、無題詩集多載其詩、其子俊憲、亦有詞才、

長樂寺に留題するもの甚多し、藤原氏には則敦宗、季綱實兼、並に七律あり、其の詩に據れば、殿堂の美、林泉の勝、巍然たる一大刹、今は則然らず、桑滄の變、物外も亦然り。

東宮學士の花下の陰、造語合はずと雖、意義、自ら全し、明衡は宇合の裔、本朝文粹を編す、藝苑に功あること、眇からず、其子刑部卿敦基、夙に詩名あり、風は林機に生じて時に雨かと疑ひ、浪は石稜を洗つて夏花を見る、と、一時傳稱す。

少納言通憲は、文章博士實兼の子、保元帝の乳母の夫なり、博學多通、辨給にして才略あり、少時不遇、嘗て詩を作りて曰く、身を顧みて深く識る榮枯の理、世に在りて偏に慵し遊宦の心、と、遂に薙髮して名を信西と更む、保元帝即位す、登庸せられて機密を掌る、才を恃んで用に果なり、志弊政を革むるに在りて、苛刻少恩、終に此を以て敗る、無題詩集に多く其の詩を載す、其子俊憲も亦詞才あり、官、參議に至る。

官至參議。

大政大臣忠通、相國忠實長子、相國懸車、代爲宰輔、後相國溺愛少子左大臣賴長、謀廢公、移政柄、而公奉承依依、恭順無虧、惟孝之德足頌、而加有好文之美、豈不偉乎、無題詩集載公詩九十首、間有諧合者、左相、公異母弟、少時穎敏、好學能詩、往使相國、教以義方、當爲棟梁偉材、而趨庭失訓、閱牆齋姦、保元禍亂、實階于此、如其著作、今猶傳世。

元久中内宴、題水郷春望、應制作者、今可徵者十九人、太政大臣良經、左大臣良輔以下、藤原氏十五人、中納言資實、中納言親經、式部大輔宗親、左大辨盛經、東宮學士賴範、文章博士宗業、大内記行長等、大率無足錄者。

大政大臣忠通は、相國忠實の長子、相國懸車、代つて宰輔となる、後、相國、少子左大臣賴長を溺愛し、公を廢して政柄を移さんことを謀る、而して公奉承依依、恭順虧くるなし、惟孝の德、頌するに足れり、而して加ふるに好文の美あり、豈偉ならずや、無題詩集に公の詩九十首を載す、間諧合するものあり、左相は公の異母弟なり、少時穎敏、學を好んで詩を能くす、往に相國をして教ふるに義方を以せしむれば、當に棟梁の偉材と爲るべし、而して趨庭、訓を失ひ、閱牆姦を齎へ、保元の禍亂、實に此に階す、其著作の如きは、今猶世に傳はる。

元久中の内宴、水郷春望と題する應制の作者、今徵すへき者、十九人、太政大臣良經、左大臣良輔以下、藤原氏十五人、中納言資實、中納言親經、式部大輔宗親、左大辨盛經、東宮學士賴範、文章博士宗業、大内記行長等、大率錄するに足るものなし。

建保内宴作者見古選者藤原氏九人詩殊無可覽者蓋保平以降朝綱解紐文學衰廢於是和歌特盛内宴詠言和歌爲主詩存餽羊耳其不精工不亦宜乎。

中納言基俊中納言定家並稱和歌巨匠有詩傳世固非其所長。

左大臣兼良有避亂江州水口驛遇雨作憶得三生石上緣一卷風雨夜無眠今日更下山前路老樹雲深哭杜鵑按史公才學該通和漢著作殊多四書童子訓其一也當時天步艱難公雖位幸輔南北播越憂虞度日而講明聖經操觚無廢此足以有紀也。

文明十五年足利相公第議會詩傳者十九首太政大臣政家左大臣實遠内大臣實淳

建保の内宴作者古選に見ゆる者は藤原氏九人詩殊に覽るべきものなし蓋保平より以降朝綱を解き文學衰廢す是に於て和歌特に盛んに内宴の詠言和歌を主となし詩は餽羊を存するのみ其の精工ならざる亦宜ならずや。

中納言基俊中納言定家並に和歌の巨匠と稱す詩あり世に傳ふるも固より其の長ずる所に非ず。

左大臣兼良亂を江州の水口驛ミナトに避け雨に遇ふ作あり憶ひ得たり三生石上の縁一卷の風雨夜眠るなし今日更に山前の路を下れば老樹雲深して杜鵑哭す史を按ずるに公才學和漢に該通し著作殊に多し四書童子訓は其一なり當時天步艱難公幸輔に位すと雖南北播越憂虞日を度る而して聖經を講明し操觚廢するなし此れ以て紀する有るに足るなり。

文明十五年足利相公の第の議會の詩傳ふるもの十九首太政大臣政家左大臣實遠内大臣實淳内大臣通秀左近衛大將冬良以下藤原氏十人なり文明上は建保を距

内大臣通秀、左近衛大將冬良以下、藤原氏十人、文明、上距、建保二百六十年、其詩較諸建保、反有可觀、蓋此時雖朝廷文教益廢替、五山禪林詩學盛興、朝紳或因其鼓盪爾歟、内大臣實隆、號逍遙院、致仕後詩云、三十年來朝市塵、扁舟歸去五湖春、平生慚愧無功業、合對白鷗終此身、每誡子弟曰、吾少年不努力、老來悲傷無及、汝曹宜勿傲、尤因課子弟、謄寫六經、及史記漢書等、世知公爲和歌巨擘、而不知有文學、故揭而出之。

右所錄外、藤原氏見諸集者、猶有數十人、以繁刪之云、其餘一聯一句、古今傳稱、而全章闕亡者、五品篤詠、砧擣處、曉愁聞月冷、裁將秋寄寒雲深、右馬頭季方、三月盡、林間縱有

ること二百六十年、其詩は諸を建保に較れば、反て觀るべきあり、蓋此の時朝廷の文教益廢替すと雖、五山禪林の詩學、盛に興る、朝紳或は其鼓盪に因りて爾るか。

内大臣實隆、逍遙院と號す、致仕して後の詩に云ふ、三十年來朝市の塵、扁舟歸り去る五湖の春、平生慚愧す功業なきを、合に白鷗に對して此の身を終ふべし、と、毎に子弟を誡めて曰く、吾れ少年努力せず、老來悲傷すとも及ぶことなし、汝が曹宜しく尤に傲ふこと勿れと、因て子弟に課して、六經及ひ史記漢書等を謄寫せしむ、世、公の和歌の巨擘たるを知りて、文學あることを知らず、故に掲げて之を出だす。

右に録する所の外、藤原氏の諸集に見ゆるもの、猶數十人あり、繁なるを以て之を刪ると云ふ、其餘一聯一句、古今傳誦して、全章闕亡するもの、五品篤の詠を詠するに「擣く處曉に闇月の冷なるを愁ひ、裁し將て秋寒雲の深きに寄す」と、右馬の頭季方の三月盡に、林間縱ひ殘花の

殘花在、留到明朝不是春。右少辨雅材晴景、
松江日落漁舟去、蘿洞雲開隱逕深。左中辨
維成江上作、客帆有月風千里、仙洞無人鶴
一雙、大納言齊信詠妓、秋月夜間聞、按曲金
風吹落玉簫聲等、不可枚舉、齊信名價重於
一時、而其詩不多見、使人嘆惋。

菅原氏、本姓土師、聖武天皇天平元年、賜侍
讀土師古人、姓菅原、古人子清公、夙有文名、
延曆中爲聘唐使、有汗州上源驛、值雪詩云、
雲霞未辭舊、梅柳忽逢春、不分瓊瑤屑、飛霰
旅客巾、歷官至左中辨、清公子是善、自幼聰
敏、才名顯著、官至參議。

菅原善主菅原清岡、諸家系譜不載三人、官職
失、攻、江家次第、以善主爲二
清岡經、春繁、林子以爲清公子、未知孰是、並有詠、應制五言排律、

在る有るも留めて明朝に到らば是れ春ならずと、右少
辨雅材の晴景に、松江日落ちて漁舟去り、蘿洞雲開いて
隱逕深し、左中辨維成の江上の作に、客帆月あり風千里、
仙洞人無く鶴一雙、大納言齊信の妓を詠するに、秋月夜
間にして曲を按ずるを聞き、金風吹き落す玉簫の聲等、
枚舉す可からず、齊信の名價一時に重し、而して、其詩多
く見えず、人をして嘆惋せしむ。

菅原氏、本姓は土師、聖武天皇天平元年、侍讀土師古人に
姓菅原を賜ふ、古人の子清公、夙に文名あり、延曆中聘唐
使となり、汗州上源驛雪に值ふ詩あり、云ふ、雲霞未だ舊
を辭せず、梅柳忽ち春に逢ふ、不分なり瓊瑤の屑、飛で旅
客の巾を沾すと、歷官して左中辨に至る、清公の子是善、
幼より聰敏、才名顯著、官參議に至る。

菅原善主、菅原清岡、諸家系譜、二人を載せず、官職、攻を失す、
す、春繁、林子以て清公の子と爲す、善主を以て清岡の姪と爲
す、未だ孰れか是なるを知らず。並に座を詠する、應制の五言
排律あり、中良舟、中良機、藤原關雄、皆此の題詠あり、必

中良舟、中良楸、藤原關雄皆有此題詠、必一時作較、其優劣、二管最超絕矣、二管詩、精工整密、力量相等、難爲兄弟、今竝錄、全首、以質貝眼者、善主云、大噫、籠群物、惟塵最細微、遇霖時、聚斂、承吹乍、霽、霖、洛浦生、神機、都城染、客衣、朝隨、行蓋起、春逐、去、軒、歸、動息常無定、徘徊何處、非、冀持、老、聘、旨、長、守、世、間、機、清岡云、微塵浮、大道、靄、靄、隱、垂、揚、色、暗、龍、媒、埒、形、飛、鳳、輦、場、徘徊、寧有、定、動息、固、無、常、逐、舞、生、羅、襪、驚、歌、繞、畫、梁、因、風、流、細、影、伴、雪、散、輕、光、無、由、逢、漢、主、空、此、轉、康、莊。

右大臣道眞是善子、自古儒臣官至台司者、吉備公之後、有公而已、公之德業、非特東方人士欽戴之、至於遐方異域、聞其風者、靡不

一時の作ならん、其の優劣を較ぶるに、二管最超絶す、二管の詩精工整密、力量相等し、兄弟たり難し、今竝に全首を錄し、以て貝眼の者に質す、善主云ふ、大噫、群物を籠む、惟塵最細微、霖に遇て時に聚斂し、吹を承て、乍、霽、霖、洛浦神機に生じ、都城客衣を染む、朝に行蓋に隨つて起り、暮に去軒を逐ふて歸る、動息常に定まる無し、徘徊何處か非なる、冀くは老聘が旨を持し、長く世間の機を守らん、と、清岡云ふ、微塵大道に浮び、靄々垂揚に隱る、色は暗し、龍媒の埒、形は埒、風輦の場、徘徊寧ぞ定まる有らん、動息固に常無し、舞を逐て羅襪に生じ、歌に驚て畫梁を繞る、風に因て細影を流し、雪に伴ふて輕光を散す、漢主に逢ふに由なし、空しく此に康莊に轉ず。

右大臣道眞は、是善の子、古より儒臣にして、官台司に至る者は、吉備公の後、公あるのみ、公の德業、特に東方人士之を欽戴するのみに非ず、遐方異域に至るまで、其の風を聞く者は、景仰せざるはなし、元の薩天錫明の宋濂輩

景仰、元薩天錫、明宋濂、輦歌一、歷歷可徵也、但世之口碑、往往失實、羅山林子辯駁之、更作公傳、文集十三卷、儼然具存、穆如之美、可得而見也、又如重陽侍宴、同賦菊、散一盞金、應制云、微臣探得簫中滿、豈若一經遺在家、其雅尚豈徒尋常文士之儔哉、宜乎廟祀千載、威靈顯赫、子孫繩繩、文獻世家也。

文章博士淳茂、右相次子、文才秀發、無愧箕裘、賦月影滿秋池、云、碧浪金波三五初、秋風計會似空虛、自疑荷葉凝霜早、人道蘆花過雨餘、岸白還迷松上鶴、潭澄可數藻中魚、瑤池便是尋常號、此夜清朋玉不如、蓋其少時作、稍見工密、惜起句逗漏。

大學頭文時、右相孫、大學頭高規子、世所稱

の歌詩、歴々微すべきなり、但世の口碑、往々實を失ふ、羅山林子之を辯駁し、更に公の傳を作る、文集十三卷、儼然として具存す、穆如の美得て見るべきなり、又重陽侍宴に、同じく菊は散す一盞の金を賦する、應制に云ふが如き、微臣探り得て簫中に滿つ、豈若かんや一經遺して家に在るに一と、其の雅尚、豈徒に尋常文士の儔ならんや、宜なるかな、廟祀千載、威靈顯赫、子孫繩々、文獻家を世にすることを。

文章博士淳茂は、右相の次子、文才秀發、箕裘に愧るなし、月影秋池に滿つるを賦し一云ふ、碧浪金波三五の初、秋風計會空虛に似たり、自ら疑ふ荷葉霜を凝す早きかと、人は道ふ蘆花雨を過す餘と、岸白ふして還て迷ふ松上の鶴、潭澄んで數ふべし、藻中の魚、瑤池は便ち是れ尋常の號、此の夜清明玉も如かずと、蓋其の少時の作、稍工密を見る、惜らくは起句逗漏するを。

大學の頭文時は、右相の孫、大學の頭高規の子、世に稱す

菅三品是也。辭才富逸、名價與大江朝綱相頡頏。題山中仙室云、桃李不言春幾暮、烟霞無跡昔誰棲、優柔平暢、元白遺響。又天曆中、應制賦宮鶯曉囀云、西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裡香、帝嘆嗟以爲不可及。兄左少辨雅規弟大學助庶幾子大學頭輔昭右衛門尉惟熙、從子右中辨資忠、皆有詩名、可謂一門蘭玉、追蹤謝家矣。

寛弘二年十一月、皇子始讀孝經、禮畢、帝詔詞臣獻詩、侍讀輔正侍讀宣義、竝有應制作、輔正、右相曾孫、宣義、文時孫、可見菅氏世能其業。

朝野群載、載菅才子沈春引一首、菅才子失其名、或曰、永久中人、詩無足觀者。

る所の菅三品是れなり、辭才富逸、名價、大江朝綱と相頡頏す、山中の仙室に題して云ふ、桃李言はず春幾たびか暮れ、烟霞跡なく昔誰か棲みし」と、優柔平暢、元白が遺響、又天曆中、制に應じて宮鶯曉囀を賦して云ふ、西樓月は落つ花間の曲、中殿燈は殘す竹裡の香」と、帝嘆嗟し、以て及ぶ可からずと爲す、兄左少辨雅規、弟大學助庶幾、子大學頭輔昭、右衛門尉惟熙、從子右中辨資忠、皆詩名あり、一門の蘭玉謝家に追隨すと謂ふべし。

寛弘二年十一月、皇子始て孝經を讀む、禮畢て、帝詞臣に詔して詩を獻せしむ、侍讀輔正侍讀宣義竝に應制の作あり、輔正は右相の曾孫、宣義は文時の孫、見るべし菅氏の世、其業を能くするを。

朝野群載に、菅才子の沈春引一首を載す、菅才子其の名を失す、或は曰く、永久中の人と、詩觀るに足るものなし。

大學頭是綱文章博士在良、大學頭時登、皆民部少輔定義子爲右相七世孫、墳籠相和才名並著、較其力量亦相伯仲矣、就中是綱長樂寺頭聯、樓閣高低隨地勢、林泉奇絕任天然、景象湊合、氣骨兼完。

文章博士爲長、大學頭在高、竝有水鄉春望七絕、俱非佳境。

文章博士在躬、刑部少輔忠貞、大學允永賴、五品斯宗、五品義明、皆稱善詩、而遺篇寥寥、難論造詣。

大江氏出於平城天皇、至參議音人、始以藝業顯著、世稱江相公是也、音人遺篇散亡、江談抄僅載花落一絕、尤非佳作、而談抄反以爲得意詩、何耶、音人子式部大輔千古、千古

大學頭是綱、文章博士在良、大學頭時登、皆民部少輔定義の子、右相七世の孫たり、墳籠相和し、才名竝び著はる、其の力量を較するに、亦相伯仲す、中ん就く是綱の長樂寺の頭聯に、樓閣高低地勢に隨ひ、林泉奇絶天然に任すと、景象湊合、氣骨兼ね完し。

文章博士爲長、大學頭在高、竝に水郷春望の七絶あり、俱に佳境に非ず。

文章博士在躬、刑部少輔忠貞、大學允永賴、五品斯宗、五品義明、皆詩を善くすと稱す、而して遺篇寥寥、造詣を論じ難し。

大江氏は平城天皇に出づ、參議音人に至り、始て藝業を以て顯著す、世に江相公と稱す、是なり、音人の遺篇散亡す、江談抄に僅に花落の一絶を載す、尤佳作に非ず、而して談抄反つて以て得意の詩と爲すは何ぞや、音人の子式部大輔千古、千古の子中納言維時、相紹で業を能くす、而

子中納言維時、相紹能業、而維時最知名、世稱江納言、二人詞藻亦復散逸、無足錄者。

參議朝綱、音人孫、天曆中、聲名藉甚、世稱後相公、以別音人、其詠王昭君七律、領聯云、邊風吹斷秋心緒、隴水流添夜淚行、寓巧思於平易、頸聯云、胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸、寄悲壯於幽渺、誠爲佳聯、惜乎起句率易、已失冠冕之體、結局卑陋、又絕玉振之響、世傳朝綱夢與唐白樂天論詩、爾後才思益進、蓋當時言詩者莫不尸祝元白、猶近時輕俊之徒、開口輒稱王元美、李于鱗也、朝綱名重藝苑、所以附會此說也。

文章博士以言千古會孫、夙有聲譽、嘗賦晴後山川、源爲憲、擊節嘆賞、今誦之、有大不協

して維時最名を知らる、世に江納言と稱す、二人の詞藻亦復散逸す、錄するに足るものなし。

參議朝綱は、音人の孫、天曆中、聲名藉甚、世に後の相公と稱し、以て音人に別つ、其王昭君を詠する七律の領聯に云ふ、邊風吹斷秋の心緒、隴水流は添ふ夜の淚行と、巧思を平易に寓す、頸聯に云ふ、胡角一聲霜後の夢、漢宮萬里月前の腸、悲壯を幽渺に寄す、誠佳聯たり、惜いかな起句率易、已に冠冕の體を失す、結局卑陋、又玉振の響を絶つ、世に傳ふ朝綱、夢に唐の白樂天と詩を論ず、爾後才思益々進むと、蓋當時詩をいふもの、元白を尸祝せざるは莫し、近時輕俊の徒、口を開けば輒王元美、李于鱗を稱するがごときなり、朝綱の名藝苑に重し、此の説を附會する所以なり。

文章博士以言は、千古の會孫、夙に聲譽あり、嘗て晴後の山川を賦す、源爲憲節を擊つて嘆賞す、今之を誦するに、大に協はざるものあり、又暮烟の七律、具平親王に及び

者、又暮烟七律、不及具平親王、惟間中日月
長一律、似勝他作、而領聯牽強不成句、江談
鈔曰、橋在列、不如源順、順不知慶保胤、胤不
如江以言、豈其然乎、談鈔、江帥門人所編錄、
故當云爾、噫、虛名溢美、何代不有。

式部大輔匡衡、維時孫、博學強記、文辭宏富、
世推大手筆、以待讀兩朝、歷任清要、加之累
世儒業、高自矜伐、作五言古詩一百韻、詳述
遭遇、他章亦多稱官闕、文集三卷、行于世、其
作類失粗豪、且不免俗習、雖饒篇什、無疵瑕
者無幾。

時棟、政時、二人譜第不詳、職位無考、詩各一
首、見朝野羣載。

掃部頭佐國、朝綱曾孫、性愛花卉、野史云、佐

才、惟間中日月長しの一律、他の作に勝るに似たり、而し
て領聯牽強句を成さず、江談鈔に曰く、橋在列は、源の順
に如かず、順は慶保胤に如かず、胤は江以言に如かずと
豈其れ然らんや、談鈔は、江帥の門人の編錄する所故に
當に爾か云ふべし、噫、虛名溢美、何の代にか有らざらん。

式部大輔匡衡、維時の孫、博學強記、文辭宏富、世大手筆を
推す、兩朝に侍讀し、清要に歷任し、之れに加ふるに、累世
の儒業なるを以て、高く自ら矜伐す、五言古詩一百韻を
作り、詳に遭遇を述ぶ、他の章も亦多く官闕を稱す、文集
三卷世に行はる、其の作類ね粗豪に失す、且俗習を免れ
ず、篇什饒しと雖、疵瑕なきもの幾もなし。

時棟、政時、二人譜第詳ならず、職位考ふるなし、詩各一
首、朝野群載に見ゆ。

掃部頭佐國は、朝綱の曾孫、性花卉を愛す、野史に云ふ佐

國死後化蝶、亦可證有花癖也、無題詩集多收其詩、大抵憐芳惜香之作、其中云、六十餘春看不足、他生亦作愛花人、溫藉脫落、余最嘉之、又有觀宋國商人獻鸚鵡四韻云、巧語能言同辨士、綠衣紅嘴異衆禽、可憐船上經遠海、誰識羈中憶、鄧林著實明暢、語有次第、當時詠物、無出此右者、惜起結不稱耳、余論大江氏朝綱上襄、佐國雁行、其他往往名浮其實。

中納言匡房、匡衡曾孫、博涉群籍、學通古今、最留意國家典章、以八葉儒家、三朝侍讀、名重朝野、嘗爲太宰帥、世稱江帥、其在宰府、詣菅公廟、作二百韻詩、盛傳一時、其他大篇巨什、宛見諸書、而造語淺率卑近、無足採者、但

國死後蝶に化すと、亦花癖あるを證すべきなり、無題詩集に多く其の詩を收む、大抵芳を憐み香を惜むの作其中に云ふ、六十餘春看れども足らず、他生も亦花を愛するの人と作らんと、溫藉脫落、余最之れを嘉す、又宋國の商人鸚鵡を獻するを觀る四韻あり、云ふ、巧語能言辨士に同じ、綠衣紅嘴衆禽に異なり、憐むべし、船上遠海を經るを、誰か識らん、羈中鄧林を憶ふを、と、著實明暢語に次第あり、當時の詠物、此の右に出る者なし、惜らくは起結稱はざるのみ、余大江氏を論ずるに、朝綱は上襄す、佐國は雁行す、其の他は、往々名其の實に浮く。

中納言匡房は、匡衡の曾孫、博く群籍に涉り、學古今に通ず、最も意を國家の典章に留む、八葉の儒家、三朝の侍讀なるを以て、名、朝野に重し、嘗て太宰の帥となる、世に江帥と稱す、其の宰府に在るや、菅公の廟に詣り、二百韻の詩を作る、盛んに一時に傳ふ、其の他大篇巨什、諸書に經見す、而して造語淺率卑近、採るに足る者なし、但著す所江次第、今に至るまで世に行はる、之れを要するに、才、綜

所著江次第、至今行于世、要之才敏綜覈、而自運非其所長也、子式部大輔隆兼、詩才出藍、不幸早世。

紀氏、武内之後、武内十三世孫大納言紀麻呂、有春日應制詩、麻呂子式部大輔古麻呂、有詠雪詩、俱載懷風藻、麻呂父子之詩、接武乎大津葛野二王、而爲公卿先觀、諸氏詠言、皆買其餘勇。

太宰大貳男人、遊芳野、越前守末茂、觀魚、民部少輔末守送別、三詩古朴、體格未具、不可加以三尺也。

御依也、虎繼也、紀氏系譜不收、官職無考、御依有應制賦、落花七言歌行、蓋弘仁帝幸河陽離宮、有落花御製、從幸詞臣、應制奉和、而

觀に敏にして、自運は其の所長に非ざるなり、子式部大輔隆兼、詩才出藍、不幸にして早世す。

紀氏は武内の後、武内十三世の孫、大納言紀麻呂、春日應制の詩あり、麻呂の子式部大輔古麻呂、詠雪の詩あり、俱に懷風藻に載す、麻呂父子の詩、大津、葛野二王に接武し、而して公卿の先觀となる、諸氏の詠言、皆其餘勇を賣ふなり。

太宰大貳男人の芳野に遊ぶ、越前守末茂の觀魚、民部少輔末守の送別、三詩古朴、體格未だ具はらず、加ふるに三尺を以てすべからざるなり。

御依や、虎繼や、紀氏の系譜に收めず、官職考ふるなし、御依に應制落花を賦する七言歌行あり、蓋弘仁帝河陽の離宮に幸し、落花の御製あり、從幸の詞臣、應制奉和、而して諸詩散逸す、今存するもの、御依を除く外、坂田永河の長

諸詩散逸、今存者、除御依外、有坂田永河長篇一首已、永河之詩、綵縵可觀、御依不及、遠甚、虎繼省試賦、荆璞五言排律、中聯云、潛光深谷裏、韜彩古巖邊、價逐千金重、形將滿月圓、冰霜還謝潔、金石豈齊堅、精工純至、可稱佳絕。

式部丞長江麻呂玄孫、有紅梅詩。

中納言發昭、字寬寬平、延喜之際、名聲藉甚、至時人與菅右相並稱、余閱其遺篇、殊不及所聞、諸選所收貧女吟、眞兒童語耳、特山家棟詠八首、稍有瀟洒致、其子參議叔光、亦有詩名、延喜中、藤左相、水石亭賀宴、發昭父子、並列其席、叔光之後、紀氏無顯者、至康永中、有紀行親者、山家春興云、不識黃鸝棲樹底、

篇一首あるのみ、永河の詩綵縵觀るべし、御依は及ばざる遠く甚し、虎繼の省試に荆璞を賦す五言排律の中聯に云ふ、光を潛む深谷の裏、彩を韜む古巖の邊、價は千金を逐て重く、形は滿月を將て圓なり、冰霜還て潔を謝し、金石も豈堅を齊しふせんや」と精工純至、佳絶と稱すべし。

式部丞長江は、麻呂の玄孫、紅梅の詩あり。

中納言發昭は、字は寬寬平、延喜の際、名聲藉甚、時人菅右相と並稱するに至る、余其遺篇を閱するに、殊に聞所く不及ばず、諸選に收むる所の貧女吟、眞に兒童の語のみ、特に山家棟詠八首、瀟洒の致あり、其子參議叔光も、亦詩名あり、延喜中、藤左相、水石亭の賀宴に、發昭父子、並に其の席に列す、叔光の後、紀氏顯るものなし、康永中に至り、紀行親といふ者あり、山家春興に云ふ、識らず黃鸝樹底に棲むを、一聲啼破滿山の霞と、稍幽況あり、惜むらくは霞の字未だ俗を免れず。

一聲啼破滿山霞。稍有幽況惜霞字未免俗。

紀在昌岸竹枝低應鳥宿潭荷葉動是魚遊
紀齊名仙白風生空簸雪野爐火暖未揚爐
二聯見朗詠集竝逸首尾齊名有重名江帥
嘗評當時詩人曰齊名之詩如雪朝上瑤臺
彈玉箏惜遺稿不傳瑤臺雪色無可髣髴

橘氏至常重始見藝林而世次官銜竝無所
攷經國集載秋虹一律。

橘在列詩名高世亦闕系譜源順嘗師事焉
在列後爲僧更名尊敬亡後順爲輯遺稿名
敬公集今存者小作數篇已。

宮内少輔正通或曰在列子有俊才而官不
達居恆悒悒有浮海之嘆後挈家奔高麗爲
彼國大臣其贈藤在衡云吏部侍郎職侍中

紀の在昌の岸竹枝は低る應に鳥の宿するなるべし潭
荷葉動く是魚遊紀の齊名の仙白風生して空しく雪を
簸す野爐火暖にして未だ烟を揚げず二聯朗詠集に見
ゆ竝に首尾を逸す齊名軍名あり江帥嘗て當時の詩人
を評して曰齊名の詩は雪朝に瑤臺に上りて玉箏を彈
するが如し惜くは遺稿傳はらず瑤臺の雪色髣髴すべ
きなし。

橘氏は常重に至りて始めて藝林に見はる而して世次
官銜竝に攷ふる所なし經國集に秋虹の一律を載す。

橘の在列は詩名世に高し亦系譜を闕く源順嘗て師事
す。在列後に僧と爲り名を尊敬と更む亡後順爲めに遺
稿を輯して敬公集と名く今存するものは小作數篇の
み。

宮内少輔正通或曰く在別の子と俊才ありて官達せず
居恆悒々浮海の嘆あり後家を挈げ高麗に奔り彼國の
大臣となる其の藤在衡に贈るに云ふ吏部侍郎職侍中
綬を著て初て出づ紫微宮銀魚腰底春浪を辭し綬鶴衣

著、耕初出紫微宮、銀魚腰底醉、春浪、綾鶴衣、
 間舞、曉風、花月一牕交、昔密、雲泥萬里眼、今
 窮、省躬還恥、相知久、君是當年竹馬童、其歛、
 羨在衡之超選、悽惻自己之坎涼者、淋漓乎
 楮墨間、其棄組投、遐理或有之。

東宮學士直幹、才思拔群、而遺藻泯闕、殊可
 惜也、其斷篇隻聯、散見諸書者、皆可稱賞、贈
 隣家云、春烟遞讓、簾前色、曉浪潛分、枕上聲、
 宿山寺云、觸石春雲生、枕上、含峯曉、月出窓
 中、又、遊石山寺云、蒼波路遠、雲千里、白霧山
 深、鳥一聲、僧齋然在宋國、雲爲霞、鳥爲蟲、以
 爲己作、示人、彼中人曰、若作雲鳥、乃佳。

左大辨廣相、幼而能詩、九歲召見、屬春暮、應
 詔云、荒邨桃李猶可愛、何況瓊林華苑春、又

三〇
 間曉風に舞ふ、花月一牕交り昔密、雲泥萬里眼、今窮る、躬
 を省て還て相知の久きを恥す、君は是當年竹馬の童と、
 其の在衡の超選を歎羨し、自己の坎涼を悽惻するもの、
 楮墨の間に淋漓たり、其の組を棄て遐に投する、理或は
 之れあらん。

東宮博士直幹は才思拔群、而して遺藻泯闕す、殊に惜む
 べきなり、其斷篇隻聯の諸書に散見する者、皆稱賞す、
 し隣家に贈るに云ふ、春烟遞に讓る簾前の色、曉浪潛に
 分つ枕上の聲、山寺に宿するに云ふ、石に觸るゝ春雲、枕
 上に生じ、峯を含む曉月窓中に出づ、又石山寺に遊ぶに
 云ふ、蒼波路は遠し雲千里、白霧山は深し鳥一聲、僧齋然
 宋國に在りて、雲を霞と爲し、鳥を蟲と爲し、以て己れが
 作と爲し、人に示す、彼の中の人曰く、若し雲鳥に作らば
 乃佳ならんと。

左大辨廣相は幼にして詩を能くす、九歲にして召見す、
 春暮に屬す、詔に應じて云ふ、荒邨の桃李猶愛すべし、何
 ぞ況んや瓊林華苑の春と、又項羽に題して云ふ、燈は暗

題項羽云、燈暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲、皆非全篇、又作神護寺鐘序、皆是善銘、藤敏行書、世以爲三絕。

源氏、宗統非一、右大臣常大納言弘參、議明、皆弘仁帝子、賜源姓者、經國集載其前、且錄年紀、常十六、弘十五、明十三、其夙慧可知、而三首之外、無復隻字、經國集殘缺、十亡其七、無由考索耳。

大納言湛、弘仁帝孫、有詩見經國集。

能登守順、弘仁帝玄孫、學該和漢、所著和名鈔行于世、詩篇傳者不多、而詠白七言律、當時稱之、起句云、銀河澄朗素秋天、又見林園玉露圓、誠佳、三四云、毛寶龜歸寒浪底、王弘使立晚花前、已非佳境、五云、蘆洲月色隨潮

し數行虞氏の涙、夜は深し四面楚歌の聲と、皆全篇に非ず、又神護寺の鐘の序を作る、皆是善の銘、藤敏行の書、世以て三絶と爲す。

源氏、宗統一に非ず、右大臣常大納言弘參、議明、皆弘仁帝の子、源姓を賜ふ者、經國集に其詩を載せ、且年紀を録す、常は十六、弘は十五、明は十三、其夙慧知る可し、而して三首の外復隻字無し、經國集殘缺し、十に其七を亡す、考索するに由なきのみ。

大納言湛は弘仁帝の孫、詩あり、經國集に見ゆ。

能登守順は、弘仁帝の玄孫、學和漢を該ぬ、著す所和名鈔世に行はる、詩篇傳ふるもの多からず、而して白を詠する七言律、當時之を稱す、起句に云ふ、銀河澄朗素秋の天、又見る林園玉露の圓なるを」と、誠に佳なり、三四に云ふ、「毛寶が龜は歸る寒浪の底、王弘が使は立つ晚花の前」と、已に佳境に非ず、五に云ふ、蘆洲の月色潮に隨て滿つ」と、大に精彩あり、而して對するに「葱嶺の雲膚雲と連なる」

滿、大有精彩、而對以葱嶺雲膚與雪連、癡重殊甚、不惟一聯偏枯、全章爲廢、可惜。

左近衛中將英明、系屬寬平帝、菅右相外孫也、嘆二毛、五言古風、自叙履歷、讀之潸然、語亦不拙。

大納言俊賢、越前守則忠、皆延喜帝之後、篇什僅存、俊賢博洽、有重望、著西宮記、行于世。大納言經信、才藝多方、廟議廷論、亦卓越一時、詩雖無警拔、音響頗平。

伊賀守爲憲、近體數首、散見諸書、其才不及經信。

孝道也、道濟也、時綱也、未詳其譜系、官階詩則竝傳、就中時綱最名世、賦宮中薔薇云、薔薇一種當階發、不置色濃、氣亦薰、紅萼風輕

を以てす、癡重殊に甚し、惟一聯偏枯のみにあらず、全章爲めに廢す、惜むべし。

左近衛中將英明は、系は寬平帝に屬す、菅右相の外孫なり、二毛を嘆する五言古風、自ら履歷を叙す、之れを讀めば潸然たり、語も亦拙ならず。

大納言俊賢、越前守則忠は、皆延喜帝の後、篇什僅に存す、俊賢博洽にして重望あり、西宮記を著し、世々行はる。

大納言經信は、才藝多方、廟議廷論、亦一時に卓越す、詩は警拔なしと雖、音響頗る平なり。

伊賀守爲憲は、近體數首、諸書に散見す、其の才經信に及ばず。

孝道や、道濟や、時綱や、未だ其の譜系官階を詳にせず、詩は則竝に傳はる、中に就いて、時綱最世に名あり、宮中の薔薇を賦して云ふ、薔薇一種階に當りて發く、香に色の濃のみにあらず、氣も亦薰す、紅萼風は輕くして、錦傘を搖

搖錦傘、翠條露重、扇羅裙、飽看新艷嬌。官月、殊勝陳根託、澗雲、石竹金錢雖、信美、嘗論、優劣更非群、審微澗見、白樂天詩、末句亦用樂天石竹金錢何瑣細之義。

平氏延曆以前已有之、文華秀麗集載、平五月詩、五月孫有相、亦有詩名、若夫保平之間、宗族滋蔓、貂蟬滿朝者、則皆桓武之裔也、而以文雅稱者、無幾、後有參議經高、勸解由次官棟基等詩、皆不足採擇。

小野氏、弘仁中、參議岑守、以文章司命、自居所、選凌雲集、多載、已作、今閱之、合作絕無。

小野永見、有田家詩、小野年永、有新燕詩、永見爲征夷副帥、開府陸奥、擁旌杖節、而眷戀桑麻、其意可嘉、詩亦不拙、年永不詳履歷。

かし、翠條露は重くして羅裙（よせ）なり、飽まで看る新艷の官月に嬌（コト）るを、殊に勝る陳根の澗雲に託するに、石竹金錢信に美なりと雖、嘗て優劣を論ぜば更に群に非ずと、審微澗は白樂天の詩に見ゆ、末句も亦樂天の「石竹金錢何ぞ瑣細なる」の義を用ふ。

平氏は延曆以前已に之れあり、文華秀麗集に、平五月の詩を載す、五月の孫有相も、亦詩名あり、夫の保平の間、宗族滋蔓、貂蟬朝に滿つる者の若きは、則皆桓武の裔なり、而して文雅を以て稱せらるゝ者幾（いくばく）もなし、後參議經高、勸解由次官棟基等の詩あり、皆採擇するに足らず。

小野氏は、弘仁中、參議岑守、文章の司命を以て自ら居る、選ぶ所の凌雲集、多く己が作を載す、今之を閱するに合作絶えて無し。

小野永見に、田家の詩あり、小野年永に、新燕の詩あり、永見は征夷副帥と爲り、府を陸奥に開く、旌を擁し節を杖く、而して桑麻に眷戀す、其意嘉すべし、詩も亦拙ならず、年永は履歷を詳にせず。

參議、篤博學、能文、名聲震世。至今閭閻兒女莫不知其名。經國集載其詩數首。如隴頭秋月明六韻、骨氣韻格直逼盛唐。而造語間失疎鹵、可惜。

春卿滋陰、官職竝無考。春卿省試照膽鏡長律、上半頗能鋪陳、下半猥劣殊甚。然題已險艱、近時作家恐難遮措辭、滋陰殘菊應制、金葩留北闕、玉蕊少東籬、親切題意。以下所系諸官職、多不可考者、姑記其姓名、以附重致、不復一一識別。

大伴氏出自道臣命、大納言旅人、春日應制四韻、見懷風藻、典實得體、旅人子中納言家持、上巳遊宴詩、見萬葉集、家持領節鉞於奧羽、文武竝稱。

大伴池主、有上巳詩、見萬葉集、大伴氏上有

參議、篤博學にして文を能くす、名聲世に震ふ、今に至るまで閭閻の兒女も、其名を知らざるはなし、經國集に其の詩數首を載す、隴頭秋月明の六韻の如きは、骨氣韻格、直に盛唐に逼る、而して造語間、疎鹵に失す、惜むべし

春卿、滋陰、官職竝に考ふるなし、春卿の省試照膽鏡の長律、上半頗能く鋪陳す、下半猥劣殊に甚し、然も題已に險艱、近時の作家と雖、恐くは遮に辭を措き難からん、滋陰の殘菊の應制に、金葩北闕に留まり、玉蕊東籬に少なりと、題意に親切なり、以下錄する所の詩人、系諸官職、考ふべからざる者多し、姑く其の姓名を記し、以て重致に附す、復一々識別せず。

大伴氏は、道臣の命より出づ、大納言旅人、春日應制の四韻、懷風藻に見ゆ、典實體を得たり、旅人の子中納言家持、上巳遊宴の詩は、萬葉集に見ゆ、家持節鉞を奧羽に領し、文武竝び稱せらる。

大伴の池主は、上巳の詩あり、萬葉集に見ゆ、大伴の氏上

觀渤海貢使入朝七言律、見凌雲集、渤海朝貢始末、具見舊史、後遼太祖滅渤海、改爲東丹國、以長子倍爲東丹王、其地瀕北海、明時名哈密者、

都氏、本桑原氏、相傳後漢靈帝之後、宮造伏枕吟、明賦體、語多悽惻、廣田詠、水中影、五言律、雖頗工、語不雅馴、至腹赤、更姓都氏、其子文章博士良香、詩名最著、如氣霽風梳、新柳髮、冰消波洗、舊苔鬢、三千世界眼中盡、十二因緣心裡空等、膾炙于世、皆非全章、集若干卷、今存文三卷、後來都在中擣衣篇、稍可諷詠。

三善氏、或曰、百濟國王之後也、參議清行、字耀、博學洽聞、器識高遠、文名烜赫乎一時、世

に渤海の貢使の入朝を觀る七言律あり、凌雲集に見ゆ、渤海朝貢の始末、具に舊史に見ゆ、後遼の太祖渤海を滅し、改めて東丹國と爲し、長子倍を以て東丹王となす、其地北海に瀕す、明の時哈密と名くるものなり。

都氏は、本と桑原氏相傳ふ後漢の靈帝の後と、宮造の伏枕の吟、賦體を用ふ、語悽惻多し、廣田の水中の影を詠する五言律、頗工なりと雖、語雅馴ならず、腹赤に至りて姓を都氏と更む、其の子、文章博士良香、詩名最著はる、氣霽て風新柳の髮を梳り、冰消て波舊苔の鬢を洗ふ、三千世界眼中に盡き、十二因緣心裡に空し等の如き、世に膾炙す、皆全章に非ず、集若干卷、今、文三卷を存す、後來都在中の擣衣篇、稍諷詠すべし。

三善氏は、或は曰く、百濟國王の後なりと、參議清行、字は耀、博學洽聞、器識高遠、文名一時に烜赫たり、世對するに紀發昭を以てす、又大藏善行と並稱す、皆篤論に非ざる

對以紀發昭、又與大藏善行並稱皆非篤論也。藤左相賀宴詩、今存者十九首、清行七律在其中、不但野鶴雞群也、如紫芝未變南山想、丹露猶凝北闕心、直是錢劉堂奧、發昭善行、豈得望其影塵乎、延喜十四年、上封事、論列十二條、又因星變、勸菅公致仕、公左遷後、禁錮諸菅、及門生故吏、人知其冤、無敢言者、而清行上疏論救、其忠憤義烈、前後儒臣、未覩其儔、豈徒文辭超絕時輩哉、特怪其子孫無聞于藝苑、果無其人歟、抑失其傳歟、後來有三善爲康古風一篇、其中云、逕蓬滋兮藥、泉石清兮磷磷、勞丹心於虎館、曝紅鱗於龍津、鶯衰鶯於霜雪、灑老淚於衣巾、寓旨可悲、語亦淳雅、爲康著朝野群載、行于世。

なり、藤左相賀宴の詩今存する者十九首、清行か七律、其の中に在り、但野鶴の雞群のみならざるなり、紫芝未だ變ぜず南山の想、丹露猶凝らす北闕の心の如き、直に是錢劉が堂奧、發昭善行、豈其の影塵を望むを得んや、延喜十四年、封事を上り、十二條を論列し、又星變に因て菅公に致仕を勸む、公左遷の後、諸菅を禁錮し、門生故吏に及ぶ、人其の冤を知れども、敢て言ふ者なし、而して清行上疏して論救す、其の忠憤義烈、前後の儒臣、未だ其の儔を覩ず、豈徒に文辭の時輩に超絶するのみならず、特に怪む其の子孫藝苑に聞ゆるなし、果して其人なきか、抑其傳を失へるか、後來三善爲康の古風一篇あり、其中に云ふ、逕蓬滋くして藥々、泉石清くして磷々、丹心を虎館に勞し、紅鱗を龍津に曝す、鶯衰を霜雪に驚き、老淚を衣巾に灑ぐと、寓旨悲むべし、語も亦淳雅爲康朝野群載を著はし、世に行はる。

惟良氏、亦百濟王之後、弘仁中、有惟山人春道者、山寺作云、紗燈點點千岑夕、月磬寥寥五夜心、又惟良高尙宮中殘菊云、莫問孤叢留野外、唯知一種在宮闈、襲人香氣寧因火、學錦文章不用機。

安倍氏、首名詩見懷風藻、廣庭詩見凌雲集、吉人詩見秀麗集、皆不足採、唯文繼晚秋、朝煙有色看深淺、夕鳥無心關往來、可謂以澹調駕巧思矣。

大神高市、大神安麻呂、中臣大島、中臣人足詩、竝見懷風藻、高市在持統朝、以忠諫骨鯁見稱、大島詩、葉落山逾靜、有味。

坂上今繼、信濃道中云、奇石千重峻、長途九折分、人迷邊地雪、馬蹶半天雲、崖冷花難發、

惟良氏も、亦百濟王の後、弘仁中、惟山人春道といふものあり、山寺の作に云ふ、紗燈點々千岑の夕、月磬寥寥五夜の心と、又惟良高尙の宮中の殘菊に云ふ、問ふ莫れ孤叢野外に留まるを、唯知る一種宮闈に在るを、人を襲ふ香氣寧ぞ火に因らんや、錦を學ぶ文章機を用ひずと。

安倍氏、首名の詩は懷風藻に見ゆ、廣庭の詩は凌雲集に見ゆ、吉人の詩は秀麗集に見ゆ、皆採るに足らず、唯文繼の晚秋に、朝煙色あり深淺を見る、夕鳥無心關に往來すと、澹調を以て巧思を駕すと謂ふべし。

大神高市、大神安麻呂、中臣大島、中臣人足の詩、竝に懷風藻に見ゆ、高市は持統の朝に在り、忠諫骨鯁を以て稱せらる、大島の詩に、葉落ちて山逾靜なりと、味あり。

坂上今繼の、信濃道中に云ふ、奇石千重峻、長途九折分る、人は迷ふ邊地の雪、馬は蹶む半天の雲、崖冷にして花發き難く、溪深くして景曠し易し、鴻關何れの處にか在

溪深景曠、鄉關何處在、客思日紛紛、整齊
縝密、可謂合作、而當時無稱何也、坂上今雄
送渤海使云、大海元難涉、孤舟未易廻、不如
關塞雁、春去復秋來、婉而有致。

中科善雄、有月三更靜、無人四壁幽、大是佳
境。

良岑安世、桓武皇子賜姓者、著作甚富、而大
率碌碌。

慶滋保胤也、賀陽豐年也、朝野鹿取也、當時
甚有聲譽、而遺詩皆不滿人意、菅野真道撰
續日本紀、文才可想、而詩殊不諧。

善爲政遊、東光寺、中原康富、寒山、多治比清
貞、衰柳、錦部彥公題、僧院、勇山、文雄、宴遊、高
邱茅、越神泉苑、應制、上毛野、穎人、田家、田口

る、客思日に紛々」と、整齊縝密、合作と謂ふべし、而して當時稱する無きは何ぞや、坂上今雄の、渤海の使を送るに云ふ、大海元涉り難し、孤舟未だ廻し易からず、如かず關塞の雁、春去りて復秋來るに、婉にして致あり。

中科善雄の、月あり三更靜に、人無く四壁幽なり」と、大に是れ佳境なり。

良岑安世は、桓武の皇子にして姓を賜ふ者、著作甚富む、而して大率碌々たり。

慶滋保胤や、賀陽豐年や、朝野鹿取や、當時甚聲譽あり、而して遺詩皆人意に満たず、菅野真道撰、日本紀を撰す、文才想ふべし、而して詩殊に諧はず。

善爲政の東光寺に遊ぶ、中原康富の寒山、多治比清貞の衰柳、錦部彥公の僧院に題する、勇山文雄の宴遊、高邱茅越の神泉苑の應制、上毛野、穎人の田家、田口連音の秋日等、古選の載する所、稍觀るべきに足る、其の他林婆娑の

達音秋日等、古選所載、稍足可觀、其他、林婆
 娑懷古、淡海福良田家、王孝廉侍宴、宮部邨
 繼過古關、三原春上梵釋寺、朝原道永揚春
 師、巧諸勝、大枝永野、竝詠雪、笠仲守冬日、高
 邨田使梅花、和氣廣世落梅花、布瑠高庭小
 池、常光守歲除、治文雄建除體等、雖入古選、
 皆不足錄。

南淵永河、南淵弘貞賦、梁淨野夏嗣詠屏、石
 川廣主詠鬼、大枝直臣詠燕、路永名賦、三數、
 清原真友字訓詩、伴成益、東平樹、鳥高名寶
 雞祠、春澄善繩挑燈杖、大枝磯、麻呂麩桐等、
 皆弘仁中制題、惜時無良工、陶冶未盡、是以
 荆璞纔剖、而砥碇盈箱、鐘鼓畢陳、而蕭韶遠
 響、諸臣詠物、往往拙累、唯夏嗣、永河二詩能

懷古、淡海福良の田家、王孝廉の侍宴、宮部邨繼の古關を
 過ぐ、三原春上の梵釋寺、朝原道永、揚春師、巧諸勝、大枝永
 野、竝に雪を詠ず、笠仲守の冬日、高邨田使の梅花、和氣廣
 世の落梅花、布瑠高庭の小池、常光守の歲除、治文雄の建
 除體等、古選に入ると雖皆錄するに足らず。

南淵永河、南淵弘貞の梁を賦する、淨野夏嗣の屏を詠ず
 る、石川廣主の鬼を詠する、大枝直臣の燕を詠する、路永
 名の三數を賦する、清原真友の字訓の詩、伴成益の東平
 樹、鳥高名の寶雞祠、春澄善繩の挑燈杖、大枝磯、麻呂の麩
 桐等、皆弘仁中の制題、惜らくは時に良工なく、陶冶未だ
 盡くさず、是を以て荆璞纔に剖かれて、砥碇箱に盈ち、鐘
 鼓畢く陳ねて、蕭韶響を遠ざく、諸臣の詠物、往々拙累な
 り、唯、夏嗣、永河の二詩能く題義に協ふ、語も亦清爽なり。

協題義、語亦清爽。

古昔詩人見諸書者、右所錄外、有巨勢多益、美努淨麻呂、調老人、荆助仁、吉知香、刀利康、嗣田邊百枝、石川石足、道公、首名山田三方、息長、臣足、黃文、連備、越智廣江、春日藏、老背、名行文、調古麻呂、刀利宣、令田中淨足、守部大隅丹墀、廣成、高向、諸足、麻田陽春、葛井廣成、高階積善、文室尙相、大和宗雄、島田惟上、島田惟宗、伊與部馬養、采女比良夫、下毛野蟲、麻呂百濟和麻呂、箭集蟲麻呂、伊伎古麻呂、石上乙麻呂等、以繁不錄。

日本詩史卷之一 終

古昔の詩人諸書に見ゆる者、右に録する所の外、巨勢多益、美努淨麻呂、調老人、荆助仁、吉知香、刀利康、田邊百枝、石川石足、道公道名、山田三方、息長、臣足、黃文、連備、越智廣江、春日藏、老背、名行文、調古麻呂、刀利宣、令田中淨足、守部大隅、丹墀、廣成、高向、諸足、麻田陽春、葛井廣成、高階積善、文室尙相、大和宗雄、島田惟上、島田惟宗、伊與部馬養、采女比良夫、下毛野蟲、麻呂、百濟和麻呂、箭集蟲麻呂、伊伎古麻呂、石上乙麻呂等あり、繁を以て録せず。

日本詩史卷之二

平安 江邨綬君錫著

弟 清 絢君錦

同校

男 悰秉孔均

考諸漢土、古者文武不甚相岐、列國卿大夫、
入理庶政、出帥三軍、秦漢以還、文武始岐、所
謂隨陸無武、絳灌無文、迄唐中葉、千斛弓一
丁字、更相詬讐、於是橫槊賦詩、據鞍卓檄、世
稱無幾、況我東土、瓊矛探海、寶劍鎮邦、其建
極也、素有不同、是以韜鈴詠言、無見古選、後
來戰爭之世、反得數人云。

武藏守細川頼之、海南偶作云、人生五十愧

諸を漢土に考ふるに、古者は文武甚相岐れず、列國の卿大夫、入りては、庶政を理し、出でては、三軍を帥ゆ、秦漢より以還、文武始めて岐る、謂はゆる隨陸は武なく、絳灌は文なし、唐の中葉に迄りて、千斛の弓一丁字、更に相詬讐す、是に於て槊を横たえて詩を賦し、鞍に據りて檄を草する、世幾なしと稱す、況や我が東土、瓊矛海を探り、寶劍邦を鎮む、其の極を建つるや、素より同じからざる有り、是を以て韜鈴の詠言、古選に見るなし、後來戰爭の世、反つて數人を得ると云ふ。

武藏守細川頼之、海南の偶作に云ふ、人生五十功無きを

無功、花木春過夏已空、滿室蒼蠅掃不去、獨尋禪室抱清風、賴之行事見太平記、足利義詮既薨、義滿嗣立、賴之執政、內輔幼主、外御猛將、上下倚賴、遠近偃服、功豈不偉然哉、後近、臣忌其剛正、讒之義滿、勢滿漸信焉、於是辭職退隱于海南、此詩必其時作也。

大膳大夫武田晴信後、更名信玄、初年頗參禪好詩、其將某諫曰、主將參禪好詩、猶足利僧還俗、文弱不足有爲也、是時足利學校廢、而爲寺、僞徒多事詩偈、故云爾、信玄諸作載在甲陽軍鑑、今不復錄、信玄弟、左馬頭信繁、嘗著家訓、其中云、貪他一杯酒、失却滿船魚、斯知信繁亦讀書作詩、惜世無傳、信繁孝友、其人可稱、而信玄忌之、所以國祚不長也。

愧づ、花木春過ぎて夏已に空し、滿室の蒼蠅掃へども去らず、獨禪室を尋ねて清風を抱す、賴之の行事、太平記に見ゆ、足利義詮既に薨じ、義滿嗣立す、賴之執政す、内幼主を輔し、外猛將を御す、上下倚賴し、遠近偃服す、功豈偉然ならざらんや、後近臣其の剛正を忌み、之を義滿に讒す、義滿漸信す、是に於て職を辭し、海南に退隱す、此の詩必其の時の作ならん。

大膳大夫武田晴信後名を信玄と更む、初年頗禪に參し、詩を好む、其の將某諫めて曰、主將禪に參し詩を好むは、猶足利僧の還俗するがごとし、文弱爲すこと有るに足らざるなりと、是の時足利の學校廢して寺となり、僧徒多く詩偈を事とす、故に爾云ふ、信玄の諸作載せて甲陽軍鑑に在り、今復錄せず、信玄の弟、左馬の頭信繁、嘗て家訓を著す、其の中に云ふ、他の一杯の酒を貪り、失却す滿船の魚と、斯に知る信繁も亦書を讀み詩を作る、惜らくは世傳ふることなし、信繁孝友其人稱すべし、而して信玄之を忌む、國祚長からざる所以なり。

彈正大弼上杉輝虎、後更名謙信、天正二年、
 征能登州、圍遊佐彈正於七尾城、會九月十
 三夜、海月清明、軍中置酒讌會、謙信因賦詩
 云、露下軍營秋氣清、數行過雁月三更、越山
 井同能州景遮莫家鄉念、遠征將士解作詩
 及和歌者、各有詠言、極歡而罷、余謂世之談
 兵者、必稱信玄謙信、二公誠敵手也、但信玄
 智計絕人、其御軍也、紀律森嚴、所謂量敵而
 後進、慮勝而後會、要之其爲人也精細、雖由
 此讀書善詩不異矣、謙信暗嗚叱咤、性如烈
 火、而讀書作詩、且軍中作此雅會、可謂真英
 雄真風流也。

大將軍足利義昭、避亂江州、舟中詩云、落魄
 江湖暗結愁、孤舟一夜思悠悠、天翁亦愴吾

彈正大弼上杉輝虎、後名を謙信と更む、天正二年、能登州
 を征し、遊佐彈正を七尾城に圍む、會九月十三夜、海月清
 朗なり、軍中置酒讌會す、謙信因て詩を賦して云ふ、露下
 りて軍營秋氣清し、數行の過雁月三更、越山井同す能州
 の景遮莫家郷の遠征を念ふを、將士詩及び和歌を作
 るを解する者、各詠言あり、歡を極めて罷む、余謂ふ世の
 兵を談するもの、必信玄謙信を稱す、二公は誠に敵手な
 り、但信玄の智計人に絶す、其の軍を御するや、紀律森嚴
 謂はゆる敵を量りて而して後進み、勝つことを慮りて而
 して後會す、之を要するに其の人となりや精細なり、此
 れに由りて書を讀み詩を善くすと雖、異ます、謙信暗嗚
 叱咤、性烈火の如く、而して書を讀み詩を作る、且軍中此
 の雅會を作す、眞の英雄眞の風流なりと謂ふべし。

大將軍足利義昭、亂を江州に避くる舟中の詩に云ふ、落
 魄江湖暗に愁を結ぶ、孤舟一夜思ひ悠悠々、天翁も亦吾生
 を愴むや否や、月は白し蘆花淺水の秋と、詩は誠に悽婉

生吞、月白蘆花淺水秋、詩誠悽婉、公初爲僧、
爲南都一乘院主、宜其能詩、噫、足利氏之盛、
位亞帝王、富有海內、而季世瑣尾、扁舟江湖、
去住無地、豈不憫乎哉。

少將豐臣勝俊、豐臣氏時受封若狹、後退隱
京畿、更名長嘯、以和歌稱、所著有『畧白集』、其
中載詩數首。

兵部大輔、細川藤孝、號幽齋、後更名玄旨、爲
今肥後侯祖、世知其武略及善和歌、而春齋
林子所選一人一首、載幽齋鞍馬山看花絕
句、則知實于文藝注意者。

中納言伊達政宗、今仙臺侯祖、世稱其勇武、
而一人一首、又載其詩、余因謂、賴之以下諸
人、生長于干戈擾冗時、南戰北爭、羽檄旁午、

なり、公初め僧と爲り、南都一乘院の主と爲る、宜なり其
の詩を能くするや、噫、足利氏の盛なる、位帝王に亞ぎ、
富海内を有つ、而して季世瑣尾、扁舟江湖、去住地なし、豈
憫からずや。

少將豐臣勝俊、豐臣氏の時封を若狹に受く、後、京畿に
退隱して、名を長嘯と更む、和歌を以て稱せらる、著はす
所『畧白集』あり、其に詩數首を載す。

兵部大輔、細川藤孝、幽齋と號す、後名を玄旨と更む、今の
肥後侯の祖たり、世其の武略及和歌を善くするを知る、
而して春齋、林子の選する所の一人一首に、幽齋鞍馬山に
花を看るの絶句を載す、則知る實に文藝に于いても意を
注げる者なるを。

中納言伊達政宗、今の仙臺侯の祖、世其の勇武を稱す、而
して一人一首に、又其の詩を載す、余因て謂ふ、賴之以下
の諸人、干戈擾冗の時に生長し、南戰北爭、羽檄旁午、何ぞ
曾て寧日あることを得ん、知らず何の暇ありてか、書を讀

何曾得有寧日、不知何暇、讀書學詩、此尤不易、元和清平以來、諸藩無事、何爲不成、而或優游恬嬉、宴安度日、不習文學、不講武備、亦將併廢者何也。

隱者之詩罕傳、蓋非無隱者、無隱者而能詩者也、本朝遼史、首載維喬親王、親王文德帝長子、以藤原氏故、不得立爲皇太子、居水無瀨宮、後遷居於京北小野山中、吟詩詠和歌、以爲娛樂、亦唯遺其悒悒爾、其詩今無傳者、唯聞琴詩、載朗詠集、而非完篇也。

延喜中有稱嵯峨隱君子者、失其姓名、或曰源姓清名、博學有文、嘗右相、橋參議、與相友善、遇有疑事、即二公就而質問、其人可想也、或曰弘仁帝子、或曰延喜帝子、併其詩失傳、

み詩を學ばん、此れ尤易からず、元和清平以後、諸藩無事、何を爲してか成らざらん、而して、或は優游恬嬉、宴安日を度り、嘗に文學を講ぜざるのみならず、武備も亦將に併せて廢れんとする者は何ぞや。

隱者の詩傳はる罕れなり、蓋隱者無きには非ず、隱者にして詩を能くする者なきなり、本朝遼史に、首に維喬親王を載す、親王は文德帝の長子、藤原氏の故を以て、立ちて皇太子と爲ることを得ず、水無瀨宮に居り、後、京北小野山中に遷居す、詩を吟し、和歌を詠し、以て娛樂と爲す、亦唯其の悒々を遺るのみ、其詩今傳はる者なし、唯琴を聞く詩、朗詠集に載す、而れども完篇に非ざるなり。

延喜中嵯峨の隱君子と稱する者あり、其姓名を失す、或ひと曰、姓を源にして名を清にす、博學にして文あり、嘗右相、橋參議、與に相友とし善し、疑事有るに遇へば、即二公就て質問すと、其の人想ふべし、或ひと曰、弘仁帝の子、或ひと曰、延喜帝の子と、其詩を併せ傳を失ふ、惜ひか

惜夫。

懷風藻載民黑人詩稱曰隱士亦失其氏族、或曰野見氏其云泉石行行異風煙處處同欲知山中樂林下有清風清迥冲遠大是隱者本色。

遯史載藤原萬里高光周光爲時橘正道惟良春道等余旣前錄且右數人雖耽思烟霞而纏身紳紱或有所激而遐棄爵祿者非眞隱者也故不收錄於此云。

余考古籍醫之以詩稱者絕無以今思之似不可解如他邦姑置之今京城中業講說者無慮數十人執謁其門靡匪醫家子弟除之無復生徒而醫生爲學亦唯不過習句讀學作詩以潤飾自家術業故雖間有才敏子弟

な。懷風藻に民黑人が詩を載す稱して隱士と曰ふ亦其氏族を失す、或は曰野見氏と其の「泉石行々異に、風煙處處同じ、山中の樂を知らんと欲せば、林下に清風あり」と云ふがごとき、清迥冲遠、大に是れ隱者の本色なり。

遯史に藤原の萬里、高光、周光、爲時、橘、正道、惟良、春道等を載す、余旣に前に錄す、且右の數人、思を烟霞に耽ると雖而して身を紳紱に纏ひ、或は激する所ありて、爵祿を棄する者、眞の隱者に非ざるなり、故に此に收錄せずと云ふ。

余古籍を考ふるに、醫の詩を以て稱せらるゝものは絶てなし、今を以て之を思へば、解すべからざるに似たり、他邦の如きは姑く之を置く、今京城の中、講說を業とする者、無慮數十人、謁を其門に執るは、醫家の子弟に匪ざるはなし、之れを除きて復生徒なし、而して醫生の學を爲す、亦唯句讀を習ひ詩を作ることを學び、以て自家の術業を潤飾するに過ぎず、故に間才敏の子弟ありと雖、未

未至小成、既已髣髴其學、蓋儒術文藝不可立身糊口、而方伎往往與家殖財也、是以近時爲醫者、無不作詩、而善詩者至罕矣、余謂古昔爲醫、非如近時衆且濫也、宜其不槩見也、迄足利氏時、獨有阪士佛、伊勢紀行詩云、阪士佛、名慧勇、號健叟、京師人、數世官醫、給仕足利相公、明德中、除民部卿法印、世稱上池院是也、相公嘗伐之曰、卿祖名九佛、父名十佛、卿宜名十一佛、遂以十一佛呼之、後修十一爲士、蓋俳優遇也、士佛善和歌及聯歌、有勢州紀行以國字錄之、其中有詩、其一曰、渡口無舟憩樹陰、漁村煙暗日沈沈、寒潮歸去前程遠、又有松濤驚客心、優柔平暢頗足誦詠。

だ小成に至らずして、既已に其學を髣髴にす、蓋儒術文藝は、身を立て口を糊すべからずして、方伎は往々家を興し財を殖すればなり、是を以て近時醫を爲すものは、詩を作らざるはなし、而して詩を善くする者は、至りて罕なり、余謂ふに古昔醫を爲す、近時の衆くして且濫なるが如きには非ざるなり、宜なり其槩見せざることを、足利氏の時に迄て、獨阪士佛が伊勢紀行の詩ありと云ふ。

阪士佛、名は慧勇、健叟と號す、京師の人なり、數世の官醫、足利相公に給仕す、明徳中に、民部卿法印に除す、世に上池院と稱するは是なり、相公嘗て之れに戯れて曰、卿が祖、九佛と名け、父は十佛と名く、卿宜しく十一佛と名くべしと、遂に十一佛を以て之れを呼ぶ、後十一を修め士と爲す、蓋俳優をもて遇せらるゝなり、士佛和歌及び聯歌を善くす、勢州紀行あり、國字を以て之れを録す、其中に詩あり、其の一に曰、渡口舟なく樹陰に憩ふ、漁村煙暗くして日沈々、寒潮歸り去りて、前程遠し、又松濤の客心を驚かすありと、優柔平暢頗誦詠するに足る。

僧詩見古選者、釋智藏爲始、智藏奉天智帝勅赴唐國、蓋高宗武德年間矣、其詩傳者數首、竝無可采、劉禹錫有贈日本僧智藏詩、偶同名耳、與此不同。

僧辨正、姓秦氏、亦西遊唐國、玄宗睿遇甚篤、數召談論、時對圍碁、云、然則或與盛唐諸子締交、被其潤色者、而今閱其詩、絕無佳者、可謂空手自玉山還。

僧蓮禪、詩名于當時、無題詩集載、其詩數十首、鄙野殊甚。

僧玄惠、不詳氏族、或曰、其初業儒、中爲僧、後復還俗、以著太平記、故世稱博文、若其詩、延元中、內宴應制一首之外、絕不觀他篇、其餘古昔中世、緇流詩偈、見諸選者、不尠、若空海

八
僧の詩、古選に見ゆる者、釋智藏を始と爲す、智藏、天智帝の勅を奉じて唐國に赴く、蓋高宗の武德年間なり、其詩傳はる者數首、竝びに采る可き無し、劉禹錫、日本の僧智藏に贈る詩あり、偶、同名のみ、此れと同じからず。

僧辨正、姓秦氏、亦西唐國に遊ぶ、玄宗睿遇甚篤し、數召して談論し、時に圍碁に對すと云ふ、然らば、則或は盛唐の諸子と締交し、其潤色を被むる者ならん、而して今其詩を閱するに、絶えて佳なる者なし、謂ふべし、空手にして玉山より還ると。

僧蓮禪、當時に詩名あり、無題詩集、其詩數十首を載す、鄙野殊に甚し。

僧玄惠、氏族を詳にせず、或は曰、其の初め儒を業とす、中ごろ僧となる、後復還俗す、太平記を著すを以ての故に世に博文と稱せらる、其の詩の若き、延元中、内宴應制一首の外、絶えて他篇を觀ず、其餘古昔中世の緇流の詩偈、諸選に見ゆる者尠からず、空海の若き最傑出と稱す、而

最稱傑出、而率讚佛喻法之言、非詩家本色、故不收錄。

五山禪林之詩、固不易論也、蓋古昔文學、盛于弘仁天曆、陵夷于延久寛治、泯沒于保元平治、於是世所謂五山禪林之文學代興、亦氣運盛衰之大限也、北條氏霸于關東也、其族崇尚禪學、創大刹於鎌倉、今建長寺之屬是也、流風所煽、延覃上國、京師五山相尋營構、足利氏盛時、竭海內膏血、窮極土木之工、宏廓輪奐之美、所不必論、其僧徒、大率玉牒之籍、朱門之胄、錦衣玉食、入則重裯、出則高興、聲名崇重、儀衛森嚴、名是沙門、而富貴過公侯、禁宴公會、優游花月、把弄翰墨、一篇一章、紙價爲貴、於是凡海內談詩者、唯五山是

れども率ね讚佛喻法の言、詩家の本色に非ず、故に收録せず。

五山禪林の詩、固より論じ易からざるなり、蓋古昔の文學弘仁天曆に盛んにして、延久寛治に陵夷し、保元平治に泯沒す、是に於て世に謂はゆる五山禪林の文學代つて興る、亦氣運盛衰の大限なり、北條氏の關東に霸たるや、其族禪學を崇尚し、大刹を鎌倉に創す、今の建長寺の屬は是なり、流風煽ぐ所、延て上國に軍び、京師五山相尋で營構す、足利氏の盛時、海内の膏血を竭くし、土木の工を窮極す、宏廓輪奐の美、必しも論ぜざる所、其の僧徒、大率玉牒の籍、朱門の胄、錦衣玉食、入ては則重裯、出ては則高興、聲名崇重、儀衛森嚴、名は是れ沙門にして、富貴公侯に過ぐ、禁宴公會、花月に優游し、翰墨を把弄す、一篇一章、紙價爲めに貴し、是に於て凡そ海内詩を談する者、唯五山を是れ仰ぐ、是れ其の一時に顯赫し、四方に震蕩する所以なり。

仰、是其所以顯赫乎一時、震盪乎四方也。

元和以來、文運日隆、近時學者昂昂乎蔑視前古、卯角之童、尙能詆排五山之詩、卽其徒亦或倒戈內攻、要非篤論也、余謂五山之詩、佳篇不尠、中世稱叢林傑出者、往往航海西遊、自宋季世至明中葉、相尋不絕、參學之暇、從事藝苑、師承各異、體裁亦岐、其詩今存者數百千首、夷考其中、不能不玉石相混也、若夫辭艱意滯、涉議論、雜詼諛者、與藉詩以說禪演法者、皆余所不采也、其他平整流暢、清雅縝工者亦多、則不可槩而擯之。

五山作者、其名可徵于今者、不下百人、而絕海義堂、其選也、次則太白、仲芳、惟忠、謙岩、惟肖、鄴隱、西胤、玉腕、瑞岩、瑞溪、九鼎、九淵、東沼、

元和以來、文運日に隆に、近時學者昂々乎として前古を蔑視す、卯角の童も、尙能く五山の詩を詆排す、卽其徒も亦或は戈を倒にして内攻す、要するに篤論に非ざるなり、余謂ふ五山の詩佳篇尠からず、中世叢林の傑出と稱する者、往々海に航して西遊す、宋の季世より明の中葉に至り、相等で絶えず、參學の暇、藝苑に従事し、師承各異に體裁も亦岐る、其詩今存する者數百千首、其中を夷考するに、玉石相混ぜざる能はざるなり、若し夫れ辭艱に意滯り、議論に涉り、詼諛を雜ふる者と、詩を藉りて以て禪を説き法を演ぶる者と、皆余の采らざる所なり、其他平整流暢、清雅縝工の者も亦多し、則槩して之を擯くべからず。

五山の作者、其名今に徵すべき者、百人に下らず、而して絶海、義堂は其の選なり、次は則、太白、仲芳、惟忠、謙岩、惟肖、鄴隱、西胤、玉腕、瑞岩、瑞溪、九鼎、九淵、東沼、南江、心田、村菴の徒、枚舉に堪へず。

南江心田村菴之徒、不堪枚擧。

絶海義堂、世多竝稱、以爲敵手、余嘗讀蕉堅
 藁、又讀空華集、審二禪壁壘、論學殖、則義堂
 似勝絶海、如詩才、則義堂非絶海敵也、絶海
 詩、非但古昔中世無敵手也、雖近時諸名家、
 恐塞甲冑、通、何則古昔朝紳詠言、非無佳句
 警聯、然疵病雜陳、全篇佳者甚稀、偶有佳作、
 亦唯我邦之詩耳、較之於華人之詩、殊隔逕
 蹊、雖近時諸名家、以余觀之、亦唯我邦之詩
 往往難免俗習、如絶海、則不然也、今錄集中
 佳句若干、五言、流水寒山路、深雲古寺鐘、夜
 宿中峰寺、朝尋三泖船、青山回首處、白鳥去
 帆前、山暮秋聲早、樓虛水氣深、鳥下金繩雪、
 童燒石室香、風物皇畿內、江山霸國餘、千峰

絶海、義堂、世多く竝稱し、以て敵手と爲す、余嘗て蕉堅藁
 を讀み、又空華集を讀み、二禪の壁壘を審にす、學殖を論
 すれば、則義堂は絶海に勝るに似たり、詩才の如きは、則
 義堂は絶海の敵に非ざるなり、絶海の詩、但古昔中世敵
 手なきのみに非ず、近時の諸名家と雖、恐くは甲を乘
 て、宵遁れん、何となれば、則古昔朝紳の詠言、佳句警聯な
 きには非ず、然も疵病雜陳、全篇佳なる者甚稀なり、偶、佳
 作あるも、亦唯我が邦の時のみ、之を華人に較ぶれば、殊
 に逕蹊を隔つ、近時の諸名家と雖、余を以て、之を觀れば、
 亦唯我が邦の詩にして、往々俗習を免れ難し、絶海の如
 きは、則然らざるなり、今集中の佳句若干を録す、五言は
 に、流水寒山路、深雲古寺の鐘、夜宿す中峯の寺、朝
 に尋ぬ三泖の船、青山回首の處、白鳥去帆の前、山暮て
 秋聲早く、樓虚して水氣深し、鳥は下る金繩の雲、童は燒
 く石室の香、風物皇畿の内、江山霸國の餘、千峰宿雨を
 收め、萬象春暉を弄す、漁簪近渚に残し、僧磬寒蕪に徹

收宿雨萬象弄春暉漁籌殘近渚僧磬徹寒
蕪寒烟人未爨野樹鳥相呼寒雨黃沙暮淒
風白草秋孤館啼猿樹四郊戎馬塵七言古
殿重尋芳草合諸陵何在斷雲孤父老何心
悲往事英雄有怨滿平湖一徑松花山雨後
數聲溪鳥石堂前絕域林泉淹杖屨大江風
雨起魚龍百萬已收燕北馬頻繁休督海南
兵久雨南山荒紫豆清秋北渚落紅蓮溪纈
祭魚青籬裡杉雞引子白雲中霜後年年收
芋栗春前日日剛參苓聽經龍去雲歸洞觀
瀑僧回雪滿瓶瑤草似雲鋪滿地琪花如雪
照幽厓綠蘿牕外三竿日黃鳥聲中一覺眠
忠臣甘受屬鏤劍諸將愁看姑蔑旗等有工
絕者有秀朗者優柔靜遠瑰奇瞻曠靡所不

す、寒烟人未だ爨かず、野樹鳥相呼ぶ、寒雨黃沙の暮、淒
風白草の秋、「孤館啼猿の樹、四郊戎馬の塵」と、七言には、
古殿重ねて尋れば芳草合す、諸陵何くにか在る斷雲孤な
り、父老何の心ぞ往事を悲む、英雄怨あり平湖に滿つ、「一
徑の松花山雨の後、數聲の溪鳥石堂の前、絕域の林泉杖
屨を淹し、大江の風雨魚龍を起す、百萬已に收む燕北の
馬頻繁督するを休めよ海南の兵、久雨南山紫豆荒れ清
秋北渚紅蓮落つ、溪纈魚を祭る青籬の裡、杉雞子を引
く白雲の中、霜後年々芋栗を收め、春前日々參苓を鬪る、
」經を聽く龍去りて雲洞に歸り、瀑を聽る僧回りて雪瓶
に滿つ、「瑤草雲に似て鋪て地に滿ち、琪花雪の如く幽厓
を照らす、」綠蘿牕外三竿の日、黃鳥聲中一覺の眠、「忠臣
甘んじて受く屬鏤の劍、諸將愁ひて看る姑蔑の旗等、工
絶の者あり、秀朗の者あり、優柔靜遠、瑰奇瞻曠、有らざる
所なし、義堂は絶海に覗れば、骨力加ふるありて、才藻及
ばず、且禪語多く、又議論に涉る、溫雅流麗のもの、集中幾
はくも無し、絶句の如きは、則佳なる者あり、懷舊の作に

有、義堂視絶海、骨力有加、而才藻不及、且多禪語、又涉議論、溫雅流麗者、集中無幾、如絕句、則有佳者、懷舊作云、紛紛世事亂如麻、舊恨新愁只自嗟、春夢醒來人不見、暮簷雨洒紫荊花、送人歸京曰、鞏下招提西又東、因君歸去思重重、孤雲海國三年夢、落月長安幾夜鐘。

二僧之外、太白春水曰、春水纔深數尺強、烟波渺渺接天光、落花灑盡江南雨、一夜閑鷗夢也香、仲芳韻范蠡曰、五湖烟水綠涵天、月照蘆花秋滿船、吳越興亡雙鬢雪、功名不敢至鷗邊、南江送僧遊廬山曰、廬山何處不勝情、蓮社人空芳草生、君去能聽虎溪水、潺湲尚有晉時聲、大愚題水竹佳處曰、野水侵門

云ふ、紛々たる世事亂れて麻の如し、舊恨新愁只自ら嗟く、春夢醒め來りて人見えず、暮簷雨は洒く紫荊花、人の京に歸るを送るに曰、鞏下の招提西又東、君が歸去に因て思ひ重々、孤雲海國三年の夢、落月長安幾夜の鐘し。

二僧の外、太白の春水に曰、春水纔に深きこと數尺強、烟波渺々天光に接す、落花灑り盡す江南の雨、一夜閑鷗夢も也香し、仲芳の范蠡に題して曰、五湖の烟水綠天を涵す、月は蘆花を照して秋船に滿つ、吳越の興亡雙鬢の雪、功名敢て鷗邊に至らず、南江が僧の廬山に遊ぶを送る、に曰く、廬山何れの處か情に勝へず、蓮社人空くして芳草生ず、君去りて能く聽け虎溪の水、潺湲尙晉時の聲あらん、大愚が水竹佳處に題して曰、野水門を侵して脩竹清し、君が居想ふに、合さに佳名に似たるべし、山扉半漏ふ斜陽の雨、翳翠時に衣桁に來りて啼く、村巷か雪夜客

脩竹清君居想合似往名山扉半濕斜陽雨、
 翡翠時來衣桁啼村巷雪夜留客曰茅屋休
 辭一夕積君家歸路恐相迷園林雪白黃昏
 後、難認梅花籬落西、正宗神泉苑應制曰、上
 林風物草連空、尙有龍池記古宮、何日宸遊
 留玉輦神泉純浸五雲紅、僉師法晚唐深造
 巧妙。

宗山、向山、竝有水邊楊柳詩、宗山曰、漁橋不
 似官橋暮、不繫金絨只繫船、同山曰、染不成
 乾烟雨裏、半如鴨綠半鵝黃、二詩體裁頗肖
 竝工縛矣。

曹學佺、明詩選、載日本僧天祥詩十一首、機
 先詩五首、二僧被賞乎中土、而溼晦乎我邦、
 甚可嘆惜、天祥憶西湖曰、杭城一別已多年、

を留むるに曰、茅屋辭するを休めよ一夕積るを、君か家
 の歸路恐くは相迷はん、園林雪白し黃昏の後、認め難し
 梅花籬落の西、正宗が神泉苑の應制に曰、上林の風物草、
 空に連る、尙龍地の古宮を記する有り、何れの日か宸遊
 玉輦を留め、神泉純浸五雲の紅を浸さんと、僉師法
 とし、深く巧妙に造る。

宗山、向山、竝に水邊楊柳の詩あり、宗山は曰、漁橋は似ず
 官橋の暮、金絨を繫がず只船を繫ぐ、同山は曰、染めて乾
 くを成さず烟雨の裏、半は鴨緑の如く半は鵝黃と、二詩
 體裁頗肖たり、竝に工縛なり。

曹學が佺明詩選に、日本の僧天祥の詩十一首、機先の詩
 五首を載す、二僧中土に賞せられて、而して我が邦に溼
 晦す、甚嘆惜すべし、天祥の西湖を憶ふに曰、杭城一別已
 に多年、夢裡の湖山尙宛然、三竺の樓臺晴れて畫に似た

夢裡湖山尙宛然、三竺樓臺晴似畫、六橋楊柳晚如煙、青雲鶴下梅邊暮、白髮僧談石上緣、午睡醒來倍惆悵、堪看身世老南瀛、又、榆城聽角曰、十年遊子在天涯、一夜秋風又憶家、恨殺黃榆城上角、曉來吹入小梅花、聲格清亮、唐人典刑、其他我邦詠言、爲華人所稱者甚衆、春齋林子一人一首論載詳悉、今不復贅。

朝鮮徐剛中所著東人詩話、以清馨月高知遠寺、長林雲盡辨遙山、爲日本僧梵吟詩、余未考梵吟何人。

余按、古昔宮娥閨媛、揮彤管於國字、抽藻思於和歌、揚芳一時、播美千載者、比比有焉、如詩章無幾、而孝謙帝爲始、帝以坤德位九五、

り六橋の楊柳晚に烟の如し、青雲鶴は下る梅邊の暮、白髮僧は談ず石上の緣、午睡醒め來りて倍惆悵、看るに堪へんや、身世南瀛に老るを、又、榆城に角を聽くに曰、十年遊子天涯に在り、一夜秋風又家を憶ふ、恨殺す黃榆城上の角、曉來吹いて入る小梅花、聲格清亮、唐人の典刑なり、其他我が邦の詠言、華人に稱せらるゝもの甚衆し、春齋林子の一人一首、論載詳悉、今復贅せず。

朝鮮の徐剛中の著す所の東人詩話に、清馨月高くして遠寺を知り、長林雲盡きて遙山を辨するを以て、日本の僧梵吟が詩と爲す、余未だ梵吟の何人なるかを考へず。

余按するに、古昔の宮娥閨媛、彤管を國字に揮ひ、藻思を和歌に抽き、芳を一時に揚げ、美を千載に播くもの、比々として有り、詩章の如きは幾くも無し、而して孝謙帝を始と爲す、帝坤德を以て九五に位す、中壽の言、之を言へ

中興之言、言之長也。帝階崇釋氏、所傳帝詩、亦唯讚佛偈耳。然曰、惠日照千界、慈雲覆萬生、實俊語也。按史、先是吉備公爲聘唐使、遂留學于唐國、經二十年、至是歸朝、帝師之、學詩學書云云、然則宸藻豈止於此耶、今無所考耳。

大伴氏、不詳其人、文華秀麗集、載其秋日述懷七律一首、雖非佳作、亦不甚拙。

内親王有智子、弘仁帝第三女、幽貞之質、錦繡之才、古今罕儔、年十七、爲賀茂齋院、帝嘗幸齋院、與群臣賦、春日山莊詩、各探勸韻、公主亦與焉、公主得塘光行蒼、卽賦曰、寂寂幽莊、深樹裏、仙輿一降、一池塘、棲林孤鳥、識不澤、隱澗寒花、見日光、泉聲近報、初雷響、山色

ば長きなり、帝、ハナハタ酷釋氏を崇ぶ、傳ふる所の帝の詩も、亦唯讚佛の偈のみ、然も、惠日照千界を照し、慈雲萬生を覆ふと曰ふは、實に俊語なり、史を按するに、是より先き吉備公、聘唐使と爲り、遂に留まりて唐國に學ぶ、二十年を経て、是に至りて歸朝す、帝之を師とし、詩を學び書を學ぶと云云、然らば則宸藻豈此に止らんや、今考ふる所なきのみ。

大伴氏、其人を詳にせず、文華秀麗集に、其秋日述懷の七律一首を載す、佳作に非すと雖、亦甚拙ならず。

内親王智子は、弘仁帝の第三女、幽貞の質、錦繡の才、古今儔罕なり、年十七、賀茂の齋院と爲る、帝嘗て齋院に幸し、群臣と春日山莊の詩を賦す、各韻を探勸す、公主も亦與かる、公主塘光行蒼を得たり、卽賦して曰、寂々たる幽莊、深樹の裏、仙輿一たび降る、一池塘、林に棲む孤鳥、春澤を識り、澗に隱る、寒花日光を見る、泉聲近く、報す初雷の響、山色高く、晴れて暮雨行る、此れ従り更に知る、恩願の厚きを、生涯何を以てか、寫蒼に答へんと、又嘗て巫山高

高晴暮雨行、從此更知恩顧厚、生涯何以答、
穹蒼又霄賦、巫山高、其結句曰、別有曉猿嘶、
寒聲古木間、殊初唐遺響、其餘傳者數首、公
主薨年四十一、遺令薄葬、且辭護葬使、其賢
明、不特藻繪之美。

惟氏、弘仁時、宮女、經國集載、擣衣篇一首、
長短成章、其中云、芙蓉杵、錦石砧、出自華陰、
與鳳林、擣齊紈、擣楚練、等數語、最爲婉約、此
知弘仁右文教化爲至也、諸皇子無不能詩、
而皇女有知、有智公主、外廷諸臣、才華紛競、
而內庭又有如惟氏、使千歲下、嘆稱不已。

尼和氏、不詳氏族、或曰、和氣清麻呂姊也、經
國集載古風一篇、其中云、棲隱多歸趣、從來
重練耶、覩言尋此處、處處幾經過、等語、足證

を賦す、其結句に曰、別に曉猿の斷なる有り、寒聲古木の
間」と、殊に初唐の遺響あり、其餘傳はる者數首、公主薨
する年四十一、遺令して薄葬せしめ、且護葬使を辭す、其
の賢明なる特に藻繪の美のみならず。

惟氏は、蓋弘仁の時の宮女、經國集に擣衣篇一首を載す、
長短章を成す、其中に云ふ、芙蓉の杵、錦石の砧、華陰と鳳
林と自り出つ、齊紈を擣き、楚練を擣く等の數語、最婉約
と爲す、此に知る弘仁右文の教化至れりと爲す、諸皇子
詩を能くせざるは無し、而して皇女には有智公主の如き
あり、外廷の諸臣、才華紛競、而して內庭又惟氏の如きあ
り、千歲の下に嘆稱して已まざらしむ。

尼和氏は、氏族を詳にせず、或は曰、和氣清麻呂の姊なり
と、經國集に古風一篇を載す、其中に云ふ、棲隱歸趣多し、
從來練耶を重んず、覩して言に此の處を尋ぬ、處處幾經
過等の語あり、心地清淨を證するに足る。

心地清淨。

十市采女、和江侍郎七言四句、截其半、載朗詠集、曰、寒閨獨夜無夫婿、不妨蕭郎枉馬蹄、世以桑濮鄙焉、或曰、和歌之設、教也、亦本諸性情之正、固非誨淫具也、中古風教陵夷、人假之爲花鳥使、紅箋往復、半是芍藥贈言、前史所錄、和歌選集所載、歷歷可證、有視面目、而當時慣以爲常、采女特以詩代和歌、耳、如懲其淫風、宜有任咎者、何必尤一女子、采女之後、悠悠幾百年、閨閣之詩、寥乎無聞、元和文明之後、又得數人、因附錄于左云。

曇華院宮默堂、蓋皇女歸釋者云、八居題詠、附載其冬日書懷、曰、寒林蕭索帶風霜、幽竹臆前已夕陽、翫月秋宵猶短、短尋花春日尙

十市采女の、江侍郎に和する七言四句、其半を截して朗詠集に載せて曰、寒閨獨夜夫婿なし、妨げず蕭郎の馬蹄を枉ぐるを、と、世、桑濮を以て鄙む、或ひと曰、和歌の教を設くるも、亦諸を性情の正きに本づく、固より淫を誨ふる具に非ざるなり、中古風教陵夷し、人々之れを假りて花鳥の使と爲す、紅箋往復、半は是れ芍藥の贈言、前史の錄する所、和歌選集の、載する所、歷々證す可し、視たる面目あり、而して當時慣れて以て常と爲す、采女は特に詩を以て和歌に代ふるのみ、如し其淫風を懲らさば、宜しく咎に任ずる者あるべし、何ぞ必しも一女子を尤めんと、采女の後、悠悠幾百年、閨閣の詩、寥乎として聞ゆる無し、元和文明の後、又數人を得たり、因て左に附録すと云ふ。

曇華院宮默堂は、蓋皇女の釋に歸する者と云ふ、八居題詠、其冬日書懷を附載す、曰、寒林蕭索風霜を帶ぶ、幽竹臆前已に夕陽、月を翫んで秋宵猶短きを恨み、花を尋ねて春日尙長きを思ふ、榮枯眼を過ぐ百年の事、憂喜心を傷

思長、榮枯過眼百年事、憂喜傷心一夢場、靜
對爐香禪坐久、細煙裊裊繞孤床、理趣超凡、
不啻脫紅粉之習、兼遠烟火之氣。

京師女子名留者、年十三、送人詩云、蜀魄聲
聲更斷腸、離筵今日淚成行、江山迢遞幾千
里、不若愁人別恨長、又有春山尋花七律、亦
頗成章、二詩見本朝千家詩、不錄、女子氏族、
今不可考、千家詩、元祿中、京師書林編輯、距
今已八十年。

讚州丸龜士人井上氏女、名通、從東都還、丸
龜道中、以國字紀行、名歸家日記、其中載詩
十二首、天龍河作云、天龍河上天龍遊、龍去
河留二水流、二水中分爲大小、小斯厲揭大
斯舟。

ましむ一夢場、靜に爐香に對して禪坐する久し、細煙裊
々孤床を繞ると、理趣超凡、雲に紅粉の習を脱するのみ
ならず、兼ねて烟火の氣に遠さかる。

京師の女子にして名は留といふ者、年十三、人を送る詩
に云ふ、蜀魄聲々更に斷腸、離筵今日淚行を成す、江山迢
遞幾千里、若かず愁人別恨の長きにと、又春山花を尋ぬ
る七律あり、亦頗章を成す、二詩本朝千家詩に見ゆ、女子
の氏族を錄せず、今考ふ可らず、千家詩は、元祿中、京師の
書林編輯す、今を距ること已に八十年なり。

讚州丸龜の士人井上氏の女名は通、東都より丸龜に還
る道中、國字を以て行を紀す、歸家日記と名く、其中に詩
十二首を載す、天龍河の作に云ふ、天龍河上天龍遊、龍
去り河留りて二水流る、二水中分して大小と爲る、小は
斯に厲揭し大は斯に舟すと。

筑後柳川立花氏女題山居云、應是武陵洞、溪流送落花、杳然聞犬吠、何路向仙家、江樓賞、月云、江天明月照登樓、十里金波浸檻流、黃鶴仙人誰得見、玉簫吹落桂花秋、有詩集名、中山詩稿。

伊勢山田洞官某婦、荒木田氏、好讀書、善和歌連歌、近學作詩、間有佳篇、婉順不失、閨閣本色、題畫云、楊柳青邊澗水流、春風倚棹木蘭舟、人家隔在峯巒裏、想像長伴麋鹿遊、又、浪華客中作云、江瀨一望綠連天、日出烟波帆影懸、歸雁幾聲春夢破、故園消息落花邊。

日本詩史卷之二 終

筑後柳川の立花氏の女山居に題して云ふ、應に是れ武陵洞なるべし、溪流落花を送る、杳然犬の吠ゆるを聞く、何れの路か仙家に向はん」と、江樓月を賞するに聞ふ、江天明月登樓を照す、十里の金波檻を浸して流る、黃鶴仙人誰か見るを得ん、玉簫吹き落とす桂花の秋」と、詩集あり、中山詩稿と名く。

伊勢山田の洞官某の婦、荒木田氏、讀書を好み、和歌連歌を善くす、近ごろ詩を作るを學ぶ、間佳篇あり、婉順にして、閨閣の本色を失はず、畫に題して云ふ、楊柳青き邊に澗水流れ、春風棹に倚る木蘭舟、人家は隔て、峯巒の裏に在り、想像す長く麋鹿に伴ふて遊ぶを」と、又浪華客中の作に云ふ、江瀨一望綠、天に連る、日出で、烟波帆影懸る、歸雁幾聲か春夢破る、故園の消息落花の邊」と。

日本詩史卷之三

古曰文學盛衰有關於世道汚隆信哉徵之我邦夫誰曰不然神武天皇東征殺其士女帝功於是爲盛然時屬草昧遐荒猶阻王化應神天皇登極而後三韓稽顙蝦夷獻琛巍桓桓莫以尙焉於是我邦始有六經云仁德天皇爲皇子時受經於百濟博士講明唐虞之治即位後施爲靡不由焉是以海內又安衆庶仰之如日月戴之如父母仁慈恭儉

平安 江邨綬君錫著
弟 清 絢君錦
男 悰秉孔均 同按

古に曰文學の盛衰世道の汚隆に關するありと、信なるかな、之れを我邦に徵するに、夫れ誰か然らずと曰はん、神武天皇東征して其士女を殺んず、帝の功是に於て盛なりと爲す、然も時草昧に屬し、遐荒猶王化を阻つ、應神天皇登極、而して後三韓稽顙し、蝦夷琛を獻す、巍々桓々、以て尙ふる莫し、是に於て我邦始めて六經ありと云ふ、仁德天皇の皇子たりし時、經を百濟の博士に受け、唐虞の治を講明す、即位の後、施爲出らざる靡し、是を以て海内又安衆庶、之れを仰くこと日月の如く、之れを戴くこと父母の如し、仁慈恭儉の化、民心に入るもの、至りて深

之化入民心者、至深且固、歷千百世、無有攜貳、胡厥盛哉、自時厥後、列聖相承、文教日闡、餘波及翰墨者、汪洋于弘仁、天曆間、可謂帝業與文學偕盛也、延久已降、朝綱解紐、文事日廢、一壞于保元、再壞于承久、糜爛于元弘、建武之後、迄乎足利氏失其鹿、邦國分裂、戰爭無已、生民塗炭、到此而極、藝苑事業、無復孑遺矣、既而天厭喪亂、織田氏豐臣氏迭興、中州稍削平、然竝無學術、馬上得之、欲馬上治之、是以天人不與、或業壞垂成、或祚止一世、要之撥亂反正、天必有待、而奎壁發彩於久暗之後、固非偶然也、若夫神祖、聖文神武、上翊戴帝室、下煦育億兆、干戈攘擾中、遊訪耆老、以棄籀治道、廣募遺書、以潤色鴻業、

且固し、千百世を歴て攜貳あること無し、胡ぞ厥れ盛なるや、時より厥後、列聖相承け、文教日に闡け、餘波翰墨に及ぶ者、弘仁天曆の間に汪洋す帝業文學と偕に盛なりと謂ふ可きなり、延久より已降、朝綱紐を解き文事日に廢す、一たび保元に壞れ再び承久に壞れ、元弘建武の後に糜爛す、足利氏其鹿の失ふに迄び、邦國分裂し、戰爭已む無し、生民の塗炭、此に到りて極まる、藝苑の事業、復孑遺なし、既にして天喪亂を厭ひ、織田氏豐臣氏迭に興り、中州稍削平す、然も竝に無學術、馬上に之れを得て、馬上に之れを治めんと欲す、是を以て天人與せず、或は業垂成に壞れ、或は祚一世に止まる、之を要するに撥亂反正、天必待つこと有りて、奎壁發彩を久暗の後に發す、固より偶然に非ざるなり、若し夫れ神祖は聖文神武、上は帝室を翊戴し、下は億兆を煦育し、干戈攘擾の中、過に耆老を訪ふて以て治道を棄籀し、廣く遺書を募りて、以て鴻業を潤色す、又惺窩先生に命じ、經史の義を講析せしむ、是に於て羅山先生、聘に東都に應ず、夫れ然して後ち猛

又命惺窩先生講析經史之義、於是羅山先生、應聘東都、夫然後猛將勇士、稍知嚮學、而邦國頽宮尋興、士業日廣、至今百六十年、玉燭繼光、金甌無虧、風化之美、舜倫之正、互古所無、而近時文華之鬱、無讓漢土、今論列其一二、未遑縷舉云。

惺窩名肅字斂夫、姓藤原氏、其出處言行、竝見本朝儒宗傳、今不復贅焉、初爲僧、名椿首座、是時五山詩學尙盛、其中有以才鋒稱者、而遇惺窩、則折北不支、以故名重釋氏、雖歸儒後、不畜妻妾、不御酒肉、人或詰之、則曰、我歸儒也、崇其道耳、不我知者、謂爲食色、吾德不足服人、不能不避嫌耳、先是、京師有唱程朱說者、而猶未普四方、惺窩一出塵之、海內

將勇士稍學に嚮ふを知りて、而して邦國の頽宮尋で興り士の業日に廣まる、今に至るまで百六十年、玉燭光を繼ぎ、金甌虧くる無し、風化の美、舜倫の正、互古無き所、而して近時文華の鬱たる、漢土に讓る無し、今其一二を論列す、未だ縷舉するに遑あらずと云ふ。

惺窩名は肅、字は斂夫、姓は藤原氏、其出處言行、竝に本朝儒宗傳に見ゆ、今復贅せず、初め僧と爲り、名椿首座なり、是の時五山の詩學尙盛なり、其中才鋒を以て稱せらるゝ者あり、而れども惺窩に遇へば、則折北して支へず、故を以て名釋氏に重し、儒に歸する後と雖妻妾を畜へず、酒肉を御せず、人或は之れを詰れば、則曰、我が儒に歸するや、其道を崇ぶのみ、我を知らざる者は、食色の爲めと謂はん、吾が徳、人を服するに足らず、嫌を避けざる能はざるのみと、是れより先き、京師に程朱の説を唱ふる者あり、而して猶未だ四方に普からず、惺窩一び出で、之れを塵けば、海内靡然として之れを宗とし、弟子の禮を執

靡然宗之、執弟子禮者、無慮數百人、而羅山活所、堀正意、松永昌三、最有重名、惺窩已以斯文自任、人憚其端嚴、而亦能風雅、不廢文字之業、嘗花時遊大原、訪豐臣長嘯、席上賦云、君是護花花護君、有花此地久留君、入門先問花無恙、莫道先花更後君、一時遊戲之言、體格亡論已、然意致曲折足證溫藉。

活所名方字道圓、姓那波氏、後更姓祐生名、賦、播州人、年十八遊京師、始謁惺窩、惺窩覽其詠杜鵑詩、歎稱焉、由是名價頓發、遂從惺窩、聞濂洛心法、即得其旨、歸元和元年、大駕駐京、召見名儒、活所雖年少、亦在其列、後筮仕、肥後肥後國除、更事紀藩、又以方正端嚴、繼惺窩爲京師諸儒冠冕、其弟子號入室者

者、無慮數百人、而して羅山、活所、堀正意、松永昌三、最重名あり、惺窩已に斯の文を以て自ら任ず、人其端嚴を憚る、而して亦能風雅にして、文字の業を廢せず、嘗て花時大原に遊び、豐臣長嘯を訪ふ、席上賦して云ふ、君は是れ花を護し、花は君を護す、花有りて此の地久く君を留む、門に入りて先づ問ふ花恙無きやと、道ふ莫れ花を先にして更に君を後にすと、一時遊戲の言、體格論する亡きのみ、然も意致曲折、溫藉を證するに足る。

活所名は方、字は道圓、姓は那波氏、後姓を祐生名を賦と更む、播州の人なり、年十八、京師に遊び、始めて惺窩に謁す、惺窩其杜鵑を詠する詩を覽て、歎稱す、是れに由りて名價頓に發す、遂に惺窩に従ひて、濂洛の心法を聞き、即其旨歸を得たり、元和元年、大駕京に駐り、名儒を召見す、活所年少と雖、亦其列に在り、後肥後に筮仕す、肥後國除し、更に紀藩に事ふ、又方正端嚴を以て、惺窩に繼で、京師諸儒の冠冕と爲る、其弟子にして入室と號する者最多し、而して我が先大父首たり、正保戊子京師に卒す、活所遺

最多、而我先大父爲首、正保戊子卒于京師、有活所遺稿十卷、詩凡五百首、其中有雅馴者、遊東求堂云、寂寞將軍廟、無邊草木肥、苔深過客少、松臥古人非、流水幾時盡、行雲何處歸、長嗟山路暮、幽鳥傍吾飛、長子木菴克紹其業、爲一時儒宗。

木菴名守之、字元成、嗣職爲紀藩文學、後以老病政仕、在家教授、自惺窩至木菴、文學相承、木菴最以毅直稱、而其詩多圓暢者、遊金閣寺云、相國遺踪在、荒蹊松竹幽、青山千古色、金閣幾人遊、山影浮寒水、林聲報素秋、遙憐應永日、臨眺令吾愁、又禪林寺看花云、過眼山花片片飛、如雲如雪映斜暉、共憑百尺樓臺上、自使遊人忘暮歸、遺稿若干卷、名老

稿十卷あり、詩凡五百首、其中雅馴なる者あり、東求堂に遊ぶに云ふ、寂寞たり將軍の廟、無邊草木肥ゆ、苔深くして過客少れに、松臥して古人非なり、流水幾時か盡きふん、行雲何れの處にか歸る、長嗟す山路の暮、幽鳥吾れに傍て飛ぶと、長子木菴克其業を紹ぎ、一時の儒宗たり。

木菴名は守之、字は元成、職を嗣で紀藩の文學と爲る、後老病を以て致仕し、家に在りて教授す、惺窩より木菴に至り、文學相承く、木菴最毅直を以て稱せらる、而して其詩圓暢なる者多し、金閣寺に遊ぶに云ふ、相國遺踪在り、荒蹊松竹幽なり、青山千古の色、金閣幾人か遊ぶ、山影寒水に浮び、林聲素秋を報す、遙に憐む應永の日、臨眺吾をして愁へ令むと、又禪林寺に花を看るに云ふ、眼を過ぐる山花片々飛ぶ、雲の如く雪の如く斜暉に映す、共に憑る百尺樓臺の上、自ら遊人をして暮歸を忘れ使むと、遺稿若干卷、老圃堂集と名く、我義祖全菴先生、同學の故を

圃堂集、我義祖全菴先生、以同學故、唱和殊多、至今余家藏木菴詩數紙、筆力遒勁、字字飛動、木菴一子名元眞、俗稱采女、多病不業、先木菴死、有二孫、余嘗年從先考、過其家、是時木菴配某氏、猶無恙、令二孫出見先考、曰、吾家業詩書、世有顯名、吾兒不幸短折、今以二孫累先生、於是二孫受業先考、亡何祖母氏卒、二孫後遂竝爲醫、那波氏世住播州、家資鉅萬、迄活所事紀藩、歲祿五百石、家道益饒、是以極力典書、至數萬卷、余友師曾與活所別家而同宗、才名夙著、至今緊苦讀書、其志不小、所謂廢於彼而興於此者歟。

堀敬夫名正意、號杏菴、惺窩門人、初仕張藩、安藝侯素聞其名、厚禮請之、張藩、張藩命應、

以て、唱和殊に多し、今に至りて余が家木菴の詩數紙を藏す、筆力遒勁、字々飛動す、木菴一子名は元眞、俗稱采女、多病にして業せず、木菴に先ちて死す、二孫あり、余嘗年先考に従ひて其家を過ぐる、是の時木菴の配某氏猶恙なし、二孫をして出て先考に見えしめて曰、吾が家詩書を業とし、世顯名あり、吾兒不幸にして短折す、今二孫を以て先生を累はすと、是に於て二孫業を先考に受く、何もなく祖母氏卒す、二孫後遂に竝に醫と爲る、那波氏は世播州に住し、家資鉅萬活所が紀藩に事ふるに迄り、歲祿五百石、家道益饒なり、是を以て力を極めて書を典し、數萬卷に至る、余が友師曾は活所と別家にして同宗なり、才名夙に著はる、今に至りて緊苦書を讀む、其志小ならず、謂はゆる彼に廢して此に興る者か。

堀敬夫名は正意、杏菴と號す、惺窩の門人なり、初め張藩に仕ふ、安藝侯素とより其名を聞き、禮を厚くして之れを張藩に請ふ、張藩命じて、其聘に應ぜしむ、是に於て更

其聘、於是更仕安藝侯子孫嗣職、世爲藝州文學、其詩見扶桑千家詩、暨扶桑名勝詩集。松永昌三名遐年、惺窩門人、聲名籍甚於一時矣、承保中、勅以布衣召講春秋經、因名其居曰春秋館、館在西洞院、是時板倉侯爲京尹、好學、素重昌三、聞春秋館狹小、爲卜宅地於堀川、名曰講習堂、昌三二子、長昌易、次永三、昌三卒、昌易居春秋館、嗣絕、永三居講習堂、子孫能守其緒業云、昌三著述、余不多觀、名勝詩集、載市原山題詠八首并小序。

三宅亡羊號、寄齋、活所同時人、或曰、亦惺窩弟子、講說爲業、其子子燕名道乙、始仕備前、名勝詩集、載三宅可三備前八景詩、疑是其人若子孫也。

に安藝侯に仕ふ、子孫職を嗣ぎ、世藝州の文學と爲る、其詩扶桑千家詩、暨扶桑名勝詩集に見ゆ。

松永昌三名は遐年、惺窩の門人なり、聲名一時に籍甚なり、承保中、勅して布衣を以て召して春秋經を講せしむ、因て其居を名づけて、春秋館と曰ふ、館は西の洞院に在り、是の時板倉侯、京尹と爲り、學を好む、素とより昌三を重んず、春秋館の狭小なるを聞き、爲に宅地を堀川に卜す、名づけて講習堂と曰ふ、昌三二子あり、長は昌易、次は永三、昌三卒す、昌易、春秋館に居る、嗣絶す、永三講習堂に居る、子孫能く其緒業を守ると云ふ、昌三の著述、余多く觀ず、名勝詩集に市原山の題詠八首並に小序を載す。

三宅亡羊は、寄齋と號す、活所と同時の人、或は曰、亦惺窩の弟子と、講說を業と爲す、其子子燕名は道乙、始め備前に仕ふと、名勝詩集に三宅可三の備前八景の詩を載す、疑ふらくは是れ其人若くは子孫ならん。

惺窩門人有菅原玄同字得菴有鶴飼信之
字子直羅山門人有人見友元永田道慶活
所門人奥田舒雲昌三門人野間三竹等當
時竝有聲譽爾時詩論未透雅音罕振今閱
諸人遺稿雖各有低昂大較魯衛之政。

山崎闇齋專講性理如詩章非其本色要之
其所以不朽在彼而不在此也名賢詩集載
闇齋詩百首可謂愴父不知好惡也中村惕
齋藤井蘭齋米川操軒亦有詩見千家詩。

寬文中稱詩豪者無過於石川丈山僧元政
丈山出處在世之口碑已武且文隱操亦卓
然年九十卒可謂偉人也至今京師東北一
乘寺邑有詩仙堂暨其遺留琴硯等依然尙
存當時嘯詠其中誓不入城市諸名士每經

惺窩の門人に菅原玄同字は得菴あり、鶴飼信之字は子直あり、羅山の門人に、人見友元、永田道慶あり、活所の門人、奥田舒雲、昌三の門人野間三竹等當時竝に聲譽あり、爾時詩論未だ透らず、雅音振ふこと罕なり、今諸人の遺稿を閱するに、各低昂ありと雖、大較魯衛の政なり。

山崎闇齋は專性理を講ず、詩章の如きは、其本色に非ず、之れを要するに其不朽なる所以は、彼れに在りて此に在らざるなり、名賢詩集に闇齋の詩百首を載す、愴父好惡を知らずと謂ふべきなり、中村惕齋、藤井蘭齋、米川操軒、亦詩あり、千家詩に見ゆ。

寬文中詩豪と稱する者は、石川丈山、僧元政に過ぐるは無し、丈山の出處世の口碑に在り、已に武に且文、隱操も亦卓然、年九十にして卒す、偉人と謂ふ可きなり、今に至まで、京師の東北、一乘寺邑に詩仙堂暨び其遺留の琴硯等依然として尙存する有り、當時其中に嘯詠し、誓つて城市に入らず、諸名士經過する毎に、談論唱和以て娛樂

過、談論唱和、以爲娛樂、所著有覆醬集、韓人權伏者爲之序、稱曰、日東李杜、余覽其集、句多拙累、往往不免俗習、權伏溢美、不俟辯論、然當時諸儒詠言、率出于性理之緒餘、之溫柔旨、而丈山獨夢寐山林、襟懷瀟洒、如牕間殘月影、枕上遠鐘聲、風柳起鶯懶、山花留馬蹄、半壁殘燈影、孤林落葉聲等、意象間雅、殊可諷詠。

僧元政、修持法華、戒律堅固、而雅尙風雅、所著有艸山文集、嘗結芳於京南深草里、香火到今不斷、其詩雖韻格不高、意義平實、元政本江州士族、鄉有老母、後迎養菴側、孝敬純至、客中絕句曰、逐月乘風出竹扉、故山有母淚沾衣、松間一路明如晝、遙識倚門望我歸、

と爲す、著す所覆醬集あり、韓人權試といふ者、之れが序を爲り、稱して日東の李杜と曰ふ、余其集を覽るに、句拙累多く、往々俗習を免れず、權試が溢美、辯論を俟たず、然も當時諸儒の詠言、率性理の緒餘に出で、溫柔の旨に乏し、而して丈山獨山林に夢寐し、襟懷瀟洒なり、牕間殘月の影、枕上遠鐘の聲、「風柳鶯懶を起し、山花馬蹄を留む、半壁殘燈の影、孤林落葉の聲等の如き、意匠間雅、殊に諷詠す可し。

僧元政は、法華を修持す、戒律堅固而して雅尙風雅、著す所、艸山文集あり、嘗て茅を京南の深草里に結ぶ、香火今に到まで斷えず、其詩、韻格尚からずと雖、意義平實なり、元政本と江州の士族、郷に老母あり、後菴側に迎養す、孝敬純至なり、客中の絶句に曰、月を逐ひ風に乗じて竹扉を出づ、故山母あり涙衣を沾す、松間の一路明にして晝の如し、遙に識る門に倚りて我か歸るを望むをと、其實を記するなり、是より先き、明人陳元寶、亂を避けて投化

記其實也、先是、明人陳元贊、避亂投化、後以山人應張藩聘、時時來遊京師、會晤元政、心機契合、締方外盟、有元元唱和集、元政詩中有云、人無世事、交常淡、客慣方言、譚每諧、亦記其實也、或曰、元政得袁中郎集、悅之、以爲帳祕、余謂中郎詩、祖述白香山、欲矯七子套、熱、勤去陳腐、而其弊失、諸率易淺俗、元政贈元贊曰、公本大唐賓、七十六老人、吾少、公卅六、才調況非倫、不知何夙世、合如車雙輪等、正是公安委流、或說恐然。

明人避亂投化者、元贊之外有朱之瑜、又有林榮、何倩、顧卿、僧獨立輩、元贊字義都、號、既白山人、崇禎進士、下第者云、朱之瑜字楚璜、號、舜水、嘗爲魯王賓客、明亡、附商舶來、長崎、

す、後ち山人を以て張藩の聘に應ず、時々京師に來遊し、元政に會晤す、心機契合、方外の盟を締ぶ、元元唱和集あり、元政詩中に云ふあり、人は世事無くして交り常に淡く、客は方言に慣れて譚毎に諧ふと、亦其實を記するなり、或ひと曰、元政、袁中郎の集を得て之を悦び、以て帳祕と爲すと、余謂ふ中郎の詩は、白香山を祖述し、七子の套熟を矯めんと欲し、勤て陳腐を去り、而して其弊や諸を率易淺俗に失す、元政、元贊に贈るに曰く、公は本、大唐の賓、七十六の老人、吾れ公より少きこと卅六、才調況んや倫に非ず、知らず何の夙世ぞ、合して車の雙輪の如し等、正に是れ公安の委流、或ひとの説恐くは然らん。

明人亂を避けて投化する者、元贊の外に、朱之瑜あり、又林榮、何倩、顧卿、僧獨立の輩あり、元贊字は義都、既白山人と號す、崇禎の進士、下第する者と云ふ、朱之瑜字は楚璜、舜水と號す、嘗て魯王の賓客と爲る、明亡び、商舶に附し、長崎に來る、人、文儒たるを知るなし、窮困備さに至る、獨

無人知爲文儒窮困備至獨有筑後安藤省

菴執謁爲弟子省菴世事柳川侯歲祿二百石於是分其半供葬水以助薪水常藩聞之瑜名聘召賜祿五百石眷遇甚篤年八十餘而終私謚曰文恭林何願三人不詳其顛末大高季明芝山稿中稱三人明儒推獎特至意三人止于長崎而不入京歟或後再西歸者歟又芝山稿中說元贊子瑜之事與他說異矣其言曰陳杭州販夫朱南京漆工竝非知學者余未知其孰是也若詩則元贊爲勝元贊詩間有佳者其氣韻蕭索者亦唯邦亡家破孤身航海理固然矣何林願三人詩見芝山吟稿暨名勝詩集者鄙俚最甚僧獨立名善書詩亡論耳之瑜詩余未見焉或曰之

筑後の安藤省菴あり謁を執りて弟子と爲る省菴世柳川侯に事ふ歲祿二百石是に於て其半を分ち葬水に供し以て薪水を助く常藩之瑜の名を聞き聘召し祿五百石を賜ひ眷遇甚篤し年八十餘にして終る私に謚して文恭と曰ふ林何願の三人は其顛末を詳にせず大高季明の芝山稿中に三人を明儒と稱し推獎特に至る意ふに三人長崎に止りて京に入らざるか或は後再び西歸する者か又芝山稿中に元贊子瑜の事を説く他說と異なり其の言に曰陳は杭州の販夫朱は南京の漆工竝に學を知る者に非ずと余未だ其孰れか是なるを知らざるなり詩の若きは則元贊を勝ると爲す元贊の詩間佳なる者あり其氣韻蕭索なる者は亦唯邦亡び家破れ孤身海に航す理固より然らん何林願の三人の詩芝山吟稿暨び名勝詩集に見ゆる者鄙俚最甚し僧獨立善書に名あり詩は論する亡きのみ之瑜の詩余未だ見ず或は曰之瑜文集三十卷ありと。

瑜文集三十卷。

省菴之於之瑜、好學勇義、求諸古人、不可多得、省菴名守約、少時遊京、從學昌三、名善屬文、詩亦多傳、間有佳句。

高季明、本姓大高坂氏、自修爲高、字清助、號芝山、土佐州人、其履歷詳于男義明所撰高氏家譜、少時遊學兩都之間、博覽而有、大志、最研理義、又好著述、有所作、則必致之長崎、請正於林、何、顧三人、三人極口褒賞、其答季明書曰、我輩來貴國、視數家文章、雖各有所長、然或未諳章法句法、唯足下所作、盡合規矩、又曰、足下文章、意深語簡、韓柳歐蘇無過、又曰、足下詩、格調兼高、宜貴貴國紙、孟浪諛言、固不足論、而季明信之、妄自夸毗、遂欠精

省菴之之瑜に於ける、學を好み義に勇む、諸を古人に求むるに、多く得可からず、省菴名は守約、少時京に遊び、昌三に從學す、善く文を屬するに名あり、詩も亦多く傳はる、間佳句あり。

高季明は、本姓は大高坂氏、自修して高と爲す、字は清助、芝山と號す、土佐州の人なり、其履歷は、男義明が撰する所の高氏家譜に詳なり、少時兩都の間に遊學す、博覽にして大志あり、最理義を研す、又著述を好む、作る所あれば、則必之れを長崎に致し、正を林、何、顧の三人に請ふ、三人口を極めて褒賞す、其季明に答ふる書に曰、我輩貴國に來り、數家の文章を視る、各長ずる所ありと雖、然も或は未だ章法句法を諳んぜず、唯足下の作る所、盡く規矩に合ふと、又曰、足下の文章、意深く語簡に、韓柳歐蘇も過ぐるることなし、又曰、足下の詩、格調兼高し、宜く貴國の紙を貴くすべしと、孟浪の諛言、固より論するに足らず、而して季明之れを信じ、妄りに自ら夸毗し、遂に精細の工夫を欠く、芝山會稿十二卷、篇章多からずと爲さず、而して採る可きもの幾くもなし、余輩だ季明が慷慨氣節あ

細工夫、芝山會稿十二卷、篇章不爲不多、而可採者無幾、余酷愛季明慷慨有氣節、因深惜爲三人所誤也。

延寶中、吉田元俊、纂扶桑名勝詩集、元和以來作者不下百人、涇渭混淆、其中雖有短長、樂而論之、無足採錄者、平岩仙桂、熊谷立閑、山本洞雲、咏題殊多、余未詳其人、唯有餘元、徽西岡八咏、體裁頗整、元澄名澄、號東菴、有竹雨齋詩集。

宇都宮由的名三近、號遁菴、周防人、昌三門人、講學於京師、有遜菴詩集、弟子恕方者輯錄其序云、先生著述罹災、今所存特晚年作云云、余閱其集、詩猶千餘首、七絕最多、至七百首、其中云海色茫茫、山色長、孤舟風雨轉

るを愛す、因て深く三人に誤らるるを惜むなり。

延寶中吉田元俊、扶桑名勝詩集を纂す、元和以來の作者百人に下らず、涇渭混淆す、其中短長ありと雖、纂して之れを論ずれば、採録するに足る者なし、平岩仙桂、熊谷立閑、山本洞雲、咏題殊に多し、余未だ其人を詳にせず、唯餘元、徽の西岡の八詠あり、體裁頗整ふ、元澄名は澄、東菴と號す、竹雨齋詩集あり。

宇都宮由の名は三近、遁菴と號す、周防の人、昌三の門人、京師に講學す、遜菴詩集あり、弟子恕方といふ者輯録す、其序に云ふ、先生の著述災に罹る、今存する所は、特に晩年の作と云云、余其集を閱するに、詩猶千餘首、七絶最多し、七百首に至る、其中に云ふ、云海色茫茫、山色長し、孤舟風雨轉、淒涼、天涯一夜愁人の夢、半は京城に在り、半は故郷と、悽愴婉約、佳作と稱す可し、其他は則無陋淺、俗笑ふ可

凄涼、天涯一夜愁人夢、半在京城半故郷、悽愴婉約、可稱佳作、其他則蕪陋淺俗、可笑者不鮮、十冊其九、則可不朽矣、又五言、好花三月錦、啼鳥幾絃琴、千竿遮畏日、一榻納微涼、亦佳

松原一清、字孫七、號鶴峰、安藝人、仕本藩、職爲行人、幼好讀書、九歲作詩、長而益勤、詩集二卷、名出思稿、語多曾臆、不喜踏襲、其宿西條驛云、西風飄暑送新涼、不厭前程雲水長、行李更無官事異、悉收秋色滿詩囊、意度悠遠、足可誦咏。

貝原益軒、名篤信、字子誠、筑前人、後隱居京師、元和以來、稱饒著述者、東涯徂徠之外、蓋無如益軒者、其所撰、不爲名高勳益後人、乃

き者、鮮からず、十に其九を刪らば、則不朽なる可し、又五言に、「好花三月の錦、啼鳥幾絃の琴、千竿畏日を遮り、一榻微涼を納る」と、亦佳なり。

松原一清、字は孫七、鶴峯と號す、安藝の人、本藩に仕ふ、職行人たり、幼にして好んで書を読む、九歳にして詩を作る、長じて益勤む、詩集二卷、出思稿と名く、讀胸臆多し、踏襲を喜ばず、其西條驛に宿するに云ふ、「西風暑を驅りて新涼を送る、厭はず前程雲水の長きを、行李更に官事の累無く、悉く秋色を收めて詩囊に滿つ」と、意度悠遠、誦咏す可きに足れり。

貝原益軒、名は篤信、字は子誠、筑前の人、後、京師に隱居す、元和以來、著述饒しと稱する者、東涯、徂徠の外、蓋益軒に如く者なし、其撰する所、名高の爲めにせず、勤めて後人に益す、乃家訓、鄉訓、樹藝製造に至るまで、塵々悉々、

至家範鄉訓、樹藝製造、臺臺懇懇、余少年時、不解事、意輕其學術、今而思之、殊爲懺悔、其詩亦朴實矣、益軒之姪損軒、名好古、思尙如同、舅氏著述數種、詩亦頗占地步、又有貝原存齋、余未許其人、千家詩、載其三月盡作云、今年花事今宵盡、衰老難期來歲春、風光別我、我何恨、留與後人千萬春、可謂知道之言、村上冬嶺、名友怪、字漫甫、活所門人、與余先大父、同學相友善、余少年時、聞先考數稱其人、蓋好學天性、其推獎先達、揄揚後學、不啻如自其口出、一以爲己任、當時諸儔會讀二十一史、會月數次、又結詩社、竝輪會主、必有酒食、臨期、會主或有他故、冬嶺必代爲主、以故社會綿綿二十有餘年、後進所作、時有佳

余少年の時、事を解せず、意に其學術を輕んず、今にして之れを思へば、殊に懺悔を爲す、其詩も亦朴實なり、益軒の姪損軒、名は好古、志尙舅氏に如同す、著述數種、詩も亦頗地歩を占む、又、貝原存齋あり、余未だ其人を許にせず、千家詩に、其三月盡の作を載す、云ふ、今年の花事今宵に盡く、衰老期し難し來歳の春、風光我れに別る、我れ何ぞ恨まん、後人に留與す千萬春、と知道の言と謂ふ可し。

村上冬嶺、名は友怪、字は漫甫、活所の門人、余が先大父と同學にして相友とし善し、余少年の時、先考の數、其人を稱するを聞く、蓋、好學天性、其先達を推獎し、後學を揄揚する、嘗に其口より出だすが如きのみならず、一に以て己が任と爲す、當時の諸儔、二十一史を會讀す、會月に數次、又詩社を結ぶ、竝に會主を輪す、必酒食あり、期に臨んで、會主或は他故あれば、冬嶺必代りて主と爲る、故を以て社會綿々たること二十有餘年、後進の作る所、時に佳

句、則擊節嘆稱、吟誦數回、一時藝苑賴之吐氣、其自運亦矯矯乎一時矣、今讀冬嶺詩、精深工整、超出前輩、元和以後、七言律、到此始得其體、梅花云、名園桃李競、嬋娟獨自清、寒倚竹邊、東閣題詩人勳興、西湖載酒鶴迎船、點苔欲效霏霏雪、傍柳偏含淡淡煙、何處金笳明月下、曉風咽斷更悽然、秋夜宴伏見某樓云、秋入水鄉、鳴荻葦、壯遊不用賦悲哉、豐城劍氣衝星起、北海樽酒乘月開、萬頃鷗沙吞楚澤、千帆買舶泝蓬萊、此翁鬢鏤人爭說、物色行看到釣臺、又小集席上作云、青檣歲晚思難禁、共見頭顱霜色深、忼慨堪收燈下淚、低垂姑任世間心、愁邊一笑比雙壁、老後分陰重寸金、薄官身間亦天幸、清時莫作獨

句あれば、則節を撃ちて嘆稱し、吟誦數回、一時藝苑之れに頼りて氣を吐く、其自運も亦一時に矯々たり、今冬嶺の詩を讀むに、精深工整、前輩に超出す、元和以後、七言律、此に到りて始めて其體を得たり、梅花に云ふ、名園の桃李、嬋娟を競ふ、獨自清寒竹邊に倚る、東閣詩を題して人興を動かし、西湖酒を載せて鶴船を迎ふ、吾に點して效はんと欲す、霏々の雪、柳に傍ふて偏に含む、淡々の烟、何れの處の金笳ぞ明月の下、曉風咽斷して更に悽然と、秋夜伏見の某樓に宴するに云ふ、秋は水郷に入りて荻葦鳴る、壯遊用ひず悲哉を賦するを、豐城の劍氣星を衝いて起り、北海の樽酒月に乘じて開く、萬頃の鷗沙楚澤を吞み、千帆の買舶蓬萊に泝る、此の翁鬢鏤人争ひ説く、物色行く看ん釣臺に到るをと、又小集席上の作に云ふ、青檣歳は晚て思禁へ難し、共に見る頭顱霜色の深きを、忼慨收むるに堪へたり、燈下の涙、低垂姑く任す世間の心、愁邊の一笑雙壁に比し、老後の分陰寸金よりも重し、薄官身間なるも亦天幸、清時作す莫れ獨醒の吟と、又田家紹

醒吟、又、田家絕句云、羈思官情兩不知、春耕夏耨鬱成絲、門前垂柳長拂地、不爲別離折一枝。

伊藤仁齋、首斥程朱、創一家學、其說是非、余有別論、東涯盍簪錄曰、先人教授生徒、四十餘年、諸州之人、無國不至、唯飛驒佐渡、壹岐三州人不及門、執謁之士、以千數、要之亦豪傑之士也、槩其爲人、宜不屑聲律也、而詩間有有旨趣者、殊可嘉稱。

東涯仁齋長子、名長胤、字原藏、其如經義文章、姑舍是、詩亦一時鉅匠、近人動輒曰、東涯詩、冗而無法、率而無格、噫、談何容易、東涯篇章最饒、余閱其集、有潤麗者、有素朴者、有精緻工整者、有平易淺近者、體段難齊、余雖生

句に云ふ、羈思官情兩知らず、春耕夏耨鬱成絲と成る、門前の垂柳長して地を拂ふ、別離の爲に一枝を折らずと。

伊藤仁齋は、主として程朱を斥け、一家の學を創す、其說の是非は、余別論あり、東涯の盍簪錄に曰、先人生徒を數授する四十餘年、諸州の人、國として至らざるはなし、唯飛驒、佐渡、壹岐の三州人門に及ばず、謁を執るの士千を以て數ふと、之を要するに亦豪傑の士なり、其人と爲りを槩するに、宜ど聲律を屑とせざらん、而して詩間旨趣ある者あり、殊に嘉稱すべし。

東涯は仁齋の長子、名は長胤、字は原藏、其經義文章の如きは、姑く是れを舍く、詩も亦一時の鉅匠なり、近人動すれば輒ち曰、東涯の詩、冗にして法なく、率にして格なしと、噫、談何ぞ容易なる、東涯、篇章最饒し、余其集を閱するに、潤麗なる者あり、素朴なる者あり、精緻工整なる者あり、平易淺近なる者あり、體段齊くし難し、余生れて時に後ると雖、猶東涯を識るに及ぶ、其人温厚謙抑、口訥々と

後時猶及識東涯其人、溫厚謙抑、口訥訥、似于不能言者、與今時學者自託龍門、倨傲、名、懶惰失禮者、不同也、人有乞詩、則無論貴賤長少、隨勉應之、大名之下、乞者日衆、所謂卷軸之積、如束筍者、是以其所作、有歷鍛鍊、有出率意、畢竟無害爲大家、東涯兄弟五人、其季卽今蘭嶋是也。

北村可昌、字伊平、號篤所、江州人、仁齋門人、在京師、教授生徒、負笈者四方、雲集、朝紳爲之弟子者亦衆、元祿中、上皇聞其篤學老而不倦、特宣賜古硯、享保三年卒、壽七十二、碑銘及書、竝成貴介手、名賢詩集、載其詩四十餘首、和州道中作云、飛雪寒風天漠漠、長途短晷意恩恩、問雲本是無情物、底事營營西

して、言ふ能はざる者に似たり、今時の學者の自ら龍門に託し、倨傲名を養ひ、懶惰禮を失ふ者と同しからざるなり、人、詩を乞ふあれば、則貴賤長少を論ずるなく、隨勉之れに應ず、大名の下、乞ふ者日に衆し、謂はゆる卷軸の積むこと、束筍の如き者なり、是を以て、其作る所、鍛鍊を歴るあり、率意に出づるあり、畢竟大家たるを害するなし、東涯兄弟五人、其季は卽今の蘭嶋はれなり。

北村可昌、字は伊平、篤所と號す、江州の人、仁齋の門人、京師に在りて、生徒に教授す、笈を負ふ者四方より雲集す、朝紳之れか弟子と爲る者も亦衆し、元祿中、上皇其篤學老いて倦まざるを聞き、特に宣して古硯を賜ふ、享保三年卒す、壽七十二、碑銘及び書、竝に貴介の手に成る、名賢詩集に、其詩四十餘首を載す、和州道中の作に云ふ、飛雪寒風天漠漠、長途短晷意恩々、問雲本是れ無情の物、底事ぞ營々西復東と、余近ごろ照朝文苑を閱するに、可昌

復東、余近聞熙朝文苑、有可昌謝賜硯表、其大意深欽慶爲其傳家之寶云、然可昌一男一女、男不肖且癡疾、可昌沒後、不知賜硯流落何處。

小川成章、字伯達、號立所、仁齋門人、按東涯蓋簪錄曰、先人教授生徒、殆以千數、小川成章、北村可昌、相從最久、衆推爲上足、又曰、小川吉亨、京師人、壯歲不事家產、晚年卜居北野、稼圃爲樂、閑暇手自謄寫異書、有二子曰、成章、成材、共從先人受學、成章長而有學行、後仕常藩云云、據此、則成章亦一時翹楚、其詩見名賢詩集及千家詩。

松下見樸、字子節、京師人、受學先大父、篤志博綜、尤好著述、余家藏其詩若干、氣骨沈雄、

の賜硯を謝する表あり、其大意深く其傳家の寶たるを欽慶すと云ふ、然も可昌一男一女、男不肖にして且癡疾あり、可昌没する後、賜硯何の處に流落するを知らず。

小川成章、字は伯達、立所と號す、仁齋の門人、按するに東涯の蓋簪錄に曰く、先人、生徒を教授する殆んど千を以て數ふ、小川成章、北村可昌、相從ふこと最久し、衆推して上足と爲すと、又曰、小川吉亨は京師の人、壯歲家産を事とせず、晩年居を北野に卜し、稼圃して樂と爲す、閑暇には手自ら異書を謄寫す、二子あり、成章、成材と曰ふ、共に先人に從ひて學を受く、成章長じて學行あり、後常藩に仕ふと云云、此れに據れば、則成章も亦一時の翹楚、其詩は名賢詩集及び千家詩に見ゆ。

松下見樸、字は子節、京師の人、學を先大父に受く、篤志博綜、尤著述を好む、余が家其詩若干を藏す、氣骨沈雄、一時に翹々たり、書法も亦蒼勁にして潤美、其應を咏するに

翹翹一時、書法亦蒼勁而潤美、其咏鷹云、齊野玄霜楚澤冰、十分猛氣正騰騰、目中今已無凡鳥、天外常思制大鵬、利爪幾經紅血戰、奇毛深入白雲層、誰言一飽即颺去、左指右呼憐爾能、又題秀野亭五律十五首、甚有曲致、語繁不錄。

緒方維文、字宗哲、亦受業先大父、學成仕、土佐侯、男某不業、家遂絕矣、熙朝文苑載其詩、而詩非所長也。

又曰、千家詩載緒方元眞詩、余不詳其人、疑是宗哲族也、其有馬道中作云、木綿花發稻青青、處處水田龍骨鳴、百里長堤日將午、籃輿且傍樹陰行。

大町敦素、名質、稱正淳、京師人、受學先大父、

云ふ、齊野の玄霜楚澤の氷十分の猛氣正に騰々、目中今已に凡鳥なし、天外常に思ふ大鵬を制せんと、利爪幾か經たり紅血戰、奇毛深く入る白雲層、誰か言ふ一飽即颺り去ると、左指右呼爾が能を憐むと、又秀野亭に題する五律十五首、甚曲致あり、詩繁なれば録せず。

緒方維文、字は宗哲、亦業を先大父に受く、學成りて土佐侯に仕ふ、男某業とせず、家遂に絶せり、熙朝文苑に其詩を載す、而して詩は長ずる所に非ざるなり。

又曰、千家詩に、緒方元眞が詩を載す、余其人を詳にせず、疑らくは是れ宗哲の族ならん、其有馬道中の作に云ふ、木棉花發きて稻青々、處々の水田龍骨鳴る、百里の長堤日將に午ならんとす、籃輿且く樹陰に傍ふて行くと。

大町敦素、名は質、正淳と稱す、京師の人、學を先大父に受

詩見熙朝文苑、當時梁蛻巖和徐文長詠雪、七言八十韻、尖新而精巧、膾炙遠近、教素有和作、倣其體、余少年時、一再觀之、今不復記、可惜。

笠原雲溪、名龍鱗、稱玄菴、京師人、詩名顯著、一時、到今遐邇僻境之士、尙嘖嘖稱焉、蓋自惺窩先生講學於京師、百有餘年于茲、其間雖有以詩賦文章稱者、風俗未漓、學必本經史、以翰墨爲緒餘、而雲溪獨以詩行、是時仁齋門人中、島正佐者、專業講說、而所講不出四書、終始循環、一日數席、諸州生徒、輻湊其門、雲溪居止、接近正佐、乃以詩授人、生徒以爲便、於是雲溪詩名、傳播四方、亦京師學風一變之機會也、雲溪沒、門人竹溪者、鈔其道

く、詩は熙朝文苑に見ゆ、當時梁蛻巖徐文長の詠雪に和する七言八十韻、尖新にして精巧、遠近に膾炙す、教素有和あり、其體に倣ふ、余少年の時、一再之れを觀る、今復記せず、惜む可し。

笠原雲溪名は龍鱗、玄菴と稱す、京師の人、詩名一時に顯著す、今に到りて遐邇僻境の士、尙嘖々として稱す、蓋惺窩先生京師に講學せしより、茲に百有餘年、其間詩賦文章を以て稱する者ありと雖、風俗未だ漓ならず、學必經史に本づき、翰墨を以て緒餘と爲す、而して雲溪獨詩を以て行ふ、是の時仁齋の門人、中島正佐といふ者、專業講說を業とす、而して講する所は四書に出でず、終始循環、一日數席、諸州の生徒、其門に輻湊す、雲溪の居止、正佐に接近す、乃詩を以て人に授く、生徒以て便と爲す、是に於て雲溪の詩名、四方に傳播す、亦京師學風一變の機會なり、雲溪沒し、門人竹溪といふ者、其遺稿を鈔し、梓して之を行ふ、桐葉編と名く、其詩嫵媚自ら喜ぶに足る、而して氣骨

稿、梓而行之、名桐葉編、其詩嫵媚、足自喜、而氣骨纖弱、如律詩、全篇佳者無幾、絕句則間有堪錄者、五言、雷驅殘雲去、雨隨返照收、遂涼多少客、立盡柳塘頭、七言、白屋寒深古敞裘、朔風微曉未全休、家童預識雪將至、行汲前溪一曲流、又曰、雲溪詩、瑕類最多、梅花七律、有疎影上牕月亦香句、足稱佳句、而對太不協、又失鶴七律、當時喧傳、以爲絕唱、其頷聯曰、松巢影動猶疑在、蕙帳眠驚誤欲呼、誠佳矣、頸聯殊不協焉、雲溪又有絕句、曰、樓蘭介子劍、南越終軍纓、清世成何事、壯心誤此生、人傳雲溪卓犖、兼好武術、其或然也、右桐葉編卷末、附載竹溪詩數十首、跋亦竹溪作、而無序、以朝紳和歌一首代之、竹溪余未詳、

纖弱、律詩の如きは、全編佳なる者幾もなし、絶句は期間録するに堪へたる者あり、五言に「雷は殘雲を驅りて去り、雨は返照に隨ひて收まる、涼を逐ふ多少の客、立ち盡す柳塘の頭」と、七言に「白屋寒は深し古敞裘、朔風曉に微して未だ全く休まず、家童預め識る雪の將さに至らんとするを、行て汲む前溪一曲の流と、又曰、雲溪の詩、瑕類最多し、梅花の七律に「疎影牕に上りて月も亦香し」の句あり、佳句と稱するに足る、而して對太だ協はず、又失鶴の七律、當時喧傳して、以て絶唱と爲す、其頷聯に曰、松巢影動きて猶在るか、と疑ひ、蕙帳眠驚きて誤りて呼ばんと欲すと、誠に佳なり、頸聯殊に協はず、雲溪又絶句あり、曰「樓蘭介子が劍、南越終軍の纓、清世何事を成さん、壯心此の生を誤ると、人は傳ふ、雲溪卓犖、兼て武術を好むと、其れ或は然らん、右桐葉編の卷末に、竹溪の詩數十首を附載す、跋も亦竹溪の作、而して序なし、朝紳の和歌一首を以て之れに代ふ、竹溪は余未だ其人を詳にせず、先師の遺稿を以て翫弄の具と爲し、且己が名を售るのを奇貨と

其人、以先師遺稿爲翫弄具、且爲售、已名奇貨、輕薄亦甚。

柳川順剛、字用中、號震澤、又號雪溪、京師人、千家詩、載元日七律一首、其中云、乾坤於我知雞肋、邱壑何心負鷓冠、頗錚錚矣。

柳川滄洲、名三省、字魯甫、本姓向井氏、出繼順剛後、冒姓柳川、從木下順菴學、學成不仕、授徒講學、或曰、元和以來、從事翰墨者、雖師承去取不一、大抵於唐祖杜少陵、韓昌黎、于宋宗蘇黃、二陳、陸務觀等、至雲溪、始有唐左宋、而猶未及、初盛中晚之目、滄洲出而後始以盛唐爲正、鶴余謂是之時、物徂徠唱、古文辭於關東、稱揚明李于鱗、王元美、輕俊子弟靡然爭從、然京師未有爲其說者、而今誦滄

洲、輕薄亦甚。

柳川順剛、字は用中、震澤と號す、又雪溪と號す、京師の人、千家詩に元日の七律一首を載す、其中に云ふ、乾坤我れに於て雞肋を知る、邱壑何の心ぞ鷓冠に負く」と頗錚錚たり。

柳川滄洲、名は三省、字は魯甫、本姓は向井氏、出て順剛の後を繼ぎ、姓柳川を冒す、木下順菴に從ひて學ぶ、學成りて仕へず、徒に授け學を講ず、或は曰、元和以來、翰墨に從事する者、師承去取一ならずと雖、大抵唐に於ては杜少陵、韓昌黎を祖とし、宋に于ては蘇黃、二陳、陸務觀等を宗とす、雲溪に至りて、始めて唐を右とし、宋を左とし、而して猶未だ初唐中晚の目に及ばず、滄洲出で、後始めて盛唐を以て正鶴と爲す、余謂ふ、是の時、物徂徠古文章を關東に唱へ、明の李于鱗、王元美を稱揚す、輕俊の子弟靡然として爭ひ從ふ、然も京師には未だ其說を爲す者有らず、而して今滄洲の詩を誦するに駭々乎として明人の聲

洲詩、駸駸乎明人聲口、蓋氣運所鼓、作者亦莫知其然而然也。滄洲送人之美濃曰、西風萬里動、關河搖落何堪送、玉珂遲暮誰憐平子賦、清時猶唱伯鸞歌、路連山嶽秋雲合、天入江湖旅雁多、聞道澗陽秋水濶、莫將篋笠老煙波、又、咏曉鶯七絕曰、香霧冥冥夜色深、黃鸞啼處月初沈、無端喚起梅花夢、能使春心滿上林、又五絕關山月曰、青海孤雲盡、天山片月寒、高樓人不寐、半夜望長安、滄洲教授有方、其門人多成材、其最顯者、石川伯卿、上柳公通、及長野方義、渡邊士乾、大橋叔輔之徒、滄洲卒後、皆能守舊學、文會無渝、伯卿方義已沒、公通、士乾、叔輔、今無恙云。

石川伯卿、名正恆、號麟洲、京師人、滄洲門人、

口なり、蓋氣運の鼓する所、作者も亦其然るを知る莫くして而して然るなり、滄洲、人の美濃に之くを送るに曰、西風萬里關河に動く、搖落何ぞ堪へん玉珂を送るに、遲暮誰か憐む平子の賦、清時猶唱ふ伯鸞が歌、路山嶽に連りて愁雲合し、天江湖に入りて旅雁多し、道ふを聞く澗陽秋水濶しと、篋笠を將て烟波に老ゆる莫れ」と、又曉鶯を咏する七絶に曰く、香霧冥々夜色深し、黃鸞啼く處月初めて沈む、端なく喚び起す梅花の夢、能く春心をして上林に満た使む」と、又五絶の關山月に曰く、青海孤雲盡き、天山片月寒し、高樓人寝ねず半夜長安を望む」と、滄洲教授有方あり、其門人多く材を成す、其最顯るゝ者は、石川伯卿、上柳公通、及び長野方義、渡邊士乾、大橋叔輔の徒なり、滄洲卒して後、皆能く舊學を守り、文會渝はること無し、伯卿、方義已に沒し、公通、士乾、叔輔、今恙なしと云ふ。

石川伯卿、名は正恆、麟洲と號す、京師の人、滄洲の門人、學

學成仕小倉侯爲人謹恪而藻思亦蔚然矣。嘗著辯道解蔽、駁徂徠說、嗣子今嗣職爲小倉文學。

長野方義、字之宜、往余於友人壁上、賭其詩數首、今偶記一首、秋闈怨云、搖落寒碯秋晚催、黃花成客幾時回、傷心最是南歸雁、萬里飛從君處來。

松岡玄達、名成章、號恕菴、又稱怡顏齋、京師人、博學強記、無不該通、最研確本草家學、諸國生徒、上其席者、每以百數、少時頗事操觚、後以講學、遂廢吟哦、故所傳詩篇至罕、余家藏其少作數紙、亦自平實。

堀景山、名正超、字君燕、南湖之從弟、與南湖同爲杏菴玄孫、蓋杏菴之後、分爲二家、竝爲

成りて小倉侯に仕ふ、人と爲り謹恪、而して藻思も亦蔚然たり、嘗て辯道解蔽を著し、徂徠の説を駁す、嗣子今職を嗣で、小倉の文學と爲る。

長野方義、字は之宜、往に余友人の壁上に於て、其詩數首を賭る、今偶一首を記す、秋闈怨に云ふ、搖落寒碯秋晚に催す、黃花の成客幾時にか回らん、傷心最是れ南歸の雁、萬里飛で君の處より來ると。

松岡玄達、名は成章、恕菴と號す、又怡顏齋と稱す、京師の人、博學強記、該通せざる無し、最、本草家の學を研確す、諸國の生徒、其席に上る者、毎に百を以て數ふ、少時頗操觚を事とす、後講學を以て、遂に吟哦を廢す、故に傳ふる所の詩篇至りて罕なり、余が家其少作數紙を藏す、亦自ら平實なり。

堀景山、名は正超、字は君燕、南湖の從弟、南湖と同く杏菴の玄孫たり、蓋、杏菴の後、分れて二家と爲る、竝に藝藩の文學たり、景山篤學精通、而して和厚人を近づく、循々と

藝藩文學、景山、篤學精通、而和厚近人、循循獎掖後學、是以從遊之士多嚮彬雅、其詩結構整齊、亦一時作家、某年卒、于京師、藝侯親製碑文、賜之嗣子云。

堀南湖、名正修、字身之、別號習齋、其學、廣搜博採、強記絕人、最精易理、嘗演蘇氏易說、著書數萬言、與景山同爲藝藩文學、而其在京師、時准三官豫樂藤公、數石對清間、禮遇甚優、其卒也、藤公賜親製碑銘、南湖夙好吟哦、暇日多遊五山諸刹、與僧徒相唱酬、嘗是之時、海內方宗唐及明詩、而南湖獨祖宋、最尙子瞻、故譽之者曰、一時無二、毀之者曰、詩無所解、要之南湖才識出群、如曰、一逕年年蘇四時日日花、梅每枝枝好、雪教樹樹妍、曲渚

して後學を獎掖す、是を以て從遊の士多く彬雅に嚮ふ、其詩結構整齊、亦一時の作家なり、某年京師に卒す、藝侯親ら碑文を製し、之れを嗣子に賜ふと云ふ。

堀南湖、名は正修、字は身之、別號は習齋、其學廣搜博採、強記人に絶す、最易理に精し、嘗て蘇氏の易說を演し、書數萬言を著す、景山と同じ藝藩の文學たり、而して其京師に在る時、准三官豫樂藤公、數召して清間に對す、禮遇甚優なり、其卒するや、藤公親製の碑銘を賜ふ、南湖夙に吟哦を好み、暇日多くは五山の諸刹に遊び、僧徒と相唱酬す、是の時に當りて、海内方に唐及び明の詩を宗とす、而して南湖獨宋を祖とし、最子瞻を尙ぶ、故に之れを譽むる者は曰、一時無二と、之れを毀る者は曰、詩は解する所なしと、之れを要するに南湖才識出群なり、一逕年々蘇四時日々の花、梅は枝々毎に好く、雪は樹々をして妍なら教む、曲渚舟草に横はり、深山鐘花を度ると曰ふが

舟横草、深山鐘度、花雖非、大雅中正之音乎、
 天竺奇逸、自有妙處、且古曰、寧爲雞口、莫爲
 牛後、如其言、則南湖亦藝苑、夜郎王矣哉、長
 子名某、長於余數歲、少時有才子稱、已沒、今
 嗣職者、爲南湖之孫。

僧百拙、卓錫泉溪、爲寶藏寺、居士、能詩、善書、
 與南湖盟、盟法契、往來唱和、余嘗論、元和以
 後、釋門之詩、以百拙對萬菴、人無信者、蓋其
 無信者、以詩體玄黃相判也、如其資才、二僧
 斤兩大抵相稱、無有輕重、但其志尙相反、軌
 轍異、耳、蓋萬菴欲莫禪、善詩、百拙欲莫
 以詩害禪、故萬菴詩、必詩人之語、百拙詩
 詩必道人之語、是以萬菴詩高、雄麗、百拙
 詩深艱枯勁、竝是似相有意、非其本相也、有

如き、大雅中正の音に非ずと雖、天竺奇逸、自ら妙處あり、
 且古に曰ふ、寧雞口と爲るも、牛後と爲る莫れと其の言
 の如くんば、則南湖も亦藝苑の夜郎王なるかな、長子名
 は其、余より長すること數歲、少時才子の稱あり、已に沒
 す、今職を嗣ぐ者は、南湖の孫たり。

僧百拙、泉溪に卓錫し、寶藏寺の開士たり、詩を能くし、書
 を善くす、南湖と詩盟法契、往來唱和す、余嘗て元和以後
 の釋門の詩を論じ、百拙を以て萬菴に對す、人信する者
 なし、蓋其信する者なきは、詩體玄黃相判るゝを以てな
 り、其資才の如きは、二僧の斤兩大抵相稱ふ、輕重あるこ
 となし、但其志尙相反し、軌轍途を異にするのみ、蓋萬菴
 は禪を以て詩を害する莫らんと欲し、百拙は詩を以て禪
 を害する莫らんと欲す、故に萬菴は詩々詩人の語を必
 し、百拙は詩々道人の語を必ず、是を以て萬菴の詩は高
 華雄麗、百拙の詩は深艱枯勁、竝に是れ似相有意、其本相
 に非るなり、時ありて其無意に出づる者は、萬菴未だ必

時出于其無意者、葛菴未必無道人之語、百拙問、有詩人之語、百拙嘗作春雨書懷七絕七首、其一日、梅花落盡李花開、禊事將來細雨來、半幅疎簾人寂寞、前村野水洗蒼苔、又、湖上採蓮歌曰、西湖十里玻璃綠、隔岸仄聞採蓮曲、蕙帶茜裙風自香、荷花如錦人如玉、荷柄斷時須斷腸、藕絲織織知難續、晝棹歸去歌聲遙、夕陽波上湖山綺。

僧西巖、住持南禪天授菴、博覽宏識、禪餘好詩、其名重于叢林、亦能與一時文士往來唱酬、溫粹近人、而僧規亦肅、世人欽其學德。享保中坊間所刻八居題詠集中、有伊藤祐之服部寬齋、梅園正珉、五井純禎、今西春芳、和作、祐之字順卿、號莘野、稱齋宮、寬齋稱藤

しも道人の詩なくんばあらず、百拙問詩人の語あり、百拙嘗て春雨書懷の七絶七首を作る其一に曰、梅花落ち盡して李花開く、禊事將に來らんとして細雨來る、半幅の疎簾人寂寞、前村の野水蒼苔を洗ふと、又湖山採蓮の歌に曰、西湖十里玻璃綠、岸を隔て、仄に聞く採蓮の曲、蕙帶茜裙風自ら香ばし、荷花錦の如く人玉の如し、荷柄斷ゆる時須く腸を斷つべし、藕絲織々續ぎ難きを知る晝棹歸り去りて歌聲遙に、夕陽波上湖山綺なりと。

僧西巖、南禪の天授菴に住持す、博覽宏識、禪餘詩を好む、其名、叢林に重し、亦能く一時の文士と往來唱酬す、溫粹人に近づく、而して僧規も亦肅なり、世人其學德を欽す。

享保中坊間刻する所の八居題詠集中に、伊藤祐之、服部寬齋、梅園正珉、五井純禎、今西春芳の和作あり、祐之字は順卿、莘野と號し、齋宮と稱す、寬齋は藤九郎と稱す、其名字を失す、正珉字は某、文石と號す、純禎字は惠迪、蘭洲と

九郎、失其名字、正珉字某、號文石、純禎字惠迪、號蘭洲、春芳字陽甫、號白野、稱正立、又有橘洲先生、桃溪先生、余不詳其人、其詩雖不能無少妍媸、要亦娣姒耳。

入江兼通、字子徹、號若水、攝州富田邑人、釀酒爲業、家累千金、爲人不羈、少時好遊、狹邪、資產蕩盡、於是憤激讀書、學詩、後著山人服、携詩囊遊放諸州、到處聞有聞人、則必以詩爲贊、造詣會晤、是以江山人詩名、顯著四方、最後結廬京師西山、稱樸谷山人、日與天龍寺僧徒往來唱和、其詩輯爲二卷、名西山樵唱、序者四人、徂徠、服子遷、富春、叟、韓人、申維翰、竝論其詩爲晚唐、以余觀之、其詩頗肖宋陸放翁、但剪裁欠工、容易下筆、故動失諸倉

號、春芳字は陽甫、白野と號し、正立と稱す、又橘洲先生、桃溪先生あり、余其人を詳にせず、其詩少しく妍媸なき能はずと雖、要するに亦娣姒のみ。

入江兼通、字は子徹、若水と號す、攝州富田邑トノタの人、釀酒を業と爲す、家に千金を累ぬ、人と爲り不羈、少時好みて狹邪に遊び、資産蕩盡す、是に於て憤激して書を讀み詩を學ぶ、後、山人の服を著け、詩囊を携へ、諸州に遊放す、到處聞人あるを聞かば、則必詩を以て贊と爲し、造詣會晤す、是を以て江山人の詩名四方に顯著す、最後に廬を京師の西山に結び、樸谷山人と稱す、日に天龍寺の僧徒と、往來唱和す、其詩輯して二卷と爲す、西山樵唱と名く、序する者四人、徂徠、服子遷、富春、叟、韓人、申維翰、竝に其詩を論じて晚唐と爲す、余を以て之れを觀るに、其詩頗宋の陸放翁に肖たり、但、剪裁工を欠き、容易に筆を下す、故に動もすれば諧を塵率に失す、惜む可きのみ、然れども詩

率可_レ惜已_レ然詩詩自肺腑出_レ句句流動較諸
 近時諸人藉口盛唐勦竊嘉靖七子糟粕訂
 餽陳腐者反有可_レ觀五言題水竹園曰幽居
 宜懶性水竹伴閑吟洗硯釣魚詩題詩棲鳳
 林清流聲漱玉明月影篩金唯見七賢侶過
 橋日訪詩又春日訪詩仙堂曰草堂依巖麓
 花竹足風烟梁引雙雙燕壁描六六仙書殘
 多蝕字琴古自無絃欲弔徵君墓捫蘿陟翠
 巔七言西山卜居曰城西十里遊塵緣卜築
 溪邊茅數椽門外誰曾栽翠柳竹間本自引
 清泉群峯競秀速崖寺一水中分入野田日
 日行吟詩是業烟霞痼疾未全痊

瀨尾維賢字俊夫號用拙齋京師書林少時
 從仁齋學後與若水歡遂以詩稱其詩追步

々肺腑より出て、句句流動す、諸を近時の諸人口を盛唐
 に藉り、嘉靖七子の糟粕を勦竊し、訂餽陳腐なる者に較
 ぶれば、反て觀る可き有り、五言には、水竹園に題して曰、
 「幽居懶性に宜し、水竹閑吟に伴ふ、硯を洗ふ、釣魚の淵、詩
 を題す、棲鳳の林、清流聲玉に漱ぎ、明月影金を篩ふ、唯見
 る七賢の侶、橋を過ぎて日に訪尋するを」と、又春日詩仙
 堂を訪ふに曰、「草堂巖麓に依り、花竹風烟足る、梁には雙
 々の燕を引き、壁には六々の仙を描く、書殘して蝕字多
 く、琴古りて自ら無絃、徵君の墓を弔はんと欲し、蘿を捫
 して翠巔に陟ると、七言には、西山に居を卜するに曰、「城
 四十里塵縁を避く、卜築溪邊茅數椽、門外誰か會て翠柳
 を栽う、竹間本自ら清泉を引く、群峯競ひ秀で、崖寺に
 連なり、一水中分して野田に入る、日々行吟詩は是れ業、
 烟霞の痼疾未だ全く痊えず」と。

瀨尾維賢、字は俊夫、用拙齋と號す、京師の書林なり、少時
 仁齋に從ひて學ぶ、後若水と歡す、遂に詩を以て稱せら
 る、其の詩若水を追歩し、而して更に淺率なり、江山人を

若水、而更淺率矣。訪江山人云、一路斷橋外、孤村杳靄中、柳垂前夜雨、花落暮春風、白屋經年漏、青山與昔同、浮生須痛飲、淺水月朦朧、先是林義端字九成者、頗事翰墨、其詩見千家詩、及八居題咏附錄、亦京師書林稱文會堂者。

鳥山碩夫、名輔賢、號芝軒、亦攝人、或云伏見人、余少年時、已聞江若水詩名、以爲攝之巨擘、未知有碩夫也、迄爲邸職、以吏事數往來浪華、一日訪葛子琴、見架上有芝軒吟稿、迺知碩夫之遺稿、携歸逆旅、讀之一宵、始歎其作家、其才大率與若水韻頡、細論之、步驟不及若水、而韻度勝之、咀嚼有餘味、上已七絕云、不向江邊泛羽觴、雨中閉戶興偏長、松

訪ふに云ふ、一路斷橋の外、孤村杳靄の中、柳は垂る前夜の雨、花は落つ暮春の風、白屋年を経て漏り、青山昔と同じ、浮生須らく痛飲すべし、淺水月朦朧と、是より先き林義端字は九成といふ者、頗翰墨を事とす、其詩千家詩及び八居題咏の附録に見ゆ、亦京師の書林、文會堂と稱する者なり。

鳥山碩夫、名は輔賢、芝軒と號す、亦攝人、或は云ふ、伏見の人と、余少年の時、已に江若水の詩名を聞き、以て攝の巨擘と爲す、未だ碩夫あるを知らず、邸職と爲るに迄り、吏事を以て數浪華に往來す、一日葛子琴を訪ふ、架上に芝軒吟稿あるを見る、迺、碩夫の遺稿なるを知り、携へて逆旅に歸り、之れを讀むこと一宵、始めて作家なるを歎す、其才大率若水と韻頡す、細に之れを論ずれば、步驟若水に及ばず、而して韻度之れに勝る、咀嚼して餘味あるを覺ゆ、上已の七絶に云ふ、江邊に向つて羽觴を泛べず、雨中戸を閉ぢて興偏に長し、松煤細に研る桃花の露、臨し得たり、蘭亭の字幾行と、又歸田の詩に云ふ、農耜を歸

煤細研桃花露、臨得蘭亭字幾行、又歸田詩云、諳得農耕、鬢著華、桑田數畝、卽生涯、荷鋤未減初年力、擬向東菑更藝麻。

鳥山輔門、字某、碩夫子也、名賢詩集載、少時作數首、淀河舟中云、舟行三五里、帆影受風斜、綠漲鴨頭浪、白分燕尾沙、山光籠野色、蓼葉雜蘆花、落日孤城外、炊煙和暮靄、體裁明媚、可稱合作、如論其才局、似勝乃翁、特怪爾後、竊乎無聞、苗而不秀、歟、韞櫝而不出、歟、今浪華有鳥山雛岳者、蓋別家云。

大井守靜、字篤甫、號蟻亭、亦攝人家世、業買篤甫少志學、博綜群籍、最好藏書、凡奇書珍篇、必捐重賞、典之、殆致數千卷、後來京師講說、所著有蟻亭撫言、詩集手所選定、名覆案

んじ得て鬢華を著く、桑田數畝卽ち生涯、鋤を荷ふて未だ減せず初年の力、東菑に向つて更に麻を藝ふんと擬すと。

鳥山輔門、字は某、碩夫の子なり、名賢詩集に少時の作數首を載す、淀河舟中に云ふ、舟行三五里、帆影風を受けて斜なり、綠は漲る鴨頭の浪、白は分る燕尾の沙、山光野色を籠め、蓼葉蘆花に雜る、落日孤城外、炊煙暮靄に和すと體裁明媚、合作と稱す可し、如し其の才局を論ぜば、乃翁に勝るに似たり、特に怪む、爾後家として聞ゆるなきを、苗にして秀でざるか、韞櫝にして出さざるか、今浪華に鳥山雛岳といふ者あり、蓋別家と云ふ。

大井守靜、字は篤甫、蟻亭と號す、亦攝人なり、家世賈を業とす、篤甫少にして學に志し、群籍に博綜す、最藏書を好む、凡奇書珍篇、必重賞を捐て之れを典す、殆んど數千卷に致る、後、京師に來りて講說す、著す所蟻亭撫言あり、詩集は手づから選定する所、覆案と名づく、時風を襲

續、不襲時風、自爲一家、送春絕句云、煙林布
 綠、葛原東、遲日芳菲不負公、春去春神呼不
 返、烏紗巾上落花風、蕭散有趣、但集中數、用
 奇字僻語、如柳巷畫彈、渾不似、杏村夕酌、醉
 如泥、又有以護花時對共惜春、殊遠風雅、蓋
 渾不似、樂器名、醉如泥、杯名、護花時、共惜春、
 竝禽名。

富春叟、或曰桐江山人、享保中、住攝之池田
 邑、爾時海內方嚮物氏之學、而徂徠及門人、
 褒稱春叟、詩筒往復、歲時不斷、是以富山人
 詩名、震乎京攝之間、邑中子弟、爭從春叟遊、
 好事之徒、每歲首、輯春叟及社中詩、爲小冊
 子、名吳江水韻、刊行四方、邑人檜垣宗澤者、
 嘗受學、義兄青郊先生、以故年年寄示、其詩

はず、自ら一家を爲す、春を送る絶句に云ふ、煙林緑を布
 く、葛原の東、遲日芳菲公に負かず、春去りて春神呼べど
 も返へらず、烏紗巾上落花の風」と、蕭散にして趣あり、但
 集中數、奇字僻語を用ふ、柳巷畫彈、渾不似、杏村夕に酌
 む、醉如泥の如き、又護花時を以て共惜春に對するあり、
 殊に風雅に遠かる、蓋、渾不似は樂器の名、醉如泥は杯の
 名、護花時、共惜春は竝に禽名なり。

富春叟、或は、桐江山人と曰ふ、享保中、攝の池田邑に住す、
 爾時海内方に物氏の學に嚮ふ、而して徂徠及び門人、春
 叟を褒稱し、詩筒往復、歲時斷えず、是を以て富山人の詩
 名、京攝の間に震ふ、邑中の子弟、争て春叟に従ひて遊ぶ、
 好事の徒、歲首毎に、春叟及び社中の詩を輯め、小冊子と
 爲し、吳江水韻と名け、四方に刊行す、邑人檜垣宗澤とい
 ふ者、嘗て學を義兄青郊先生に受く、故を以て年々寄示
 す、其詩陳去非を學ぶ者に似たり、或は曰、春叟は奥州の
 人、嘗て儒業を以て、柳澤侯に仕ふ、徂徠集中に田省吾と

似學陳去非者、或曰、春叟、奥州人、嘗以儒業仕柳澤侯、徂徠集中稱田省吾者。

森億、字昌齡、弱齡翽翽、藝苑大篇巨什、信手揮成、世人往往以才子稱之、是時京師有郭西翁者、以相術稱、昌齡善病、乃從西翁相、翁曰、君實奇才、惜乎無壽、昌齡自是縱意遊蕩、操觚亦廢、不數年果死、余謂昌齡檢束修業、尙或保無他、卽不幸短折、名聲益馨、余今錄之、以戒少年才者云。

安田超、字文達、本姓鳥井小路、醫安田立陸、撫而爲子、年甫十歲、受學義兄青郊先生、才敏、研學爲人、白皙眉目如畫、以詩挑諸文士、詞鋒穎甚、後以奔走于刀圭故、學業遂廢、才亦落矣。

稱する者なりと。

森億、字は昌齡、弱齡にして、藝苑に翽翽す、大篇巨什、手に信せて揮成す、世人往々才子を以て之れを稱す、是の時京師に郭西翁といふ者あり、相術を以て稱せらる、昌齡善く病む、乃西翁に従ひて相す、翁曰、君實に奇才、惜らくは壽なきことを、昌齡是れより意を縱にして遊蕩し、操觚も亦廢す、數年ならず果して死せり、余謂ふ昌齡檢束して業を修むれば、尙くは或は他なきを保せん、卽ち不幸にして短折するも、名聲益馨はしからん、余今之れを録して、以て少年の才ある者を戒むと云ふ。

安田超、字は文達、本姓は鳥井小路、醫安田立陸、撫して子と爲す、年甫めて十歲、學を義兄青郊先生に受く、才敏、學を研す、人と爲り白皙眉目畫くが如し、詩を以て諸文士に挑む、詞鋒銳甚なり、後ち刀圭に奔走する故を以て、學業遂に廢す、才も亦落つ。

僧惠實號雪鼎、又號玉幹、住圓德寺、寺在宣風坊、隸于本願寺、與余相識最熟、雪鼎、天資清雅、好學能詩、兼學繪事、多奇、古今載籍、又愛古畫、古法帖、及文房古銅器、竭資典之、又性好山水、聞有流峙之奇、雖險遠、靡弗造焉、嘗以本願寺主命、如土佐州、檢校寺務、迄歸齋、一木箱、甚重、封緘亦密、人疑以爲寶貨、後開箱、則海濱沙石耳、又嘗赴美濃、遊養老瀑布、傍多紫青石、意謂作硯、則佳、馱數片、而歸、頗費錢鏹、既而石質過堅、不適硯材、乃置之庭際、愛翫竟日、其雅尙大率此類也、惜壽不得五十、詩亦清雅類其人云。

宇士新、名鼎、京都人、家世爲子錢家、以賈貨寵於衆諸侯、士新耿介、不喜商賈業、與弟子

僧惠實、雪鼎と號す、又玉幹と號す、圓德寺に住す、寺は宣風坊に在り、本願寺に隸す、余と相識る、最熟す、雪鼎、天資清雅、學を好み、詩を能くす、兼て繪事を學ぶ、多く古今の載籍を畜ふ、又古畫、古法帖及び文房の古銅器を愛し、資を竭して之れを典す、又性山水を好み、流峙の奇あるを聞かば、險遠と雖、造らざる靡し、嘗て本願寺主の命を以て、土佐州に如き、寺務を檢校す、歸に迄んで一木箱を齎す、甚重し、封緘も亦密なり、人疑ひて以て寶貨と爲す、後箱を開けば、則海濱の沙石のみ、又嘗て美濃に赴き、養老瀑布に遊ぶ、傍に紫青石多し、意謂ふ硯と作せば、則佳しと、數片を馱して歸り、頗錢鏹を費やす、既にして石質堅きに過ぎ、硯材に適せず、乃之れを庭際に置き、愛翫日を竟ふ、其雅尙大率此の類なり、惜らくは壽五十を得ず、詩も亦清雅、其人に類すと云ふ。

宇士新、名は鼎、京師の人、家世、子錢家たり、賈貨を以て衆諸侯に寵せらる、士新耿介、商賈の業を喜ばず、弟子朗と

朗、辟族別處、不畜妻妾、日夜閉戶勤學、先是物徂徠、唱古文辭於東都、士新說其說、而多病不能東遊、乃遣弟子朗從學焉、京師講徂徠之學、自士新始、後來意見漸異、事事反戈、徂徠、士新著作頗饒、其文集名明霞遺稿、其詩、紀律精詳、一字不苟、下、遂能以此建旗鼓於一方、蓋亦詞壇雄、加之緊苦力學、志節凜凜、聞其風者、庶可小興起、惜乎資性褊窄、規模甚隘、其詩亦得之苦思力索、是以規度合、而變化不足、聲調勻、而神氣離、弟子朗、名鑒、爲人和厚、爲衆所愛慕、先士新而沒、詩集行於世、護國錄稿、載送北子彝侍醫膳所詩、頗合作矣。

陶山昊、字廷美、稱尙善、土佐州人、東涯門人、

族を辟けて別處す、妻妾を畜へず、日夜戸を閉ぢて勤學す、是れより先き、物徂徠、古文辭を東都に唱ふ、士新其說を説ぶ、而れども多病にして東遊する能はず、乃弟子朗を遣して從學せしむ、京師徂徠の學を講ずるは、士新より始まる、後來意見漸く異り、事々徂徠に反戈す、士新著作頗饒し、其文集明霞遺稿と名づく、其詩紀律精詳、一字苟も下さず、遂に能く此れを以て旗鼓を一方に建つ、蓋亦詞壇の雄なり、之れに加ふるに、緊苦力學、志節凜々、其風を聞く者、庶くは小く興起す可し、惜らくは資性褊窄、規模甚隘し、其詩も亦之れを苦思力索に得を以て、規度合して變化足らず、聲調勻して神氣離る、弟子朗、名は鑒、人と爲り、和厚、衆に愛慕せらる、士新に先ちて沒す、詩集世に行はる、護國錄稿に、北子彝が膳所に侍醫たるを送る詩を載す、頗合作なり。

陶山昊、字は廷美、尙善と稱す、土佐州の人、東涯の門人、其學稗官小説を兼該す、又夏晉に通ず、譬と爲り、儒と爲る、

其學兼該稗官小說、又通夏音、爲醫爲儒、竝以不遇終、遺文亦散亡、詩素非本色。

岡千里、名白駒、播磨人、初在攝之西宮邑、以醫爲業、一旦投刀圭、而來于京師、專以儒行、是時京師已有悅傳奇小說者、千里兼唱、其說都下羣然傳之、其名躁于一時、千里於是、不復作詩、人或乞詩、則辭以不能、於是人人謂千里文而不詩、其實非也、余覽千里在播攝時作、亦自當行、所以云爾者有說也、千里急于名、又好勝、人是時東都有服子遷、赤石有梁景鸞、南紀有祇伯玉、詩名聞于海內、千里自量難與、此數子竝驅、而世方勤復古業、左國史漢、人人誦之、託其訓詁、亦足不朽、故廢詩、專意作諸鑑、以網羅其名、既而恐後人

竝に不遇を以て終る、遺文も亦散じず、詩は素とより本色に非ず。

岡千里、名は白駒、播磨の人、初め攝の西宮邑に在り、醫を以て業と爲す、一旦刀圭を投じて、而して京師に來り、專儒を以て行ふ、是の時京師已に傳奇小説を悦ぶ者あり、千里兼て其説を唱ふ、都下羣然として之れを傳ふ、其名一時に躁し、千里是に於て復詩を作らず、人或は詩を乞へば則辭するに不能を以てす、是に於て人々謂ふ、千里は文にして詩ならずと、其實は非なり、余千里の播攝に在りし時の作を覽るに、亦自ら當行なり、爾か云ふ所以の者は説あるなり、千里名に急に、又人に勝つを好む、是の時東都に服子遷あり、赤石に梁景鸞あり、南紀に祇伯玉あり、詩名海内に聞ゆ、千里自ら量るに、此の數子と竝び驅せ難し、而して世方に復古の業を勤む、左國史漢、人々之れを誦す、其訓詁に託するも、亦不朽に足る、故に詩を廢し、專意諸鑑を作り、以て其名を網羅す、既にして後人文士を以て己を觀るを恐る、則詩書論孟を傳註して、以て其名を崇くす、然も己に名に急に、又人に勝つを好む、故に其論説する所、引證精ならず、且臆見を以て疑義を

以文士觀己、則傳註詩書論孟、以崇其名、然已急於名、又好勝人、故其所論說、引證不精、且以隱見、勇斷疑義、或勦襲他人說、以爲其著作、雖取快於一時、難免識者指摘、余爲千里深惜之云。

篠士明、名亮、後更姓武、名欽、字聖謨、稱梅龍道人、與余相識最舊、初執謁東涯、又從遊士新、後以王門賓客、給仕于妙法院、爲人俊爽、而有氣節、博覽強志、又能談論、瀾日徹夜不倦、性多病、數至危篤、然未嘗廢業、明和丙戌年遂卒、其詩尙縱橫、累篇疊章、硯硯滿紙、要其才長于校閱、而著述非當行也。

樋口卜齋、與余親厚、仕今河越侯爲京邸留守、方正廉謹、近時孳孳、明和乙酉年病卒、其

勇斷し、或は他人の説を勦襲し、以て其の著作と爲す、快を一時に取ると雖、識者の指摘を免れ難し、余千里の爲めに深く之れを惜むと云ふ。

篠士明、名は亮、後、姓を武、名を欽、字を聖謨と更む、梅龍道人と稱す、余と相識る最舊し、初謁を東涯に執る、又士新に従遊す、後王門の賓客を以て、妙法院に給仕す、人と爲り俊爽にして氣節あり、博覽強志、又能く談論す、日を瀾り夜を徹して倦まず、性多病、數危篤に至る、然も未だ嘗て業を廢せず、明和丙戌の年遂に卒す、其詩縱橫を尙ぶ、累篇疊章、硯硯に滿つ、要するに其才校閱に長ず、而して著述は當行に非ざるなり。

樋口卜齋、余と親厚なり、今の河越侯に仕へ、京師の留守と爲る、方正廉謹、近時孳孳なり、明和乙酉の年病んで卒す、其邸職に在る三十五年、人に對して唯未だ學ばずと

在邸職三十五年、對人唯曰、未學、雖有著、作未嘗、跡入、嘗題楊太真曰、當時君寵超三千、驚破霓裳花落天、縹渺仙山何處是、人間空自見、金鋼殊有婉致、卜齋少時學、詩鈴木堯弼、瑤弼字俊良、嘗仕某藩、後辭祿放浪京畿、卜齋爲余誦其詩若干首、頗有巧思、而世絕不知、由是思之、遺珠棄璧、何啻千百哉。

僧翠巖、住三秀院、院在天龍寺中西南之隅、嵐山近俯軒窓、最爲勝境、翠巖以詩以書、其餘雅尙韻事、都下膏粱子弟、嘖嘖稱之、余嘗一過其房、翠巖出生平詩稿示余、小楷端正、籤帙華整、明和戊子某月日、厨下遺火、房舍悉燬、爾時倉皇、庫藏不閉、圖書諸器玩、都歸劫灰、翠巖亦尋歸寂、由是觀之、詩文存亡、亦

曰ふ、著作ありと雖、未だ嘗て人に跡さず、嘗て楊太真に題して曰、當時君寵三千に超え、驚破す霓裳花落の天、縹渺仙山何れの處か是なる、人間空く自ら金鋼を見る」と、殊に婉致あり、卜齋少時詩を鈴木堯弼に學ぶ、堯弼字は俊良、嘗て某藩に仕ふ、後祿を辭し京畿に放浪す、卜齋余か爲に其詩若干首を誦す、頗巧思あり、而して世絶えて知らず、是に由て之れを思ふに、遺珠棄璧、何ぞ啻千百のみならんや。

僧翠巖、三秀院に住す、院は天龍寺中の西南の隅に在り、嵐山近く軒窓に俯し、最勝境と爲す、翠巖詩を以てし書を以てし、其餘雅尙韻事、都下膏粱子弟、嘖々之を稱す、余嘗一たび其房に過ぎる、翠巖生平の詩稿を出だし、余に示さる、小楷端正、籤帙華整なり、明和戊子某月日、厨下火を遺し、房舍悉く燬く、爾時倉皇、庫藏閉ぢず、圖書諸器玩、都て劫灰に歸す、翠巖も亦尋で歸寂す、是れに由りて之れを觀れば、詩文の存亡亦自ら數あり、必しも深く長吉が故人を罪せざるなり。

自有數、不必深罪長吉故人也。

服伯和、名天遊、號嘯翁、又稱蘇門居士、京師人家業織造、伯和以多病故、不服其業、以講說授徒、其爲學也、專務博洽、兼窺佛典、性好論駁、撰著頗多、年垂半百、以疾之故、褊急日甚、遂以此沒焉、門人永俊平、攜其遺稿、就余請檢按、其詩雖欠精細工夫、氣格竝合、五言登愛宕山云、平安西北鎮、石磴幾千盤、峰插層霄起、雨分衆壑看、鶴歸華表古、僧住白雲寒、時有仙駢度、依稀聽玉響、七言宿山寺云、微吟曳杖此相尋、纔到上方落照深、倚檻寒雲歸洞口、透階暗水咽苔陰、山房寧有人間夢、溪月偏開物外心、只爲社中容酒客、淵明一夜在東林。

服伯和、名は天遊、嘯翁と號す、又蘇門居士と稱す、京師の人家織造を業とし、伯和多病を以ての故に其業に服せず、講説を以て徒に授く、其學を爲すや、專博洽を務む、兼て佛典を窺ふ、性論駁を好む、撰著頗多し、年半百に垂として、病の故を以て褊急日に甚し、遂に此れを以て没す、門人永俊平其遺稿を攜へ、余に就て檢按を請ふ、其詩精細の工夫を欠くと雖、氣格竝に合す、五言愛宕山に登るに云ふ、平安西北の鎮、石磴幾千盤、峰は層霄を挿で起り、雨は衆壑を分つて看る、鶴歸りて華表古り、僧住で白雲寒し、時に仙駢の度るあり、依稀として玉響を聽ぐと、七言、山寺に宿するに云ふ、微吟杖を曳て此に相尋ぬ、纔に上方に到れば落照深し、檻に倚れば寒雲洞口に歸り、階を透る暗水苔陰に咽ぶ、山房寧ぞ人間の夢有らん、溪月偏に開なり物外の心、只、社中に酒客を容るゝが爲に、淵明一夜東林に在りと。

日本詩史卷之三終

日本詩史卷之四

251

關東古稱用武之地、猛將勇士、史不絕書、而文雅之士、不尠概見、迄于神祖營、建東都、置弘文院、設學士職、文教與武德並隆、終成人文淵藪、羅山林先生、際會風雲、首唱斯文於東土、芝蘭奕葉、長爲海內儒宗、無俟曹邱生也。

木下錦里、名貞幹、字直夫、又稱順菴、京師人、昌三門人、學成出仕、加賀侯、爲其文學、憲廟

平安 江邨綬君錫著

弟 清 絢君錦

同按

男 悰 秉孔均

關東古武を用ふるの地と稱す、猛將勇士、史書を絶たず、而して文雅の士、少しも概見せず、神祖、東都を營建するに迄り、弘文院を置き、學士の職を設く、文教、武徳と並びに隆んに、終に人文の淵藪と成る、羅山林先生、風雲に際會し、首として斯文を東土に唱ふ、芝蘭奕葉、長く海内の儒宗と爲る、曹邱生を俟つことなし。

木下錦里、名は貞幹、字は直夫、又順菴と稱す、京師の人、昌三の門人、學成りて、出でて加賀侯に仕へ、其文學と爲る、憲廟其名を聞き、徵して侍講と爲す、是に於て從學の士

聞其名、徵爲侍講、於是從學之士日盛、才俊多出其門、卒、私諡靖恭、名賢詩集、載靖恭詩三十餘首、其中題楠子墓云、一心存北闕、三世護南朝、又詠百日紅云、老樹千年綠、名花百日紅、二聯可謂巧奪也、嗣子寅亮、名汝弼、號菊潭、寅亮子、寅道、寅考詩、竝見熙朝文苑、室滄浪、名直清、字師禮、一字汝玉、別號鳩巢、東都人、幼而穎悟、西學京師、師事木靖恭、衆推爲木門高弟、初仕賀藩、文廟時、徵擢爲東都學職、嘗著大學新疏、義人錄、駿臺雜話等書、莫非提起經義、維持名教者也、余嘗謂經儒不習文藝、文士或遺經業、能兼二者、唯東滄浪、滄浪二儒而已、其訓詁異同不必論也、滄浪詩、五言古體、學陶而未得其自然、七言古

日に盛んに、才俊多く其門に出づ、卒して、私に靖恭と諡す、名賢詩集に、靖恭の詩三十餘首を載す、其中楠子の墓に題して云ふ、一心北闕に存し、三世南朝を護す、と、又百日紅を詠じて云ふ、老樹千年綠に、名花百日紅なり、と、二聯巧奪と謂ふ可きなり、嗣子寅亮、名は汝弼、菊潭と號す、寅亮の子、寅道、寅考の詩、竝に熙朝文苑に見ゆ。

室滄浪、名は直清、字は師禮、一の字は汝玉、別號は鳩巢、東都の人なり、幼にして穎悟、西、京師に學び、木靖恭に師事す、衆推して木門の高弟と爲す、初め賀藩に仕ふ、文廟の時、徵擢せられて、東都の學職と爲る、嘗て大學新疏、義人錄、駿臺雜話等の書を著す、經義を提起し、名教を維持するに非ざる者莫し、余嘗て謂ふ、經儒は文藝に習はず、文士は或は經業を遺す、能く二者を兼ぬるは、唯、東滄、滄浪の二儒のみ、其訓詁の異同は必しも論ぜざるなり、滄浪の詩、五言古體、陶を學んで而して未だ其自然を得ず、七言古風、五言近體、少陵を師法とし、尙垣牆を隔つ、七言近

風、五言近體、師法少陵、尙隔垣牆、七言近體、祖襲盛唐諸家、而往往出、明人逕蹊、若夫五言排律、學力與才氣相駕、豪健騰踔、最爲當行、今摘七言雄拔者數聯、關中豪傑推王猛、江左風流起謝安、天上雙懸新月、人間相看舊衣冠、天連滄海長雲絕、月滿大江灝氣浮、鞏下衣冠尊五品、日邊花萼共三春、蘭省春傳紅葉賦、鳳池波動紫霞袍、薦賦何人逢狗監、求才幾處出龍媒。

新井白石、名君美、字在中、東都人、亦木門高弟也、文廟潛邸時、眷注已渥、繼統之後、遂以遷喬、賜爵五品、號筑後守、白石、才兼經濟、數參大議、其著撰、往往國家典刑云、若夫詩章、則有白石詩草、白石餘稿、余按、白石、天受敏

體盛唐諸家を祖襲し、而して往々明人の逕蹊に出づ、若し夫れ五言排律は、學力と才氣と相駕し、豪健騰踔、最當行と爲す、今七言の雄拔なる者數聯を摘す、關中の豪傑王猛を推し、江左の風流謝安を起す、天上雙び懸る新月、人間相看る舊衣冠、天、滄海に連なりて長雲絶え、月、大江に滿ちて灝氣浮ぶ、鞏下の衣冠五品を尊び、日邊の花萼三春を共にす、蘭省春は傳ふ紅葉の賦、鳳池波は動く紫霞の袍、賦を薦めて何人か狗監に逢ふ、才を求めて幾處か龍媒を出だすと。

新井白石、名は君美、字は在中、東都の人、亦木門の高弟なり、文廟潛邸の時、眷注已に渥し、繼統の後、遂に以て遷喬す、爵五品を賜ひ、筑後守と號す、白石、才經濟を兼ね、數大議に參す、其著撰、往々國家の典刑なりと云ふ、若し夫れ詩章は、則白石詩草、白石餘稿あり、余按するに、白石、天受敏妙、藝苑に獨歩す、謂はゆる銷心繡腸、咳唾も珠を成し、

妙、獨步藝苑、所謂錦心繡腸、咳唾成珠、嚙語諧韻者、案諸異邦古詩人中、未可多得者、而今人貴耳賤目、不甚信、余言、兩芳洲所著橋應茶話曰、韓人索白石詩草者、陸續不已、可見異邦人猶且玉之、白石嘗和清人魏惟度八居七律八首、以溪西雞齊啼爲韻者、請滄浪嗣響、遂傳播京師、京師文士、倣而和者數十人、坊間梓而行焉、白石覽之、前作有與諸人和詩相類者、因再作八首、語無牽強、押韻益穩、又冬日過某家、主人請詩、白石求題、主人書容奇二字示之、白石解其意、輒作七律一首、蓋容奇者雪之訓讀、主人書之、以試白石、白石已解其意、故句句歡我邦雪、一座服其敏警、詩云、曾下瓊銚初試雪、紛紛五節舞

語も韻に諧ふ、諸を異邦の古詩人の中に索むるも未だ多く得可からざる者なり、而して今人耳を貴び目を賤み、甚余が言を信ぜず、兩芳洲の著す所の橋應茶話に曰、韓人、白石詩草を索むる者、陸續として已まずと、見る可し、異邦の人猶且之れを玉とするを、白石嘗て清人魏惟度の八居の七律八首を和す、溪西雞齊啼を以て韻と爲す者、滄浪に請ふて響を嗣がしむ、遂に京師に傳播す、京師の文士、倣ふて和する者數十人、坊間梓して行ふ、白石之れを覽るに、前作、諸人の和詩と相類する者あり、因て再び八首を作る、語牽強なく、押韻益穩なり、又冬日某家に過ぎる、主人詩を請ふ、白石題を求む、主人容奇の二字を書して之れに示す、白石其意を解し、輒七律一首を作る、蓋容奇は雪の訓讀、主人之れを書して、以て白石を試む、白石已に其意を解す、故に句々我邦の雪を徵す、一座其敏警に服す、詩に云ふ、曾て瓊銚を下して初めて雪を試む、紛々たる五節舞容閑なり、一痕の明月茅渚の里、幾片の落花滋賀の山、劍を提げて、騰臣虎跡を尋ね、簾を捲き

容閑、一痕明月茅渚里、幾片落花滋賀山、提劍騰臣尋虎跡、捲簾清氏對龍顏、盆梅剪盡能留客、濟得隆冬無限艱、此一時遊戲、雖不足論、全豹亦可窺、其天受之一斑、或問、余曰、子極稱白石詩、至白石、蔑以加乎、曰、非也、如天受、誠蔑以加矣、若夫揣摩、磨鍛、鍊、尙有可論者、要之天受之富、吐言成章、往往不遑、思釋、是以疵瑕亦復不鮮、白石送人之長安絕句、云、紅亭綠酒畫橋西、柳色青青送馬蹄、君到長安花自老、春山一路杜鵑啼、四句中、二句全用唐詩、夫剽竊詩律所戒、而鍊、丹成、金猶可言也、以鉛刀代鑊、將之何謂、草色青青送馬蹄、本臨岐妙語、草色送馬蹄、言春草承馬蹄、以柳代草、蹄字無着落、殊爲減價、此其

て清氏龍顔に對す、盆梅剪り盡して能く客を留む、濟ひ得たり隆冬限りなきの艱をと、此れ一時の遊戲、全豹を論ずるに足らずと雖、亦其天受の一斑を窺ふ可し、或人余に問ふて曰、子極めて白石を稱す、詩、白石に至りて以て加ふる蔑きか、曰、非なり、天受の如きは誠、に以て加ふる蔑し、若夫れ揣摩磨鍛鍊は、尙論ず可き者あり、之れを要するに天受の富、言を吐けば章を成し、往々思釋に遑あらず、是を以て疵瑕亦復鮮からず、白石人の長安に之くを送る絶句に云ふ、紅亭の綠酒畫橋の西、柳色青々馬蹄を送る、君長安に到らば花自ら老いん、春山一路杜鵑啼かんと、四句の中、二句全く唐詩を用ゆ、夫れ剽竊は詩律の戒むる所、而かも丹を鍊りて金と成さば猶言ふ可きなり、鉛刀を以て鑊に代ふ、將之れ何とか謂はん、草色青々馬蹄を送るは、本と臨岐の妙語、草色馬蹄を送るとは、春草馬蹄を承くるを言ふ、柳を以て草に代ふれば、蹄の字着落なし、殊に價を減すと爲す、此れ其一のみ、餘は準知す可し。

一耳、餘可準知。

祇園伯玉、名正卿、後更名瑜、號南海、仕紀藩、任職文學、伯玉髫年、受業木門、有夙慧之稱、一日宴集、人或唱曰、鳶飛魚躍活潑潑、令坐客爲對、伯玉以童子、在席末、應聲曰、光風霽月常惺惺、衆嘆其穎敏、元祿壬申、伯玉年十七、會春分日、自試其才、自午至子、賦得五言律詩一百首、人或疑其宿構、是歲秋分大會賓客、午漏初下、進請諸賓、各命詩題、對坐談笑、信筆揮霍、夜未半、百首完成、通計前後、凡二百首、藻繪爛漫、而無一句雷同者、滿座驚愕歎服焉、於是其名播揚遠邇、伯玉初在木門、與松楨卿同甲子、衆稱木門二妙、後來伯玉名價益重、世匹之梁蛻岩、余按停雲集、載

祇園伯玉、名は正卿、後に名を瑜と更む、南海と號す、紀藩に仕へ、職に文學に任ず、伯玉髫年、業を木門に受け、夙慧の稱あり、一日宴集に、人或は唱へて曰、鳶飛魚躍活潑々々と、坐客をして對を爲さしむ、伯玉童子を以て席末に在り、聲に應じて曰、光風霽月常惺々々と、衆其穎敏を嘆す、元祿壬申、伯玉年十七、春分の日に會す、自ら其才を試む、午より子に至り、五言律詩一百首を賦し得たり、人或は其宿構を疑ふ、是歲秋分大に賓客を會し、午漏初めて下るや、進んで諸賓に請ひ、各詩題を命ぜしめ、對坐談笑筆に信せて揮霍す、夜未だ半ならず、百首完成す、前後を通計して凡そ二百首、藻繪爛漫、而して一句の雷同する者なし、滿座驚愕歎服す、是に於て其名遠邇に播揚す、伯玉初め木門に在り、松楨卿と同甲子なり、衆、木門の二妙と稱す、後來伯玉の名價益重し、世之れを梁蛻岩に匹す、余按ずるに停雲集に伯玉の詩二十首を載す、詞采富麗、蓋少時の作、晚歲漸く鉛華を刷り、而して神氣融和す、殊に

伯玉詩三十首、詞采富麗、蓋少時作、晚歲漸
 刷鉛華、而神氣融和、殊可傳者、而伯玉墓木
 已拱、遺稿未出、余未審何故、近時學風輕薄、
 僅學作詩、則已災梓、所謂黃鐘毀棄、瓦釜雷
 鳴、亦憤憤爾、伯玉嗣子師援、余嘗一再應酬
 詩也、書也、竝似乃翁。

雨森芳洲、名東、字伯陽、京師人、其幼時習句
 讀之師、爲靖恭門人、以故芳洲年十七八、遂
 東執謁靖恭、靖恭甚稱其才、是時對馬侯將
 聘一書記、聞木門多才髦、就而求焉、靖恭因
 薦芳洲、遂爲對馬學職、余按徂徠嘗唱復古
 傲睨一時人士、特於芳洲、稱揚嘖嘖、殆不可
 解、何則、芳洲說經、崇信程朱、至老無變、而徂
 徠勸排程朱、芳洲、文宗韓歐、徂徠必曰、東漢

ふ可き者なり、而して伯玉の墓木已に拱して、遺稿未だ
 出でず、余未だ何の故なるを審にせず、近時學風輕薄、僅
 に詩を作るを學べば、則已に梓を災す、謂はゆる黃鐘毀
 棄せられ、瓦釜雷鳴するもの、亦憤々たるのみ、伯玉の嗣
 子師援、余嘗て一再應酬す詩や書や竝に乃翁に似たり。

雨森芳洲、名は東、字は伯陽、京師の人、其幼時句讀を習ふ
 の師は、靖恭の門人たり、故を以て芳洲年十七八、遂に東
 して謁を靖恭に執る、靖恭甚其才を稱す、是の時對馬侯、
 將さに一書記を聘せんとす、木門に才髦多きを聞き、就
 いて求む、靖恭因て芳洲を薦む、遂に對馬の學職と爲る、
 余按ずるに徂徠嘗て復古を唱へ、一時の人士を傲睨す、
 特に芳洲に於ては稱揚嘖々、殆ど解すべからず、何とな
 れば則芳洲の經を説く、程朱を崇信し、老に至りて變ず
 るなし、而して徂徠は勸て程朱を排す、芳洲は、文は韓歐
 を宗とし、徂徠は必東漢以上と曰ふ、芳洲明詩を好まず、

以上、芳洲不好明詩、橘臆茶話曰、吾案上所置詩集、以陶淵明爲首、李杜爲第二、韓白東坡爲三、與徠論詩、誠冰炭矣、余久疑之、近得其說、已有別論、橘臆茶話又曰、京師風俗、各土地神、祠祭之日、遠親故舊、互相延請、吾少年時、揚言曰、殊覺其煩也、柳滄洲在坐、正色曰、一年一次、團樂叙瀾、人情於是乎萃矣、何謂煩乎、吾爲之面頰、余謂滄洲誠長者之言、而芳洲稱之、且自戒、失言、亦長者矣哉、近時學風、輕薄、藝苑絕無此等人、可歎耳、芳洲長于文、而不長于詩、晚年常對人曰、吾無詩才、生平所作、無慮數百千首、而可詠人者、不過數十首也、長子乾、蚤沒、孫連、以謹嚴稱、亦已沒、次子贊治、出繼松浦氏、其子、小字文平、

橘臆茶話に曰、吾が案上に置く所の詩集、陶淵明を以て首と爲し、李杜を第二と爲し、韓白東坡を三と爲すと、徠が詩を論ずると、誠に冰炭なり、余久く之を疑ふ、近う其説を得たり、已に別論あるなり、橘臆茶話に又曰、京師の風俗、各土地神、祠祭の日、遠親故舊、互に相延請す、吾少年の時、揚言して曰、殊に其煩を覺ゆと、柳滄洲坐在在り、色を正して曰、一年一次、團樂叙を叙す、人情是に於てか萃まる、何んぞ煩と謂はんやと、吾之れが爲に面頰す、余謂ふ滄洲は誠に長者の言なり、而して芳洲之れを稱し、且つ自ら失言を戒む、亦長者なるかな、近時學風、輕薄、藝苑絶えて此等の人なし、歎ず可きのみ、芳洲文に長じて、詩に長ぜず、晚年常に人に對して曰、吾れ詩才なし、生平作る所、無慮數百千首、而して人に詠す可き者は、數十首に過ぎざるなり、長子乾、蚤く沒す、孫連、謹嚴を以て稱せらる、亦已に沒す、次子贊治、出で、松浦氏を繼ぐ、其子小字は文平、弱齡にして京師に來遊す、數、余が家に過ぎる、殊に才類を見る、今亦學職と爲ると云ふ。

弱齡來遊京攝、數過余家、殊見才穎、今亦爲學職云。

松浦禎卿、名儀、號霞沼、停雲集曰、禎卿播州人、年甫十三、對馬侯見以爲奇才、請靖恭授業、學成爲對州書記、橘臈茶話曰、禎卿十四歲時、置詩草於案上、南草壽取而覽之、吟誦不已、既而聞其自作、大驚曰、吾謂抄寫唐詩、對馬侯聞之、乃使其受業木門、併考二書、殊有可疑、十三四童子、何以自播州險海遠抵對州、被侯之眷稱、或從父兄、在京都、出入朱邸者、然而草壽長崎人、則亦胡以就其案上覽詩草、此必有其說、要之夙慧可知也、惜乎停雲集載其詩僅四首、餘絕無觀、禎卿沒而無子、以芳洲次子爲嗣云。

日本詩史卷之四

松浦禎卿、名は儀、霞沼と號す、停雲集に曰、禎卿は播州の人、年甫めて十三、對馬侯見て以て奇才と爲し、靖恭に請ひ業を授けしむ、學成りて對州の書記と爲る、橘臈茶話に曰、禎卿十四歳の時詩草を案上に置く、南草壽取りて之れを覽て、吟誦已ます、既にして其の自作なるを聞き、大に驚きて曰、吾れ唐詩を抄寫すと謂ふと、對馬侯之れを聞き、乃其れをして業を木門に受けしむと、二書を併せ考ふるに、殊に疑ふ可きあり、十三四の童子、何を以て播州より海を臨へて遠く對馬に抵り侯の眷稱を被むる、或は父兄に従ひ、東都に在り、朱邸に出入する者か、然り而して草壽は長崎の人なれば、則亦胡んぞ以て其案上に就いて詩草を覽ん、此れ必其説あらん、之れを要するに夙慧は知る可きなり、惜ひかな、停雲集に其詩を載する僅に四首、餘は絶えて観るなし、禎卿没して子なし、芳洲の次子を以て嗣と爲すと云ふ。

留健甫、名順泰、對州人、本姓阿比留氏、後更、
 姓西山、爲本藩學職、亦木門弟子、勤苦讀書、
 才思敏贍、元祿戊辰、年二十九、病將死、悉焚
 詩稿曰、吾輩詩文、何用遺爲、靖恭哀惜、爲製
 碑銘云、其詩如竹外無家群鳥下、松陰有寺
 一僧還、殊佳、橋聽茶話曰、對州平田茂、在朝
 鮮、有詩曰、江風送人語、隔岸有歸舟、金泰敬
 者、終身吟賞、平田茂、他無所考、因附載于此、
 南部思聰、名景衡、號南山、長崎人、本姓小野
 氏、少孤、爲南部草壽所子、畜因冒其姓、草壽
 不詳名字、草壽蓋其稱號、後來京師講說、自
 稱陸沈先生、天和中、爲富山侯文學、元祿戊
 辰、年卒、思聰嗣職、思聰初在長崎、學詩於閩
 人黃公溥、杭人謝叔且、後從義父、在越中、遂

留健甫名は順泰、對州の人、本姓は阿比留氏、後姓を西山
 と更む、本藩の學職と爲る、亦木門の弟子、勤苦して書を
 讀む、才思敏贍、元祿戊辰、年二十九、病んで將さに死せん
 とす、悉く詩稿を焚て曰、吾輩の詩文、何ぞ用て遺すを爲
 んと、靖恭哀惜し、爲に碑銘を製すと云ふ、其詩、竹外家無
 く群鳥下り、松陰寺有り一僧還るが如き、殊に佳なり、橋
 聽茶話に曰、對州の平田茂、朝鮮に在りて、詩あり曰、江風
 人語を送る、岸を隔て、歸舟ありと、金泰敬といふ者、終
 身吟賞すと、平田茂は、他に考ふる所なし、因て此に附載
 す。

南部思聰、名は景衡、南山と號す、長崎の人、本姓は小野氏、
 少にして孤なり、南部草壽に子として畜はる、因て其姓
 を冒す、草壽、名字を詳にせず、草壽とは蓋其稱號ならん、
 後、京師に來り講說す、自ら陸沈先生と稱す、天和中、富山
 侯の文學と爲る、元祿戊辰の年卒す、思聰職を嗣ぐ、思聰
 初め長崎に在りて、詩を閩人黃公溥、杭人謝叔且に學ぶ、
 後、義父に従ひて、越中に在り、遂に東都に遊學し、業を木

遊學東都、受業木門、停雲集曰、子聰爲人溫
 恭篤謹、精通經史、文才富贍、身既多病、自選
 詩文若干首、名曰喚起漫草、正徳壬辰卒、于
 越中、年五十五、又橋牒茶話曰、韓人吳南老、
 嘗覽子聰懷環翠園詩、雁歸塞北、長爲客、梅
 發江南、暗憶人句、極口稱贊云云、按、環翠園
 在越之富山、卽子聰所居、子聰在東都、懷之、
 作七律十首、其中佳句實多、聰容西嶺、多看
 雪、圃學東陵、半種瓜、生前不負十千酒、死後
 何須八百桑、細雨紅桃應委徑、輕烟綠竹定
 過牆、啣花鳥近書牕語、煮茗泉環竹塢過、欲
 見春山常洗竹、因憐夜雨亦栽蕉、思聰三子、
 長卽國華。

南部國華、名景春、稱權藏、思聰長子、聰慧絕

門に受く、停雲集に曰、子聰人と爲り、温恭篤謹、經史に精
 通し、天才富贍、身既に多病、自ら詩文若干首を選び、名け
 て喚起漫草と曰ふ、正徳壬辰、越中に卒す、年五十五、又橋
 牒茶話に曰、韓人吳南老嘗て子聰の環翠園を懐ふ詩に
 「雁歸りて塞北長く客と爲り、梅發きて江南暗に人を憶
 ふ」の句を覽て、口を極めて稱贊すと云云、按するに、環翠
 園は越の富山に在り、卽子聰が所居、子聰東都に在りて
 之れを懷ひ、七律十首を作る、其中佳句實に多し、聰は西
 嶺を容れて多く雪を看圃は東陵を學んで半は瓜を種
 う、「生前負かず十千の酒、死後何ぞ須ひん八百の桑」、「細
 雨紅桃應に徑に委するなるべし、輕烟綠竹定めて牆を過
 ぎん」、「花を啣む鳥は書牕に近きて語り、茗を煮る泉は竹
 塢を環りて過ぐ」、「春山を見んと欲して常に竹を洗し、夜
 雨を憐むに因て亦蕉を栽ゆ」と思聰三子あり、長は卽ち
 國華なり。

南部國華、名は景春、權藏と稱す、思聰の長子、聰慧絶倫、年

倫、年甫十三、從父赴東都、遊東叡山、作五言
 古風一百韻、爲世所稱、年十八喪父、哀毀過
 禮、奉母至孝、友愛二弟、行己以道、其爲學、博
 通經史、又慨然有大志、亡何喪母氏、次弟亦
 亡、國華不堪悲感、遂以享保丁酉四月二十
 一日病卒、年僅二十三、季弟亦夭、南氏絕祀、
 停雲集載國華除夜呈白石排律一百韻、氣
 象軒昂、珠璣璀璨、又妙見山寄題七律八首、
 亦復雋拔、使其天假之、以年紀、與蛻岩南海
 馳逐于藝苑、未知鹿死誰手也、天之忌才、其
 將謂何、且德者未必有才、而才子往往無行、
 國華有絕世才、而孝悌恭謹、可謂全人、二弟
 雖童髻、亦已稱雛弟、乃翁又篤恭、著稱不替、
 著撰、何以死喪相尋、遂至絕祀、古曰、天與善

甫めて十三、父に従ひて東都に赴き、東叡山に遊ぶ、五言
 古風一百韻を作る、世の稱する所となる、年十八父を喪
 ひ、哀毀禮に過ぐ、母に奉ずる至孝、二弟を友愛し、己を行
 ふに道を以てす、其學たる、博く經史に通ず、又慨然大志
 あり、何も亡くして母氏を喪ふ、次弟も亦亡す、國華悲感
 に堪へず、遂に享保丁酉四月二十一日を以て病んで卒
 す、年僅に二十三、季弟亦夭す、南氏祀を絶つ、停雲集に、國
 華が除夜、白石に呈する排律一百韻を載す、氣象軒昂、珠
 璣璀璨たり、又妙見山に寄題の七律八首、亦復雋拔なり、
 其れをして天之れに假すに年紀を以てし、蛻岩南海と
 藝苑に馳逐せしめば、未だ鹿の誰の手に死するを知らざ
 るなり、天の才を忌む、其れ將何とか謂はん、且德ある者
 は未だ必しも才あらず、而して才子往々に行ひなし、國
 華絶世の才あり、而して孝悌恭謹、全人と謂ふ可し、二弟
 童髻と雖、亦已に弟たり難しと稱す、乃翁又篤恭、著稱不
 替に著撰のみならず、何を以て死喪相尋ぎ、遂に祀を絶つ
 に至るや、古に曰、天、善人に與すと、嘆。

人、噫

原希翊、田信威二人、竝、靖恭門人、靖恭薦諸紀藩、希翊、本姓下山、有故冒、外父姓、神原氏、名玄輔、號箕洲、在紀藩、著大明律譯解、信威、名文、其先朝鮮人、壬辰亂、年尙幼、我邦兵士、岡田某者得之、遂冒姓岡田、信威則其孫云、停雲集載二人詩數首。

山順之、岳仲通、田子舜、石貫卿亦竝、靖恭門人、其才藻大抵相若、其鄉貫履歷、詳見停雲集、其稱順之曰、年二十餘、始學於木門、刻苦讀書、行義甚修、家貧、日而食、晏如也、然則其人最可稱、九月十三夜對月排律、亦自不俗。

深見子新、名玄岱、號天濤、長崎人、以文學善

原希翊、田信威の二人は、竝に靖恭の門人なり、靖恭諸を紀藩に薦む、希翊本姓は下山、故ありて外父の姓神原氏を冒す、名は玄輔、箕洲と號す、紀藩に在りて、大明律譯解を著す、信威、名は文、其の先は朝鮮の人なり、壬辰の亂、年尙幼なり、我邦の兵士、岡田某といふ者、之れを得たり、遂に姓岡田を冒す、信威は則其孫と云ふ、停雲集に二人の詩數首を載す。

山順之、岳仲通、田子舜、石貫卿亦竝に靖恭の門人なり、其才藻大抵相若く、其鄉貫履歷は、詳に停雲集に見ゆ、其順之を稱するに曰、年二十餘、始めて木門に學ぶ、刻苦書を讀み、行義甚修る、家貧にして日を并せて食す、晏如なりと、然らば則其人最稱す可し、九月十三夜、月に對する排律、亦自ら俗ならず。

深見子新、名は玄岱、天濤と號す、長崎の人、文學善書を以

書稱初以醫術食糈於薩國、文廟初聞、其有文錄用、其詳見停雲集、余謂天濤以文學榮達、今閱其詩、無甚佳者、何也、天濤二子、松年龜齡、竝有材學云。

三宅用晦、名緝明、號觀瀾、京師人、以文章聞、常藩聘置其史局、文廟時、取補、東都學職、停雲集所載、寄京師人詩中聯曰、三更燈火波心市、十里絃歌岸上樓、杜父魚肥杯可舉、牛王廟古葉將秋、以其排偶易入世耳、膾炙一時、余謂三四爲攝之安治川作、則佳矣、鴨水涓涓、會不容刀、波心二字、殊爲無謂、第六句、徒事對偶、粘景不切、牛廟六月、羅穀相糜、香風撲鼻、何曾有此凄凉、觀瀾又有咏倭刀詩、亦見停雲集、我邦人咏我邦刀、題曰咏刀可

て稱せる、初め醫術を以て、糈を薩國に食む、文廟の初め、其有文を聞き録用せらる、其詳は停雲集に見ゆ、余謂ふ、天濤文學を以て榮達す、今其詩を閲するに、甚佳なる者なきは、何ぞや、天濤の二子、松年、龜齡、竝に材學ありと云ふ。

三宅用晦、名は緝明、觀瀾と號す、京師の人、文章を以て聞ゆ、常藩聘して、其史局に置く、文廟の時、取りて東都の學職に補せらる、停雲集に載する所の、京師の人に寄する詩中の聯に曰、三更の燈火波心の市、十里の絃歌岸上の樓、杜父魚肥えて杯舉ぐ可し、牛王廟古りて葉將さに秋ならんとすと、其排偶世耳に入り易きを以て、一時に膾炙す、余謂ふ、三四、攝の安治川の作と爲さば、則佳なり、鴨水涓々會て刀を容れず、波心の二字、殊に謂ひなしと爲す、第六句徒に對偶を事とし、景に粘すること切ならず、牛廟六月、羅穀相糜し、香風鼻を撲つ、何ぞ會て此の凄凉あらん、觀瀾又倭刀を咏する詩あり、亦停雲集に見ゆ、我邦の人にして我邦の刀を咏す、題して刀を咏すと曰ふて可なり、詎ぞ倭と曰ふを用ひん、宋明此等の詩多し、倭ふて之れを作らば、則日本刀を咏するに擬すと曰ふは、

也、詎用曰、倭、宋明多此等詩、倣而作之、則曰、擬咏、日本刀、猶可也、觀瀾有重名、而有此破綻、何也、或曰、觀瀾亦木門之人。

服部寬齋、前卷已錄、其人、今閱停雲集、寬齋名保庸、字紹卿、東都人、強記力學、且以孝友聞、文廟在藩之日、徵爲侍讀、云云、停雲集載其詩三首、頗清暢矣、寬齋弟維恭、名愿、號橘洲、同伯氏、錄用、停雲集載九月十三夜作、首尾勻稱、可錄。

土肥允仲、名元成、號霞洲、東都人、生而聰悟、及其能言、授書卽成誦、六歲作詩、文廟潛邸之日、召見、試講論語中庸、論辯甚明、且命書其所賦詩、書法亦可觀、于時元祿癸未秋八月、允仲年十一云、停雲集記允仲事、如茲、所

猶可なり、觀瀾重名ありて、而して此の破綻あるは、何ぞや、或は曰、觀瀾も亦木門の人なり。

服部寬齋、前卷已に其人を録す、今停雲集を閲するに、寬齋は保庸、字は紹卿、東都の人、強記力學、且孝友を以て聞ゆ、文廟、藩に在るの日、徵して侍讀と爲す云云、停雲集に、其詩三首を載す、頗清暢なり、寬齋の弟維恭、名は愿、橘洲と號す、伯氏と同じく錄用せらる、停雲集に九月十三夜の作を載す、首尾勻稱、録す可し。

土肥允仲、名は元成、霞洲と號す、東都の人生れて聰悟、其能く言ふに及び、書を授ければ卽誦を成す、六歳にして詩を作る、文廟潛邸の日、召見し、試みに論語中庸を講ぜしむ、論辯甚明なり、且命じて其賦する所の詩を書せしむ、書法も亦觀る可し、時に元祿癸未秋八月、允仲年十一と云ふ、停雲集に、允仲の事を記する茲の如し、謂はゆる、神童も當ならざるなり、余停雲集に載する所を覽るに、

謂神童不啻也。余覽停雲集所載詩亦當行、其中贈京師故人小絕曰、一別音書斷、相思秦地秋、欲將雙淚寄、墨水不西流、最存古意。眞子明都孟明、二人始末、併其詩、見停雲集、子明名璋、殊有才思云、所載詩一首、頗佳。

田伯鄰、姓益田、名助、號鶴樓、東都賈人、世業賣藥、伯鄰少志學、師事白石、遂以詩聞、又以喜客、其名益著、余閱其詩、無甚佳者、要緣諸名士不朽耳、梁景鸞有贈鶴樓書、及鶴樓集跋、服子遷有鶴樓傳、今併考之、其人則實可傳者、京攝雅多大賈、而無一人可比擬、近時攝有木世肅、或曰、可當鶴樓、余悉世肅爲人、不同鶴樓、鶴樓以豪、世肅以雅、鶴樓用率、世肅勤博、鶴樓一飲數斗、世肅勺飲不勸、鶴樓

詩も亦當行なり、其中京師の故人に贈る小絶に曰、「一別音書斷久、相思ふ秦地の秋、雙淚を將て寄せんと欲するも、墨水西流せず」と、最古意を存す。

眞子明、都孟明、二人の始末、其詩を併せて、停雲集に見ゆ、子明名は璋、殊に才思ありと云ふ、載する所の詩一首、頗佳なり。

田伯鄰、姓は益田、名は助、鶴樓と號す、東都の賈人なり、世賣藥を業とす、伯鄰少にして學に志し、白石に師事す、遂に詩を以て聞ゆ、又客を喜ぶを以て、其名益著る、余其詩を閱するに、甚佳なる者なし、要するに、諸名士に緣りて不朽なるのみ、梁景鸞、鶴樓に贈る書、及び鶴樓集の跋あり、服子遷に、鶴樓の傳あり、今併せて之れを考ふるに、其人は則實に傳ふ可き者なり、京攝雅より大賈多し、而して一人の比擬す可きなし、近時攝に木世肅あり、或は曰、鶴樓に當る可しと、余世肅の人となりを悉す、鶴樓に同じからず、鶴樓は豪を以てし、世肅は雅を以てす、鶴樓は率を用ひ、世肅は博を勤む、鶴樓は一飲數斗、世肅は勺飲勸めず、鶴樓は唯好みて詩を作る、世肅は稍多岐なり、鶴樓は客を喜ぶ、客無ければ樂まず、最文學の士を重んず、

唯好作詩、世庸稍多岐矣。鶴樓喜客、無客不樂、最重文學之士、客必得文士、不得則雜賓俗客、隨至而歡、世庸亦喜客、無客亦樂、非不重文學之士、而兼喜諸好事之徒。

僧法霖、號蘭谷、本小野氏、東都賈人、性恬世利、唯詩之耽、有兒尙幼、出妻獨處、後遂爲僧、停雲集、多載其詩、結構精密、佳篇不尠、一聯雙句、殊多響亮、今錄其數聯、舟中夢破湖天白、馬上望迷驛樹青、一水人遙梅耐折、三更夢斷月相親、鷺鳳長想高人嘯、鸚鵡徒憐處士狂、花裡書牕三月雨、松間禪榻五更風、只今天下劍無氣、依舊世間錢有神。

僧若霖、字桃溪、相州人、數往來京攝、東涯盍簪錄曰、霖善詩、兼能書畫、海內文儒之家、參

客必文士を得んとす、得ざれば則雜賓俗客も至るに隨つて歎す、世庸も亦客を喜ぶ、客無けれども亦樂しむ、文學の士を重んぜざるに非ず、而れども兼て諸好事の徒を喜ぶ。

僧法霖、蘭谷と號す、本と小野氏、東都の賈人なり、性世利に恬なり、唯詩に之耽る、兒あり尙幼なるに、妻を出して獨處し、後遂に僧と爲る、停雲集に多く其詩を載す、結構精密、佳篇尠からず、一聯雙句、殊に響亮多し、今其數聯を錄す、舟中夢破れて湖天白く、馬上望迷ふて驛樹青し、一水人遙にして梅折るに耐へん、三更夢斷えて月相親しむ、鷺鳳長く想ふ高人の嘯、鸚鵡徒に憐む處士の狂、花裡の書牕三月の雨、松間の禪榻五更の風、只今天下劍に氣なし、舊に依りて世間錢に神ありと。

僧若霖、字は桃溪、相州の人、數京攝に往來す、東涯の盍簪錄に曰、霖詩を善くし、兼て書畫を能くす、海內文儒の家、參謁殆んど遍しと云云、今其詩を覽るに、實に法霖の下

謁殆遍云云、今覽其詩、實出於法筌之下、如題某池亭詩、後聯曰、釣罷孤舟蘋渚繫、魚稀隻鷺遶汀眠、前句已係魚事、亦唯一意、餘可、以推矣。

梁景鸞、名邦美、號蛻岩、總州人、少遊學東都、天才巧妙、前無古人、後無繼者、少時負才、不閑小節、故筮仕數、跌屢、遇困阨、家徒四壁、而意氣不少撓、嘗以不能買書爲題、其末句曰、惠車鄴架滿天地、誰信空拳猶突圍、不知者以爲妄且傲、而其咏雪詩序中亦曰、余頻年窮甚、書篋中、除四子外、有詩韻一冊、徐文長集半部、夫空拳突圍、果非虛語也、余謂爾時東都雖、人才如林、除白石、南海外、諸子長鎗大戟、恐難敵景鸞空拳、景鸞後仕、加納侯、加

に出づ、某池亭に題する詩の如き、後聯に曰、釣り罷んで孤舟蘋渚に繫ぎ、魚稀にして隻鷺遶汀に眠る、前句已に魚の事に係れば、亦唯一意なり、餘は以て推す可し。

梁景鸞、名は邦美、蛻岩と號す、總州の人、少にして、東都に遊學し、天才巧妙、前に古人なく、後に繼ぐ者なし、少時才を負み、小節に閑はず、故に筮仕數、跌す、屢困阨に遇ふ、家徒四壁のみ、而して意氣少しも撓まず、嘗て書を買ふ能はざるを以て題と爲す、其末句に曰、惠車鄴架滿天地に滿つ、誰か信ぜん空拳猶圍を突くと、知らざる者は、以て妄且傲と爲す、而して其咏雪の詩の序中にも亦曰、余頻年窮甚し、書篋中、四子を除く外、詩韻一冊、徐文長の集半部ありと、夫の空拳圍を突くは、果して虚語に非ざるなり、余謂ふ爾時東都、人才林の如しと雖、白石、南海を除く外、諸子の長鎗大戟、恐くは景鸞の空拳に敵し難からん、景鸞後加納侯に仕ふ、加納侯とは今の松本侯即是れなり、

納侯、今松本侯卽是也。亡何亦辭去、最後爲赤石儒學、赤石有海嶽之勝、加之鄰於攝近、於京師、其業漸以廣被、遂有終焉意、於是湖海之氣日銷、溫潤之德月進、余弱齡在、赤石始謁其人、旣已曙曙然矣、而薰然和煦、毫不修邊幅、且天性愛才、循循誘獎、不以所長加人、長子、小字萬虎、才氣似乎乃翁、以疾廢焉、次子卽今嗣職者、余按、蛻岩詩體屢變、爲唐爲宋、元爲初明、爲七子、爲徐文長、爲袁中郎、爲鍾譚、贈余弟詩、有我初御風翔、晚而履平地之句、而亦唯畢竟爲一蛻翁之詩云、余謂凡作者、患在才者不勤、敲推勤者未必有才也、蛻岩有天縱才、而極力鍛鍊、何以知其然也、蛻岩與余兄弟交稱、忘年、贈答殊多、是皆

何も亡く亦辭し去る、最後に赤石の儒學と爲る、赤石は海嶽の勝あり、之れに加ふるに攝に鄰り、京師に近し、其業漸く以て廣被す、遂に終焉の意あり、是に於て湖海の氣日に銷し、溫潤の徳月に進む、余弱齡赤石に在り、始めて其人に謁す、旣に已に曙々然たり、而して薰然和煦、毫も邊幅を修めず、且天性才を愛し、循々誘獎、所長を以て人に加へず、長子小字は萬虎、才氣乃翁に似たり、疾を以て廢す、次子は卽今職を嗣ぐ者、今按するに、蛻岩詩體屢變す、唐と爲り、宋元と爲り、初明と爲り、七子と爲り、徐文長と爲り、袁中郎と爲り、鍾譚と爲る、余が弟に賜る詩に、「我れ始め風に御して翔る、晚に而て平地を履む」の句あり、而れども亦唯畢竟一蛻翁の詩たりと云ふ、余謂ふに、凡そ作者の患は、才ある者は敲推を勤めず、勤むる者は未だ必しも才あらざるに在るなり、蛻岩天縱の才あり、而して力を極めて鍛鍊す、何を以て其然るを知る、蛻岩余が兄弟と交り、忘年と稱す、贈答殊に多し、是れ皆蛻岩が赤石親駕の後なり、其年紀を考ふるに蓋六十以後なり

蛻岩赤石稅駕之後考其年紀蓋六十以後
 矣厥後蛻岩集出就而閱之則往往改二三
 字而改者更有理致乃知八十老翁孜孜兀
 兀潛思字句宜其能造詣精微今讀其集譬
 猶上崑崙之邱步步是玉入栴檀之林枝枝
 是香詩至於此宜無遺論而猶有未盡善者
 何也蛻岩用才大過耳張茂先謂陸士衡曰
 人常恨才少而子更患其多余於蛻翁復云
 桂山彩岩名義樹字君華東都秘書監云余
 在赤石梁景鸞數稱彩岩詩律精工因知其
 作家後來信州湖玄岱亦盛稱彩岩乃益知
 其作家於是歷閱諸選玉壺詩稿載八島懷
 古七律二首崑玉集載擬金陵懷古七律一
 首熙朝文苑載贈人七絕二首通諸選所載

厥後蛻岩集出づ就て之れを閱すれば則往々二三字を
 改む而して改むる者更に理致あり乃知る八十の老翁
 孜孜兀々思を字句に潛む宜なり其能く精美に造詣す
 ること今其集を讀むに譬ば猶崑崙の邱に上り歩々是
 れ玉梅檀の林に入り枝々は是れ香なるがごとし詩も此に
 至りて宜しく遺論なかるべし而して猶未だ善を盡さ
 ざるあるは何ぞや蛻岩才を用ふる太だ過ぐるのみ張
 茂先陸士衡に謂て曰人常に才の少きを恨む而して子
 は更に其多きを患ふと余蛻翁に於て復云ふ。

桂山彩岩名は義樹字は君華東都の秘書監と云ふ余赤
 石に在り梁景鸞數彩岩の詩律精工を稱す因て其作家
 なるを知れり後來信州の湖玄岱も亦盛んに彩岩を稱
 す乃益其作家なるを知る是に於て歷く諸選を閱する
 に玉壺詩稿に八島懷古七律二首を載す崑玉集に金陵
 懷古に擬する七律一首を載す熙朝文苑に人に贈る七
 絕二首を載す諸選の載する所を通じて僅に五首其他
 は見るなし京攝の年少往々桂秘監の何れの人なるを

僅五首、其他無見、京攝年少、往往不知桂秘
 監爲何人、蓋數十年來、東都藝文、播傳于京
 攝者、特譏園諸子、其他雖鸞鳳吐音、寥乎無
 聞、亦可見一時風氣之偏、而彩岩重厚、不近
 名者、亦可徵耳、

物徂徠、以傑出才、駕宏博學、不能守舊業、遂
 以復古創立門戶、其初一二輕俊、從而鼓吹
 之、終能海內翕然風靡雲集、我邦藝文、爲之
 一新、而才俊亦多出、其門、至今講說之徒、藉
 口徂徠、坐卓比、而驕生徒者、比比不尠、若夫
 經義文章、余有別論、徂徠嘗著唐後詩絕句
 解、海內由是宗嘉靖七子、喜之者、以徂徠爲
 藝苑之功人、非之者、或以爲長輕薄、要未之
 深考耳、余謂明詩之行于近時、氣運使之也、

知らず、蓋數十年來、東都の藝文、京攝に播傳する者は、特
 に園諸子、其他鸞鳳音を吐くと雖、寥乎として聞ゆる無
 し、亦一時風氣の偏を見る可し、而して彩岩重厚名に近
 づかざる者なるも、亦徵す可きのみ、

物徂徠傑出の才を以て、宏博の學に駕す、舊業を守る能
 はず、遂に復古を以て門戶を創立す、其初め一二の輕俊、
 從ひて之れを鼓吹す、終に能く海內翕然として風靡雲集
 す、我邦の藝文之れが爲に一斬す、而して才俊も亦多く
 其門に出づ、今に至りて講說の徒、口を徂徠に藉り、卓比
 に坐して、而して生徒に驕る者比々尠からず、若夫れ經
 義文章は、余別論あり、徂徠嘗て唐後詩絶句解を著す、海
 内是に由て嘉靖七子を宗とす、之れを喜ぶ者は、徂徠を
 以て藝苑の功人と爲し、之れを非る者は、或は以て輕薄
 を長すと爲す、要するに未だ之れを深く考へざるのみ、
 余謂ふに、明詩の近時に行はるゝ氣運之れをせしむる

請詳論之、夫詩漢土聲音也、我邦人不學詩、則已、苟學之也、不能不承順漢土也、而詩體每隨氣運遞遷、所謂三百篇、漢魏六朝、唐宋元明、自今觀之、秩然相別、而當時作者、則不知其然而然者、氣運使之者、非耶、我邦與漢土相距萬里、劃以大海、是以氣運每衰于彼、而後盛于此者、亦勢所不免、其後于彼、大抵二百年、胡知其然、懷風、淩雲二集所收五言四韻、世以爲律詩、非也、其詩對偶雖備、聲律未諧、是古詩漸變爲近體、齊梁陳隋、漸多其作、我邦承其氣運者、稽其年代、文武天皇、大寶元年、爲唐中宗、嗣聖十四年、上距梁武帝天監元年、凡二百年、弘仁、天長、勢羅初唐、天曆、應和、崇尙元白、竝罷勉乎百年之後、五山

なり、請ふ詳かに之れを論ぜん、夫れ詩は漢土の聲音なり、我邦の人、詩を學ばざれば、則已む、苟之れを學ばば、漢土に承順せざる能はざるなり、而して詩體は毎に氣運に隨いて遞遷す、謂はゆる三百篇、漢魏六朝、唐宋元明、今より之れを觀れば、秩然と相別る、而も當時の作者は、則其然るを知らずして、然る者は、氣運之れをせしむる者か、非か、我邦、漢土と相距る萬里、劃するに大海を以てす、是を以て氣運彼に衰へて、而して後に此に盛なる者は、亦勢の免れざる所、其彼に後るゝ、大抵二百年、胡んぞ其然るを知る、懷風、淩雲の二集の收むる所の五言四韻、世以て律詩と爲すは、非なり、其詩、對偶備はると雖、聲律未だ諧はず、是れ古詩の漸く變じて近體と爲るなり、齊梁陳隋、漸く其作多し、我邦其氣運を承くる者、其年代を稽ふるに、文武天皇、大寶元年是、唐の中宗の嗣聖十四年たり、上、梁の武帝の天監元年を距る、凡そ二百年、弘仁、天長は、初唐に勢羅し、天曆、應和は、元白を崇尙す、竝に百年の後、に罷勉す、五山詩學の盛なるは、明の中世に當る、彼に在

詩學之盛、當明中世、在彼則李、何、王、李、唱、復、古於前後、在此則南宋、北元、專、傳播於一時、其距、宋、元之際、亦二百年矣、我、元、祿、距、明、嘉、靖、亦復二百年、則七子詩、當行於我邦、氣運已符、故有先子徂徠、已稱揚七子者、活所備忘錄曰、李滄溟、著唐詩選、甚契余意、學詩者、舍之何適、又曰、謝茂秦、洞庭湖、徐子與、吳明卿、岳陽樓作、氣象雄壯、與絕景相敵、殆可追步少陵、浩然二氏、永田善齋、膾餘雜錄、亦論及七子、而爾時氣運未熟、故唱之、而無和者、迨徂徠時、其機已熟、白石滄浪、蛻岩南海、大抵與徂徠同時、竝非買護園之餘勇者、而其詩雖曰宗唐、亦唯明詩聲格、故云氣運使之也、繇是論之、則其或繼今者、雖數百年、可知

りては、則李、何、王、李、復古を前後に唱へ、此に在りては、則南宋北元、傳播を一時に專にす、其宋元の際を距る亦二百年なり、我が元祿は明の嘉靖を距る、亦復二百年なれば、則七子の詩當さに我邦に行はるべき、氣運已に符す、故に徂徠に先ちて、已に七子を稱揚する者あり、活所の備忘錄に曰、李滄溟、唐詩選を著す、甚余が意に契ふ、詩を學ぶ者、之れを捨て、何くに適かんと、又曰、謝茂秦の洞庭湖、徐子與、吳明卿の岳陽樓の作、氣象雄壯、絕景と相敵す、殆んど少陵、浩然の二氏に追步す可しと、永田善齋の膾餘雜錄にも、亦七子に論及す、而れども爾時氣運未だ熟せず、故に之れを唱へて、而して和する者無し、徂徠の時に迄り、其機已に熟す、白石滄浪、蛻岩南海、大抵徂徠と同時、竝に護園の餘勇を買ふ者に非ず、而して其詩唐を宗とすと雖、亦唯明詩の聲格なり、故に云ふ、氣運之れをせしむるなり、是れに繇て之れを論ずれば、則其或は今に繼ぐ者、數百年と雖、知る可きなり、或ひと余に謂つて曰、子の既往を、するは似たり、其今に繼ぐ者は何

也、或謂余曰、子之論、既往似矣、其繼今者何如、曰、余聞明詩四變、李何一變、王李二變、二袁三變、鍾譚四變、逾變而逾卑、卑焉、最後有陳臥子出、著明詩選、吹王李餘燼、而氣運既替、不能復振、清人議論不一、櫟下書影、訶斥王李、爲小兒語、歸愚別裁、紹述臥子、少別機軸、又有專宗、晚唐、雖參趨異途、以余觀之、清人篇詠、大抵諸家相似、其纈整雅柔、頗似于元季明初作家、較諸近時所謂明詩者、無剽竊雷同之病、而其氣格則稍淡弱矣、當今京攝才髦所作、往往出于此途、亦氣運所鼓、不得不然、而邈州遠境、至今猶尸祝七子者、氣運推移、有本末、有遲速、猶我邦之於漢土也、或曰、嚮微徂徠、則明詩之行、可以漸也、徂徠

如ん、曰、余聞く明詩四變すと、李何に一變し、王李に二變し、二袁に三變し、鍾譚に四變し、逾變じて逾卑々なり、最後に陳臥子の出づるありて、明詩選を著し、王李の餘燼を吹く、而も氣運既に替れ復振ふ能はず、清人議論一ならず、櫟下の書影に、王李を訶斥して、小兒の語と爲す、歸愚の別裁は、臥子を紹述して、少しく機軸を別にす、又專晚唐を宗とするあり、參趨途を異にすと雖、余を以て之れを觀れば、清人の篇詠、大抵諸家相似たり、其纈整雅柔、頗元季明初の作家に似たり、諸を近時の謂はゆる明詩なる者に較れば、剽竊雷同の病なく、而して其氣格は則稍淡弱なり、當今京攝才髦の作る所往々此の途に出づ、亦氣運の鼓する所、然らざるを得ず、而して邈州遠境、今に至りて猶七子に尸祝する者は、氣運の推移、本末あり、遲速ある、猶我邦の漢土に於けるがごとし、或ひと曰、嚮に徂徠ナカ微れば、則明詩の行はるゝ漸を以てす可きなり、徂徠才大に氣豪に、言過激多し、故に其行はるゝ驟にして、其弊も亦速なりと、余按ずるに、徂徠の詩、一體あり、幼年の作

才大氣豪言多過激故其行也驟而其弊亦速余按徂徠詩有二體初年作瘦勁雄深後來影響李王勳作高華之言要之詩非其所長也。

徂徠門下稱多才俊其顯者春臺南郭之外猶數十人可謂盛也然細考之則其中大有軒輊蓋大名之下易成名耳況赫赫東都非他邦比或攀龍附鳳歛託禁衛或曳裾授簡長沾侯鯖假虎威者附驥尾者青雲非難致也加之邦國士人各從其君往來結交同盟遍滿諸藩褒同伐異鼓盪扇揚靡迴辭不屈是其所以顯赫一時也退察其私則羊質而虎文名過其實者亦不鮮簸之淘之後世自有公論耳。

は、瘦勁雄深、後來李王に影響し、勳めて高華の言を作す、之れを要するに詩は其長する所に非ざるなり。

徂徠門下才俊多しと稱す、其顯るゝ者春臺、南郭の外猶數十人盛なりと謂ふ可きなり、然も細に之れを考ふれば、則其中大に軒輊あり、蓋大名の下、名を成し易きのみ、況んや赫赫たる東都、他邦の比に非ず、或は龍に攀ち鳳に付き、歛禁衛に託し、或は裾を曳き簡を授け、長く侯鯖に沾し、虎威を假る者、驥尾に附く者、青雲致し難きに非ざるなり、之れに加ふるに邦國の士人、各其君に従ひて往來し、結交同盟、諸藩に遍滿す、同を褒め異を伐ち、鼓盪扇揚、遐僻として屈らざるは靡し、是れ其一時に顯赫する所以なり、退て其私を察すれば、則羊質にして虎文、名其實に過ぐる者も亦鮮からず、之れを簸し之れを淘し、後世自ら公論あらんのみ。

滕東壁、名煥圖、先子諸子、執謁徂徠、所著有東野遺稿、其詩在護國諸子中、雖華藻不競、而渾朴可稱。

縣次公、名孝孺、號周南、周防人、師事徂徠、初次公父良齋、爲長藩文學、次公嗣其職、長門泮宮曰明倫館、次公司其館事、至今長門多才學之士云、余謂近時文士得行志、莫若次公、其著作有周南文集。

太宰德夫、名純、號春臺、信州人、初同東壁、從學中野搗謙、搗謙名繼善、字完翁、長崎人、嘗仕關宿侯云、後東壁從遊徂徠、數書招德夫、遂歸于物門、其學業行事、詳見于服子遷所撰墓碑、松君修所錄行狀、唯斯偏心、往往爲人訶斥、而以余論之、則春臺雖偏窄、自信

滕東壁、名は煥圖、諸子に先だちて詞を徂徠に執る、著す所東野遺稿あり、其詩護國諸子の中に在りて、華藻競はずと雖、而も渾朴稱すべし。

縣次公名は孝孺、周南と號す、周防の人、徂徠に師事す、初め次公の父良齋、長藩の文學たり、次公其職を嗣ぐ、長門の泮宮を明倫館と曰ふ、次公其館事を司る、今に至りて長門才學の士多しと云ふ、余謂ふに近時の文士志を行ふを得るは、次公に若く莫し、其著作、周南文集あり。

太宰德夫、名は純、春臺と號す、信州の人、初め東壁と同じく、中野搗謙に從學す、搗謙、名は繼善、字は完翁、長崎の人、嘗て關宿侯に仕ふと云ふ、後、東壁、徂徠に從遊し、數書にて德夫を招く、遂に物門に歸す、其學業行事、詳に服子遷の撰する所の墓碑、松君修の錄する所の行狀に見ゆ、唯斯の偏心、往々人に訶斥せらる、而して余を以て之れを論すれば、則春臺偏窄なりと雖、自ら信すること甚確なり、是を以て議論透徹して、痛快の語多し、自ら人に過

確、是以議論透徹、多痛快語、自有過人者、其人以名教自任、而詩亦可觀、嘗著文論詩論、余初讀之、殊歎其持論不正、後讀春臺文集、與二論、低悟者之有、所謂當局者惑歟、不然則初年作耳、纂輯其集者、不刪何也、其詳余有別論。

服子選、名元喬、號南郭、所著南郭文集、自初編至四編、竝行於世、蓋徂徠沒後、物門之學、分而爲二、經義推春臺、詩文推南郭、余按、我邦詩、元和以前、唯有僧絕海、元和以後、漸有其人、而白石、蛻岩、南海、其選也、今以南郭較夫三子、南郭天授不及、白石、工警不及、蛻岩富麗不及、南海、而竟難爲三子之下者、何哉、操觚年少、悟入此關、始可與言詩耳、蓋白石

くるある者、其人名教を以て自ら任ず、而詩も亦觀る可し、嘗て文論詩論を著す、余初め之れを讀みて、殊に其持論の不正を歎す、後春臺文集を讀むに、二論と低悟する者之れあり、謂はゆる局に當る者は惑ふものか、然らざれば、則初年の作のみ、其集を纂輯する者刪らざるは、何ぞや、其詳なることは余別論あり。

服子選、名は元喬、南郭と號す、著す所南郭文集、初編より四編に至る、竝に世に行はる、蓋徂徠沒して後、物門の學、分れて二と爲る、經義は春臺を推し、詩文は南郭を推す、余按するに、我邦の詩、元和以前は、唯僧絶海あり、元和以後は、漸く其人あり、而して白石、蛻岩、南海は、其選なり、今南郭を以て夫の三子に較ぶるに、南郭は天授、白石に及ばず、工警、蛻岩に及ばず、富麗、南海に及ばず、而して竟に三子の下たり難き者は何ぞや、操觚の年少、此の關に悟入せば、始めて與に詩を言ふ可きのみ、蓋白石は天授超凡、辭藻絶塵、誠に及ぶ可からず、若し其全集に就き之

天授超凡、辭藻絕塵、誠不可及、若就其全集論之、清雅秀婉、絢彩溢目、而悲壯沈鬱、渾雄蒼老、集中無幾、南海唯是一味綺麗、後勸超脫、卻屑屑乎纖巧矣、蛻岩天縱之才、奇正互用、變幻百出、神工鬼鑿、孤高獨立于古今之間、惜乎用才太過、如前論者、蓋用才太過、有傷風雅、譬之土庶陪侯家、謙席有時笑謔歌唱、亦無害也、太過則有類俳優、南郭能守地步、不求勝於一句一章、而全功於一卷一集、今閱其集、初編瑕類頗多、二編十存二三、三編四編最粹然矣、乃知此老剪裁、老益精到、因謂作者無才則已、有小才而欲大用之、醜態畢露、最可戒也、大才大用、誠爲快絕、而僅欲快絕、易侵三尺、十分之才、每用六七分、

れを論ぜば、清雅秀婉、絢彩目に溢る、而して悲壯沈鬱渾雄蒼老なる者は、集中幾もなし、南海は唯、是れ一味綺麗、後勸めて超脱し、卻て纖巧に屑々たり、蛻岩は天縱の才、奇正互に用ひ、變幻百出、神工鬼鑿、古今の間に孤高獨立す、惜らくは才を用ふること太過、前に論ずる者の如し、蓋、才を用ふる太過なれば、風雅を傷るあり、之れを譬ふるに、土庶、侯家の謙席に陪し、時ありて笑謔歌唱するも、亦害なきなり、ただ過ぐれば、則俳優に類するあり、南郭能く地歩を守る、勝を一句一章に求めず、而して功を一卷一集に全うす、今其集を閲するに、初編は瑕類頗多し、二編は十に二三を存す、三編四編は最も粹然たり、乃知る此老の剪裁、老いて益精到なるを、因て謂ふ、作者才なければ、則已む、小才ありて而して之れを大用せんと欲すれば、醜態畢く露る、最戒む可きなり、大才大用、誠に快絶と爲す、而して僅に快絶を欲すれば、三尺を侵し易し、十分の才、毎に六七分を用ふるは、正に是れ詩家極至の工夫、南郭能く此義を解す、百尺竿頭、歩を進むを肯せ

正是詩家極至工夫、南郭能解此義、百尺竿頭不肯進步、反是難至地位、南郭次子、名恭、字愿卿、幼稱才穎、年僅十九而沒、有遺稿、名鍾情集、其中聞莊子謙登芙蓉以寄詩中聯曰、不啻登臨城小魯、更知呼吸近洞天、人間長仰三峯雪、海上回看九點煙、可謂翩翩有逸氣、又送客絕句曰、秋風颯颯雨紛紛、匹馬孤舟兩岸分、萬里江山如黛色、相望能不歎離群、亦佳、南郭晚年、撫西仲英爲子、亦已沒矣、其著作、余未覽之。

平子和、名玄中、號金華、嘗有詩贈服子遷曰、白髮如絲混弟兄、中原二子奈虛名、子和之不自量、誠亡論耳、世人亦多與子遷竝稱、可謂子和之幸、子和詩有、太佳者、有、太不佳者、

予、反りて是れ至り難き地位なり、南郭の次子、名は恭、字は愿卿、幼にして才穎と稱す、年僅に十九にして沒す、遺稿あり、鍾情集と名く、其中に莊子謙の芙蓉に登るを聞て以て寄する詩の中聯に曰、嘗に登臨魯を小とするに堪ゆるのみにあらず、更に知る呼吸の近く天に逼るを、人間長く仰ぐ三峯の雪、海上回らし看る九點の煙と、翩翩逸氣ありと謂ふ可し、又客を送る絶句に曰、秋風颯々雨紛紛、匹馬孤舟兩岸に分る、萬里江山黛色の如し、相望んで能く離群を歎ぜざらんやと、亦佳なり、南郭晩年に西仲英を撫して子と爲す、亦已に沒す、其著作、余未だ之れを覽ず。

平子和名は玄中、金華と號す、嘗て詩あり、服子遷に贈りて曰、白髮絲の如く弟兄を混す、中原の二子虚名を奈ん」と、子和の自ら量らざるは誠に論亡きのみ、世人も亦多く子遷と竝稱す、子和の幸と謂ふ可し、子和の詩、ただ佳なる者あり、ただ佳ならざる者あり、ただ佳なるものは

太佳者、體格雄華、金石鏗鏘、太不佳者、淺陋支離、剽竊陳腐、如出二手、亦唯負才不能精思耳。

高子式、名維馨、號蘭亭、年十七喪明、專志詩詞、生平所作殆萬首、貴介公子、爭延講詩、名聲藉甚于一時、其詩剪裁整密、音韻清暢、雖不及白石、蛻岩、南郭等大家名家、在小家數、則可稱上首者。

島錦江、名鳳卿、字歸德、東都秘書監、越雲夢名正珪、字君瑞、竝名重于物門、護園錄稿、載其詩、錦江、吳宮詞、遊獵歌、竝合詞矣。

菅麟嶼、本姓山田、名弘嗣、字大佐、幼有神童之稱、年十三、德廟召見、尋爲博士、童時遊京師、參謁諸儒、爾時余尙幼、侍先人膝下、一見

體格雄華、金石鏗鏘、太佳ならざるものは、淺陋支離、剽竊陳腐、二手に出るが如し、亦唯才を負み精思する能はざるのみ。

高子式、名は維馨、蘭亭と號す、年十七、明を喪ひ、志を詩詞に專にす、生平作る所殆んど萬首、貴介公子、爭ひ延て詩を講ぜしむ、名聲一時に藉甚なり、其詩剪裁整密、音韻清暢、白石、蛻岩、南郭等の大家名家に及ばずと雖、小家數に在ては、則上首と稱す可き者なり。

島錦江、名は鳳卿、字は歸德、東都の秘書監なり、越雲夢名は正珪、字は君瑞、竝に名、物門に重し、護園錄稿に、其詩を載す、錦江、吳宮詞、遊獵歌、竝に合詞なり。

菅麟嶼、本姓は山田、名は弘嗣、字は大佐、幼にして神童の稱あり、年十三、德廟召見す、尋で博士と爲る、童時に京師に遊び、諸儒に參謁す、爾時余尙幼なり、先人の膝下に侍して、之を一見す、今甚記せず、錄稿に其詩二首を載す。

之、今不甚記、錄稿載其詩二首。

石叔潭、名之清、東都侍衛臣云、亦物門之人、
 土伯暉、名昌英、守秀緯、名煥明、二人亦有重
 名、竝兼醫、伯暉仕小倉侯、秀緯仕大垣侯、錄
 稿所載秀緯、應對芙蓉、含雪色、穠當滄海抱
 潮聲、萬家榆柳傳新火、千里鶯花背舊程、太
 佳、吳宮怨小絕亦佳。

芙蓉萬菴、魯寮大潮、二僧殊與物門諸子相
 歡、詩名高于一世、我邦釋門詩、元和以前、推
 絕海義堂、元和以後、推萬菴、大潮、余設江陵
 集、又讀松浦集、二僧工力、大抵相當、而如才
 華、則萬菴似進一籌。

源京國、名義治、號華岳、物門諸子、數稱其人、
 謂當作家、而諸選所載、余未親其佳者、若夫

石叔潭、名は之清、東都侍衛の臣と云ふ、亦物門の人なり。
 土伯暉、名は昌英、守秀緯、名は煥明、二人も亦重名あり、竝
 に醫を業とす、伯暉は小倉侯に仕へ、秀緯は大垣侯に仕
 ふ、錄稿に載する所の秀緯の、應は芙蓉に對して雪色を
 含み、穠は滄海に當りて潮聲を抱く、萬家の榆柳新火を
 傳へ、千里の鶯花舊程に背くと、大だ佳なり、吳宮怨の小
 絶も亦佳なり。

芙蓉萬菴、魯寮大潮、二僧殊に物門の諸子と相歡す、詩名
 一世に高し、我邦釋門の詩、元和以前は絶海義堂を推し、
 元和以後は萬菴、大潮を推す、余江陵集を讀み、又松浦集
 を讀む、二僧の工力、大抵相當る、而して才華の如きは則
 萬菴一籌を進むるに似たり。

源京國、名は義治、華岳と號す、物門の諸子、數其人を稱す、
 謂ふ當に作家なるべし、而して諸選載する所、余未だ其
 佳なる者を觀ず、夫の板美仲の若きは、名價高からず、而

板美仲、名價不高、而錄稿所選、臥閣青山遠、
 彈琴白日長、山對柴門靜、海連曠野平、故園
 春欲盡、絕域草初肥、殘夜傳刁斗、頻年臥鐵
 衣、風裁同卓魯、治行擬龔黃、又湖海論、交添
 涕淚、蓬蒿臥病、易蹉跎、卻是諧合。

莊子謙、姓村田、名允益、豐後臼杵人、仕本藩、
 祇役東都、受業南郭、負才好奇、嘗登富嶽、作
 芙蓉記、凡民庶上嶽者、必齋戒喫素、而後敢
 上、且相戒不許語山中事跡、子謙作記、始漏
 造化之秘、亡何子謙暴卒、俗輩以爲得罪嶽
 神、余殊愛子謙、秋懷二聯、曰、青山入夢松蘿
 月、秋雨關心水竹居、却恨西都題柱過、且思
 南畝帶經鋤、深婉情至、恨不見他篇。

石子游、姓石島、初名正猗、字仲綠、後更名藝、

して錄稿に選する所の、外關青山遠く、彈琴白日長し、
 山は柴門に對して靜、海は曠野に連なりて平なり、故園
 春盡きんと欲す、絕域草初めて肥えたり、殘夜刁斗を傳
 ふ、頻年鐵衣に臥す、風裁卓魯に同じく、治行龔黃に擬
 す、又湖海交を論じて涕淚を添ふ、蓬蒿病に臥して蹉
 跎なり易し、と、卻是れ諧合す。

莊子謙、姓は村田、名は允益、豐後臼杵の人、本藩に仕へ、東
 都に祇役す、業を南郭に受く、才を負み奇を好む、嘗て富
 嶽に登り、芙蓉記を作る、凡民庶嶽に上る者、必齋戒素を
 喫し、而して後敢て上る、且相戒めて山中の事跡を語る
 を許さず、子謙記を作りて、始めて造化の秘を漏らす、何
 も亡くして子謙暴に卒す、俗輩以て罪を嶽神に得ると
 爲す、余殊に子謙の秋懷二聯を愛す、曰、青山夢に入る松
 蘿の月、秋雨心に關す水竹の居、却て恨む西都柱に題し
 て過ぐ、且思ふ南畝經を帯びて鋤かんことを、深婉情
 至、恨むらくは他篇を見ず。

石子游、姓は石島、初の名は正猗、字は仲綠、後、名を藝、字

字子游、自稱筑波山人、尾張入、遷住東都、亦南郭門人、放蕩好酒、不能爲家、而以詩才雄豪、稱于一時、嘗遊京師、作詩曰、敝裘仗劍入西京、自比能文陸士衡、誰見篇章焚筆硯、豈將詩賦讓簪纓、一時羊酪無人問、千里蓴羹動客情、洛下書生誇博物、寥寥未聞茂先名、其狂誕大率類此、玉壺詩稿、錄子游詩殊多、往往神氣軒翥、筆端活動、若濟以精細、則可爲詞壇旌門、惜乎其入輕躁、下筆亦復疎率耳、

護園錄稿所載五絕、松子錦春意、臘雪二三尺、門前不可掃、纔被春風吹、江上盡青草、又古別離、送君黃河湄、黃河幾千里、我思長、於河、思人終不已、七絕、平子彬登長興山云、長

を子游と更む、自ら筑波山人と稱す、尾張の人なり、遷りて東都に住す、亦南郭の門人、放蕩にして酒を好み、家を爲す能はず、而して詩才雄豪を以て、一時に稱せらる、嘗て京師に遊び詩を作りて曰、敝裘仗劍に仗りて西京に入る、自ら比す能文の陸士衡、誰か篇章を見て筆硯を焚く、豈詩賦を將て簪纓に讓らん、一時羊酪人の問ふ無く、千里の蓴羹客情を動かす、洛下の書生博物に誇る、寥寥未だ聞かず茂先の名と、其狂誕大率此れに類す、玉壺詩稿に、子遊の詩を録す殊に多し、往々神氣軒翥、筆端活動す、若し濟ふに精細を以てせば、則詞壇の旌門たる可し、惜いかな其人輕躁、筆を下すこと亦復疎率なるのみ、

護園錄稿載する所の五絶、松子錦の春意に臘雪二三尺、門前可からず、纔に春風に吹かる、江上盡青草と、又古別離に、君を送る黃河の湄、黃河幾千里、我思河よりも長し、人を思ふて終に已まずと、七絶には、平子彬の長興山に登るに云ふ、長興の山色清秋に秀づ、日は摩尼寶塔を

典山色秀清秋、日抱摩尼寶塔浮、湘水如環
 歸大海、連天帆影不曾流、僧了玄、春日遊墨
 水云、風花處處送江春、古渡蕭條芳草新、爲
 是王孫昔遊地、縱無白鳥亦愁人、江子園、秋
 宮怨云、琪樹西風白鴈過、夜寒如水渺天河、
 自將紈扇憐秋色、不問昭陽月影多、竝是警
 絕、自可不朽、其餘作者、當重考補遺、因不具
 錄云。

日本詩史卷之四 終

抱きて浮ぶ湘水環の如く大海に歸す、天に連なる帆影
 會て流れずと、僧了玄の春日墨水に遊ぶに云ふ、風花處
 *江春を送る、古渡蕭條芳草新なり、是れ王孫昔遊の地な
 るが爲に、縱ひ白鳥なきも亦人を愁へしむと、江子園、秋
 宮怨に云ふ、琪樹の西風白雁過ぐ、夜寒水の如く天河渺
 たり、自ら紈扇を將て秋色を憐む、問はず昭陽月影の多
 きを、と、竝に是れ警絶、自ら不朽なる可し、其餘作者當に
 重考して遺を補ふべし、因て具錄せずと云ふ。

日本詩史卷之五

平安 江邨綬君錫著

弟 清 絢君錦

男 悰秉孔均 同按

品藻之難也、銜賣者、其聲遠播、而其實未副焉、韜晦者、其文足徵、而其名每湮焉、生其土而商、掩其土藝文、猶且稱難得、其要領、何況他邦人士、所謂隔靴搔癢、不曾也、余讀淺舜臣所輯崑玉集、木實開所著玉壺詩稿、張澹藝文、管見一斑、但二集撰次無倫、且不詳作者、鄉貫、張人與他邦人、混淆不可分別、則余所論列、訛謬固當居多耳。

品藻の難き、銜賣する者は、其聲遠く播て、而して其實未だ副はず、韜晦する者は、其文足徴するに足りて、其名毎に湮す、其土に生れて、而して其土の藝文を商推する、猶且其要領を得難しと稱す、何ぞ況や他邦の人士をや、謂はゆる靴を隔て、搔癢を搔くも當ならず、余淺舜臣の輯する所の崑玉集、木實開の著す所の玉壺詩稿を讀みて、張澹の藝文、一斑を管見す、但二集撰次無倫なく、且作者の郷貫を詳にせず、張人と他邦の人と、混淆分別す可からず、則余が論列する所、訛謬固より當さに多きに居るべきのみ。

余少年時、就友人案上、閱防邱詩選、收錄張藩諸家詩、今茫不記、募諸書肆、往往不知其名、殊爲悵悵、扶桑千家詩、載清水春流詩、亦未詳其人。

木公達、名實聞、今於張藩人士、無所通識、今據崑玉玉壺二集、蠡測之、公達在張藩、或是南面詞填、傲睨諸子者、詳其詩體、公達必謂吾能探開天之正源、駕嘉萬之逸格、殖之以廣博之學、出之以縱橫之才、意之所欲、筆必從之、噫、如此則南郭蛻岩、其猶病諸、公達無天受之妙、而強欲籠蓋萬象、是以其詩磊砢而無光澤、莽蒼而無倫理。

井鼎臣、本姓千村氏、號夢澤、玉壺詩稿載其詩六十餘首、大抵與公達、伯仲、如曰憑驪碑

余少年の時、友人の案上に就きて、防邱詩選を閲す、張藩諸家の詩を收録す、今茫として記せず、諸を書肆に募るに、往々其名を知らず、殊に悵悵たり、扶桑千家詩に、清水春流の詩を載す、亦未だ其人を詳にせず。

木公達、名は實聞、今張藩の人士に於て、通識する所なし、今崑玉玉壺の二集に據りて、之れを蠡測するに、公達張藩に在りて、或は是れ詞填に南面し、諸子に傲睨する者ならん、其詩體を詳にするに、公達必謂はん、吾能く開天の正源を探り、嘉萬の逸格に駕し、之れを殖するに、廣博の學を以てし、之れを出すに、縱橫の才を以てし、意の欲する所、筆必之れに従ふと、噫、此の如くならば、則南郭蛻岩も、其れ猶諸れを病めるか、公達天受の妙なく、而して強て萬象を籠蓋せんと欲す、是を以て其詩磊砢にして光澤なく、莽蒼にして倫理なし。

井鼎臣、本姓は千村氏、夢澤と號す、玉壺詩集に、其詩六十餘首を載す、大抵公達と伯仲す、憑驪碑を彈して泣き、宋玉秋に至りて悲むと、曰らるが如き、直に是れ豪求の標題、

「鉄泣、宋玉至秋悲、直是蒙求標題、且驪彈鉄歌、非泣也、此等之詩、宜無録、若夫崑玉集所載、喜今井生過訪五律、歲杪書懷七律、頗爲勻稱、要之急于名、而不違自擇耳。

千村力之、名諸成、號莪湖、又號笠澤、井鼎臣長子也、崑玉集所載、當少時作、然其天授才敏、大逾乃翁、五言、生白憐吾室、草玄避世人、雀羅將設處、鳳字執題門、溝水通籬後、炊烟橫竹邊、未值西歸日、空爲東武吟、客心驚短髮、官況戀扁舟、本識地難縮、逾增鄉國愁、七言、西風掃檣杪、如水、中夜懷人月在霄、病來空憑烏皮几、夢裡重鳴白玉珂、世上虛名任呼馬、塵中浪跡總亡羊、頻年風雨徒搔首、何地鶯花更解顏等、下字有法、語亦清麗、其餘

且驪は鉄を彈して歌ふ、泣くに非るなり、此等の詩宜しく録する無かるべし、若夫れ崑玉集に載する所、今井生の過訪を喜ぶ五律、歲杪書懷の七律は、頗勻稱と爲す、之れを要するに名に急にして、而して自ら擇ぶに違あらざるのみ。

千村力之、名は諸成、莪湖と號す、又笠澤と號す、井鼎臣の長子なり、崑玉集に載する所は、當に少年の作なるべし、然も其天授才敏、大に乃翁に逾ゆ、五言に、生白吾が室を憐み、草玄世人を避く、雀羅將に設けんとするの處、鳳字執か門に題せん、溝水籬後に通じ、炊烟竹邊に横はる、未だ西歸の日に値はず、空しく東武の吟を爲す、客心短髮に驚き、官況扁舟を戀ふ、本と地の縮め難きを識る、逾増す鄉國の愁と、七言に、西風檣を掃ふて秋水の如し、中夜人を懷ふて月霄に在り、病來空しく憑る烏皮几、夢裡重ねて鳴らす白玉珂、世上の虛名馬と呼ぶに任す、塵中の浪跡總べて亡羊、頻年風雨徒らに首を搔く、何れの地の鶯花か更に顔を解かん等、字を下だす法あり、語も亦清麗、其餘絶句には、殊に佳なる者あり。

絶句、殊有佳者。

井出識明、名知亮、號鳳山、力之次弟、其曰醉後振衣花亂落、庭陰倚杖石崔嵬、移步山光生、杖屨倚樓海色映、衣襟病來耽、句瘦逾甚、醉後發狂意却寬、才調雁行伯氏、崑玉集、載季弟居卿幼時詩、鼎臣有此三子、自足烜赫藝苑。

木君恕、名貞寬、號蓬萊、尾張人、嘗客遊京師、後赴東都、講說爲業、其詩較之公達、鼎臣、頗占地步、而雋句警聯亦復不多、若夫崑玉集所載、中秋無月云、金莖雲黑光猶動、紫陌燈明夜未深、聲華可挹、但金莖、漢武所設、我邦無此、或曰唐明詩中、多用金莖、用之何害、殊不知唐玄宗明世宗、酷好神仙、詩人假借、以

井出識明、名は知亮、鳳山と號す、力之の次弟なり、其醉後衣を振へば花亂落、庭陰杖に倚りて石崔嵬、歩を移せば山光杖屨に生じ、樓に倚れば海色衣襟に映す、病來句に耽りて瘦する逾甚し、醉後狂を發して意却て寬しと曰ふ、才調伯氏に雁行す、崑玉集に、季弟居卿の幼時の詩を載す、鼎臣此の三子あり、自ら藝苑に烜赫するに足らん。

木君恕、名は貞寬、蓬萊と號す、尾張の人、嘗て京師に客遊す、後東都に赴き、講說を業と爲す、其詩之れを公達、鼎臣に較れば、頗地步を占む、而も雋句警聯も、亦復多からず、若夫れ崑玉集に載する所、中秋無月に云ふ、金莖雲黒くして光猶動き、紫陌燈明にして夜未だ深からずと、聲華挹む可し、但金莖は漢武の設くる所、我邦此れなし、或は曰、唐明の詩中、多く金莖を用ふ、之れを用ふるも何ぞ害あらんと、殊に知らず、唐の玄宗、明の世宗、酷神仙を好む、詩人假借し、以て時事を詠する者、此等の事、余授業編に於て、已に之れを詳論せり。

詠時事者、此等之事、全於授業篇已詳論之、
 沖野孝寬、號南溟、田中尙章、名采蕙、號雁宕、
 晁涵德、名文淵、號玄洲、清水彥八、名虎、賀安
 長、號精齋、五人竝張藩人、其詩、見熙朝文苑
 者、不過一二首、姑錄其姓名、以備重考。

松秀雲、亦張藩人、熙朝文苑載其詩七首、頃
 日大江稗主、刻玄圃集、贈余一部、有秀雲序、
 斯知其人無恙、老益把弄翰墨。

崑玉、玉壺二集、撰次無倫、余已前論、其張人
 與他邦人、相混不可分別、則姑從二集所錄、
 以論及一二、若夫張人與不張人、姑置之耳、
 伊長卿、名章、號腔桐、玉壺詩稿載其詩二首、
 歲晚詩、井良重七律、雖剽竊嘉靖七子、而漸
 近自然、但第五句、芳樽萬里河山遼、不免日

沖野孝寬、南溟と號す、田中尙章、名は采蕙、雁宕と號す、晁
 涵德、名は文淵、玄洲と號す、清水彥八、名は虎、賀安長、精
 齋と號す、五人竝に張藩の人、其詩、熙朝文苑に見ゆる者
 一二首に過ぎず、姑く其姓名を録し、以て重考に備ふ。

松秀雲、亦張藩の人、熙朝文苑に、其詩七首を載す、頃日大
 江稗主、玄圃集を刻し、余に一部を贈らる、秀雲の序あり、
 斯に知る其人恙なく、老て益翰墨を把弄するを。

崑玉、玉壺の二集、撰次無倫なきは、余已に前に論ず、其張人
 と他邦人と、相混じて分別す可からず、則姑く二集の錄
 する所に從ひ、以て一二を論及す、若夫張人と張人な
 らざると、姑く之れを置くのみ、伊長卿、名は章、腔桐と號
 す、玉壺詩稿に其詩二首を載す、歲晚、井良重に寄する七
 律、嘉靖七子を剽竊すと雖、而も漸く自然に近し、但第五
 句の、芳樽萬里河山遼たりと、日は上る文王の謗を免れ

上文王之謗、若作芳樽一夕、則佳矣、又贈人小詩、東海多秋思、況逢夜色新、遙知奠水月、不照去年人、雖無奇警、亦自可誦、德良弼、春城寓目、華瞻可觀、澤元、真寄、蘭、阜、夢、澤、二子、七律、頗能結構、又、留別諸子、絕句云、落魄無人不可憐、一句、太是悲愴、惜乎結不成語、岡長祐、咏雪云、一庭地白非關月、萬樹花明不待春、興象甚肖、惜乎首尾不稱、福昌言、九日作、中南來、池亭五律、尾有孚、七絕二首、竝占得地步、其餘天信、景磯、長博、鈴子、都嶺、文谿、出敬、近野、俊明、關、德、亮、元、文、邦、藤、本、弘、江、子、永、林、文、清、喬、惟、寧、葉、日、洞、山、泰、信、山、芝、岩、池、子、圭、仲、文、輔、井、天、目、倉、立、大、關、範、良、須、玉、瀨、谷、秀、實、丁、忠、利、竹、山、東、馬、意、信、村、馬、六、筒、恆

六

す、若し芳樽一夕と作さば則佳ならん、又人に贈る小詩に、東海秋思多し、況や秋色の新なるに逢ふをや、遙に知る奠水の月、去年の人を照らすと、奇警なしと雖、亦自ら誦す可し、德良弼の春城寓目は、華瞻観る可し、澤元言の、蘭阜夢澤二子に寄する七律は、頗能く結構す、又諸子に留別する絶句に云ふ、落魄人として憐む可からざるはなしの一句、太だ是れ悲愴惜らくは結語を成さず、岡長祐の咏雪に云ふ、一庭地白し月に關するに非ず、萬樹花明にして春を待たずと、興象甚肖たり、惜らくは首尾稱はず、福昌言の九日の作、中南來の池亭の五律、尾有孚の七絶二首、竝に地步を占め得たり、其餘天信、景磯、長博、鈴子、都嶺、文谿、出敬、近野、俊明、關、德、亮、元、文、邦、藤、本、弘、江、子、永、林、文、清、喬、惟、寧、葉、日、洞、山、泰、信、山、芝、岩、池、子、圭、仲、文、輔、井、天、目、倉、立、大、關、範、良、須、玉、瀨、谷、秀、實、丁、忠、利、竹、山、東、馬、意、信、村、馬、六、筒、恆、森、東、發、蒲、樞、聰、陸、知、規、吉、大、繁、田、仲、文、源、基、長、源、長、英、平、蘭、溪、等、其中玉石の辨なきにあらず、而も余未だ其人を詳にせず、且二集の載する所、人ごと

徳森東發、蒲梧、陸知規、吉大掣、田仲文、源
基長、源長英、平蘭溪等、其中不無玉石之辨、
而余未詳其人、且二集所載、人不過一二篇、
則亦俟重考云。

崑玉玉壺二集所載、僧詩亦夥、今論其一二、
僧寶性、寄夢澤云、伏枕青春日、聞君解綬歸、
鳥窺移柳地、童待映花扉、採勝支公馬、舞雩
曾點衣、昨宵芳草夢、相引到漁磯、頗華暢矣、
興善寺分韻作亦佳、據二詩、則足稱方外作
家。

僧宜牧詩、嘉靖七子之末響、極意勦襲、然其
中自有佳者、宿圓通寺云、古寺鐘聲度翠微、
階庭柏葉亂斜暉、巖中說偈花爲雨、定裡忘
機月照衣、巢鳥閑窺雙樹入、香烟細結五雲

に一二篇に過ぎず、則亦重考を俟つと云ふ。

崑玉玉壺二集の載する所、僧詩亦夥し、今其一二を論ず、
僧寶性の夢澤に寄するに云ふ、伏枕青春の日、聞く君が
綬を解きて歸るを、鳥は窺ふ柳を移すの地、童は待つ花
に映する扉、勝を探る支公の馬、舞雩曾點の衣、昨宵芳草
の夢、相引て漁磯に到らんと、頗華暢なり、興善寺分韻の
作も亦佳なり、二詩に據れば、則方外の作家と稱するに
足る。

僧宜牧の詩は、嘉靖七子の末響、意を極めて勦襲す、然も
其中自ら佳なる者あり、圓通寺に宿するに云ふ、古寺の
鐘聲翠微を度る、階庭の柏葉斜暉に亂る、巖中に偈を説
けば花雨と爲り、定裡機を忘れて、月衣を照す、巢鳥閑に
雙樹を窺ふて入り、香烟細に五雲を結んで飛ぶ、上方遙

飛、上方遙出藤蘿外、杖錫探奇信宿歸、首尾
勻稱、是稱合作。

僧惠仁詩、崑玉集載之、味多、其京館雜詩中
云、晚來比屋絃歌起、疑是諸天贊我聲、可謂
狂妄、又曰、此中無不有、唯少天女侍、雖川維
摩事、亦復甚矣、近時學者、動曰、僧詩不可有
香火氣、余則曰、僧詩不可有香火氣也、又不
可無也、蓋有香火氣、以法害詩、無香火氣、以
詩累德、僧家學詩者、宜了得此義。

尾張東鄰、參河、在參河、則扶桑千家詩、載村
田通信詩、余未詳其人、近時、源京國、仕刈谷
侯、既已前錄、岡崎侯儒學、秋子帥、名以正、所
著有澹園初稿、餘未見之、又田原侯太夫、雅
子方、有爽鳩詩稿、子方姓鷹見、省見爲鷹、又

に出づ藤蘿の外、杖錫奇を探りて信宿して歸ると、首尾
勻稱、合作と稱するに足る。

僧惠仁の詩、崑玉集之れを載する、殊に多し、其京館の雜
詩中に云ふ、晚來比屋絃歌起、疑らくは是れ諸天我を
贊するの聲」と、狂妄と謂ふ可し、又曰、此中有りざるな
し、唯天女の侍するを少くと、維摩の事を用ふと、雖亦復
甚し、近時の學者、動すれば曰、僧の詩、香火の氣ある可か
らずと、余則曰、僧の詩、香火の氣ある可からざるなり、又
無かる可からざるなり、蓋、香火の氣あれば、法を以て詩
を害す、香火の氣なければ、詩を以て德を累す、僧家詩を
學ぶもの、宜しく此の義を了得すべし。

尾張は東參河に鄰る、參河に在ては、則扶桑千家詩に、村
田通信の詩を載す、余未だ其人を詳にせず、近時、源京國
刈谷侯に仕ふ、既に已に前に錄す、岡崎侯の儒學、秋子帥
名は以正、著はす所澹園初稿あり、余未だ之を見ず、又田
原侯の太夫、雅子方に、爽鳩詩稿あり、子方姓は鷹見、見を
省きて鷹と爲す、又鷹の字の不雅なるを惡み、更に雅姓
と爲す者、名は正長、爽鳩は其號、謂て澹園諸子と歎す、是

惡鷹字不雅、更爲雍姓者、名正長、爽鳩其號、
 嘗與護園諸子歡、是以詩名著聞、余謂護園
 諸子、除服子遷外、孰不勦竊七子者、而莫甚
 于子方、如曰薄官天涯耽濁酒、故人江上感
 綈袍、比比是也、要之以藩國太夫、有此文雅、
 可稱耳。

從參河以東五州爲遠爲駿爲豆爲相、文人
 才子、意謂當衆、余也孤陋、無所聞見、則不得
 不徵史之闕文、上野下野、上總下總、安房五
 州猶夫五州。

安房東爲常陸、常藩、當中納言義公時、儒術
 文藝之盛、至今人稱東平之賢、無俟余言、當
 時諸子詠言、必有可觀可傳者、但常藩與京
 師相距隔遠、所謂風馬牛不相及者、茫乎不

を以て詩名著聞す、余謂ふに護園の諸子、服子遷を除く
 外、孰か七子を勦竊せざる者あらん、而も子方より甚し
 きはなし、薄官天涯濁酒に耽り、故人江上綈袍に感ずと
 曰ふが如き、比々是れなり、之れを要するに藩國の太夫
 を以て、此の文雅あるは稱すべきのみ。

參河より以東の五州、遠たり駿たり豆たり相たり、文人
 才子、意謂ふに當さに衆かるべし、余や孤陋聞見する所
 なし、則史の闕文に徵はざるを得ず、上野下野、上總下
 總、安房の五州は猶夫の五州のごとし。

安房の東を常陸と爲す、常藩は中納言義公の時に當り、
 儒術文藝の盛なる、今に至りて人、東平の賢を稱す、余が
 言を俟つなし、當時諸子の詠言、必觀る可く傳ふ可き者
 あらん、但常藩京師と相距る隔遠、謂はゆる風馬牛相及
 ばざる者、茫乎として考索す可からず、若夫れ朱子論は

可考索。若夫米子瑜、余已前錄、扶桑千家詩、載安積覺、内藤貞顯、大串元善、青野叔元、一松拙忠、石井收、内藤延春、安藤爲明、名越正通、人見野傳、清水三世、相田信也、白井信胤等、十三人、同咏菊詩各一首、蓋陪宴授簡之作、一時文雅可想、安積覺、字子先、夙聞其名、所著有澹泊文集、余未見之、其餘未詳其人、又鶴飼金平、栗山伯立、森尙謙三人、亦常藩學職、金平名信勝、石齋長子云。

常陸東北爲陸奥、陸奥大國、大小藩府、無慮二十、而仙臺爲大、余聞藩中以儒業世祿者有十數人、而其文藻無所聞見、會津亦大藩、往時山崎闇齋講學其地、至今人重經業、如其詩章、亦無所聞見、森山、常藩支封、夙以好

余已前に録す、扶桑千家詩に、安積覺、内藤貞顯、大串元善、青野叔元、一松拙忠、石井收、内藤延春、安藤爲明、名越正通、人見野傳、清水三世、相田信也、白井信胤等十三人、同じく菊を咏する詩各一首を載す、蓋陪宴授簡の作ならん、一時の文雅想ふ可し、安積覺、字は子先、夙に其名を聞く、著す所澹泊文集あり、余未だ之れを見ず、其餘は未だ其人を詳にせず、又鶴飼金平、栗山伯立、森尙謙の三人、亦常藩の學職、金平名は信勝、石齋の長子と云ふ。

常陸の東北を陸奥と爲す、陸奥は大國なり、大小の藩府、無慮二十、而して仙臺を大なりと爲す、余聞く藩中儒業を以て祿を世にする者、十數人あり、而して其文藻は聞見する所なし、會津も亦大藩なり、往時山崎闇齋其地に講學す、今に至りて人經業を重んず、其詩章の如きは亦聞見する所なし、森山は常藩の支封、夙に好學を以て聞ゆ、藩中或は作家多からん、若夫れ本朝詩叢は、盛學と謂

學聞、藩中或多作家、若夫本朝詩纂、可謂盛舉、余嘗過書肆、暫時寓目、其所收載、京攝作者、殊有可笑、所謂鸞鳳伏竄、鳴臯翔翔、不啻也、亦唯距京攝絕遠、無由物色耳、今余論及關東、胡以異此、爲之可發大噓、松前僻在海外、與蝦夷接壤、或曰、陋如之何、不知其地富庶、政寬俗朴、爲一樂土、往者富仲達、傳松前侯命、請詩於余、又松前醫生來學京師、染指藝苑者、前後不絕、則其地頗嚮文雅、可知也、從陸奥、傍北海、而西、則有出羽、有越後、二州亦廣大、而其藝業、未有所徵、佐渡固亡論耳、信濃、在越後南、諏訪侯好文藝、讀服子遷集知之、謂下必有甚焉者、亦俟異日考索、信地以山稱焉、唯松本廓然矣、乃有湖松江在、松

ふ可し、余嘗て書肆に過ぎり、暫時目を寓す、其收載する所京攝の作者、殊に笑ふ可きあり、謂はゆる鸞鳳伏竄し、鳴臯翔翔も嘗ならざるなり、亦唯、京攝を距る絶遠、物色に由なきのみ、今余關東に論及する、胡ぞ以て此れに異ならん、之れが爲に、大噓を發す可し、松前は海外に僻在し、蝦夷と壤を接す、或は曰、陋き之れを如何と、知らず其地富庶、政寬に俗朴に、一樂土たるを、往者富仲達、松前侯の命を傳へ、詩を余に請ふ、又松前の醫生、來りて京師に學び、指を藝苑に染むる者、前後斷えず、則其地頗文雅に嚮ふ、知る可きなり、陸奥より北海に傍ふて西すれば、則出羽あり、越後あり、二州も亦廣大、而して其藝業未だ徵する所あらず、佐渡は固より論する亡きのみ。

信濃は、越後の南に在り、諏訪侯の文藝を好むは服子遷の集を讀みて之れを知れり、謂ふに下必甚しき者あらん、亦異日の考索を俟つ、信の地山を以て稱す、唯松本は廓然たり、乃湖松江の在るあり、松江姓は多湖、字は玄岱、

江、姓多湖、字玄岱、少時從學桂義樹、能詩能文、兼工臨池之伎、松江父、字元泰、蛻岩萬菴集中、稱湖栢山是也、栢山父稱玄甫、至松江三世、以醫仕松本侯、而專以儒術文藝著稱焉、松江尙氣節、慚食糲於方伎、侯察其意、今春使松江嗣子玄室代松江爲待醫、更命松江爲儒學教授、蓋特恩云。

飛驒、在信之西北、在萬山中、地出良材、如高山府、號爲殷富、俗頗事伎藝、而學事無聞、東涯盍簪錄曰、先人講學時、弟子無國不至、唯飛驒、佐渡、壹岐、三州人不至、其土風可知也、然客歲余遊越中、高山人某、因富山波邊公庸請詩於余、斯知其土人、近稍嚮文學、飛驒之北卽越中云。

少時桂義樹に従學す、詩を能くし文を能くし、兼て臨池の伎に工なり、松江の父、字は元泰、蛻岩萬菴の集中、湖栢山と稱するは是れなり、栢山の父玄甫と稱す、松江に至りて三世、醫を以て松本侯に仕ふ、而して專儒術文藝を以て著稱す、松江氣節を尙び、糲を方伎に食むを慚づ、侯其意を察し、今春松江の嗣子玄室をして松江に代りて待醫と爲らしむ、更に松江に命じて儒學教授と爲す、蓋特恩なりと云ふ。

飛驒は、信の西北にあり、萬山の中に在り、地良材を出す高山府の如き、號して殷富と爲す、俗頗伎藝を事とす、而して學事聞ゆるなし、東涯の盍簪錄に曰、先人講學の時、弟子國として至らざるはなし、唯、飛驒、佐渡、壹岐の三州の人に至らずと、其土風知る可きなり、然も客歲余越中に遊ぶ、高山の人某、富山の波邊公庸に因て、詩を余に請ふ、斯に知る其土人、近ろ稍文學に嚮ふを、飛驒の北は卽越中と云ふ。

越中都會有高岡、有富山、富山賀藩支封、閭閻之富、有志學者、往芳野于鶴、遊學京師、時問、字余弟、厥後、西野士明、因于鶴、亦謁余弟、客歲之春、佐藤季縷、遊京、數過余家、聞余好山水、盛說立山奇絕、遂以秋九月、余遊富山、爾五十日、季縷名樸、詩才絕人、惜乎不甚好學、不讀書焉、余謂季縷曰、子如讀書三年、可爲北陸道第一才子、季縷曰、小子心期海內、何論北陸、彼也、少年逸氣、漫爲大言、恐終不讀書、季縷詩、山居云、結廬白雲裡、白日亦堪眠、啼鳥時驚夢、山花落枕邊、又過岡子龍、舊居有感云、春林鳥返夕陽斜、終日空關叔夜家、唯、有鄰人吹玉笛、荒園滿地落梅花、季縷伯父、佐伯子桂、名望、往爲富山侯文學、已沒

越中の都會に、高岡あり、富山あり、富山は賀藩の支封閭閻の富學に志す者あり、往に芳野鶴子、京師に遊學す、時に字を余か弟に問ふ、厥後西野士明、于鶴に因て、亦余が弟に謁す、客歲の春、佐藤季縷、京に遊び數日、余が家に過ぎる、余が山水を好むと聞き、盛んに立山の奇絶を説く、遂に秋九月を以て、余富山に遊ぶ、留まる五十日、季縷名は樸、詩才人に絶す、惜らくは、甚學を好まず、書を讀まず、余季縷に謂ふて曰、子如し書を讀む三年ならば、北陸道第一の才子と爲るべしと、季縷曰、小子心海内を期す、何んぞ北陸を論ぜん、彼は少年逸氣、漫に大言を爲す、恐くは終に書を讀まざらん、季縷の詩の、山居に云ふ、廬を結ぶ白雲の裡、白日亦眠るに堪へたり、啼鳥時に夢を驚かし、山花枕邊に落つと、又岡子龍の舊居を過ぎて、感あり云ふ、春林鳥返りて夕陽斜なり、終日空しく關す叔夜の家、唯、鄰人の玉笛を吹くあり、荒園滿地落梅花と、季縷の伯父、佐伯子桂、名は望、往に富山侯の文學たり、已に沒すと云ふ、士明天授季縷に及ばず、而して驅勉書を讀み、思を

云、士明、天授不及季、獲而暈、勉讀書、潛思敲推、不懈有成。

能登、在越中西北、近時僧環空、出自其地、爲僧金龍徒弟、從師在京師、弱齡好吟哦、頗有詩才、一朝短折、有遺稿在。

加賀、在越中西、余遊越中、路出金澤、泱泱大都、會哉、無物不有、如其藝文、但未遑考、往時木靖、恭室滄浪、竝爲賀藩文學、已前錄扶桑千家詩、載平岩仙桂詩、余未詳其人。

越前、在加賀西南、自余先大父、以及兄弟、辱越藩文學、余恐事涉不敬、因不論列、而余弟數、稱清圓寺塾上人、信義粹然、且好詩、越前南爲美濃州。

在美濃、則岐阜最稱富庶、三十年前、學詩於

敲推に潛む、懈らざれば成るあらん。

能登は、越中の西北に在り、近時僧環空、其地より出づ、僧金龍の徒弟と爲り、師に従ひて京師に在り、弱齡吟哦を好む、頗詩才あり、一朝短折す、遺稿の在るあり。

加賀は、越中の西に在り、余越中に遊ぶ、路金澤に出づ、泱泱たる大都なるかな、物として有らざるはなし、其藝文の如きは、但未だ考ふるに遑あらず、往時木靖、恭室滄浪、竝に加藩の文學と爲る、已に前に録す、扶桑千家詩に平岩仙桂の詩を載す、余未だ其人を詳にせず。

越前は、加賀の西南に在り、余の先大夫より、以て兄弟に及び、越藩の文學を辱ふす、余事の不敬に涉るを恐れ、因て論列せず、而して余が弟數、清圓寺の塾上人の信義粹然、且詩を好むを稱す、越前の南を美濃州と爲す。

美濃に在りては、則岐阜最富庶と稱す、三十年前、詩を余

余者、有十數人、迨余爲吏職、都絕音耗、唯山田大藏一人、通問至今、其人於詩頗有見解、時見合調、大垣亦一都會、如守秀緯已前錄、又谷大齡、田吉記二人詩、見崑玉集、嶺三折、鈴木藤助二人詩、見熙朝文苑、竝美濃人云、美濃之西南爲近江。

近江文雅、必推彦藩、有龍草廬、野公臺、二人在、又往有澤村伯揚、雖其人沒、遺稿行世、伯揚名維顯、稱宮内、號琴所、享保中人、其詩、雖乏藻繪之美、鏗鏘之音、而清澹雅整、足稱作家、五言律最當行矣、早行中聯云、林聒棲禽散、江平宿霧流、鐘殘黃葉寺、露滿白蘆洲、江之森山、有宇彥章、時時往來京師、名聲顯著、日野邑、則有建達夫、少時頗稱才穎、而數奇

に學ぶ者、十數人あり、余の吏職たるに迫り、都て音耗を絶つ、唯山田大藏一人、通問今に至る、其人詩に於て頗見解あり、時に合調を見る、大垣も亦一都會、守秀緯の如きは、已に前に録す、又谷大齡、田吉記の二人の詩、崑玉集に見ゆ、嶺三折、鈴木藤助二人の詩、熙朝文苑に見ゆ、竝に美濃人と云ふ、美濃の西南を近江と爲す。

近江の文雅、必彦藩を推す、龍草廬、野公臺、二人の在るあり、又往に澤村伯揚あり、其人沒すと雖、遺稿世に行る、伯揚名は維顯、宮内と稱し、琴所と號す、享保中の人、其詩、藻繪の美、鏗鏘の音に乏しと雖、而も清澹雅整、作家と稱するに足る、五言律最當行なり、早行の中聯に云ふ、林聒くして棲禽散じ、江平にして宿霧流る、鐘は殘す黃葉の寺、露は滿つ白蘆の洲と、江の森山に、宇彥章あり、時々京師に往來し、名聲顯著なり、日野邑には、則建達夫あり、少時頗才穎と稱す、而も數奇、轆轤口を方伎に糊す、遂に吟哦を廢す、下迫村には、則鈴木伯華あり、仲素が兄と爲す、好んで書を読み、少時義兄青郊先生に従學す、辯博且詩

轅軻糊口方伎、遂廢吟哦、可惜。下泊村、則有
 柚木伯華爲仲素兄、好讀書、少時從學、義兄
 青郊先生辯博且能詩。

若狹在近江西北、千家詩載宮腰歷齋詩、余
 不詳其人、厥後有小栗宿臯、在小濱、棗齋一
 鄉文雅、余嘗覽崑玉玉壺二集所載、佐元凱
 者詩甚佳、因詳其人、乃知其爲鶴臯、蓋鶴臯
 少時有故客寓于張、爾時變姓名稱佐佐木
 才八云、其詩雖蹈襲嘉靖七子、而天授自富、
 鑿鍾有法、是以往往有合調、登後瀨山云、峯
 回徑仄石梯懸、杖屨飄飄度碧天、萬頃海波
 涵越迥、兩行驛樹入江蓬、孤城鐘動寒雲外、
 極浦鳥還落日邊、臨眺自堪銷世慮、何勞燒
 煉學登仙、小濱以鶴臯故、至今言詩者衆、土

を能くす。

若狹は、近江の西北に在り、千家詩に、宮腰歷齋が詩を載
 す、余其人を詳にせず、厥後小栗和十あり、小濱に在りて、
 一郷の文雅を彙簡す、余嘗て崑玉、玉壺の二集の載する
 所を覽るに、佐元凱といふ者、詩甚佳、因て其人を詳にす
 乃其鶴臯たるを知る蓋鶴臯少時故ありて張に客寓す
 爾時姓名を變じ、佐々木才八と稱すと云ふ、其詩嘉靖七
 子を蹈襲すと雖、而も天授自ら富み鑿鍾法あり、是を以
 て往々合調あり、後瀨山に登るに云ふ、峯回り徑仄ちて
 石梯懸る、杖屨屢々碧天を度る、萬頃の海波越を逝して
 迥、兩行の驛樹江に入りて連なる、孤城鐘は動く寒雲の
 外、極浦鳥は還る落日の邊、臨眺自ら世慮を銷するに堪
 へたり、何ぞ勞せん煉登仙を學ぶをと、小濱は鶴臯を
 以ての故に、今に至りて詩を言ふ者衆し、土の豪組屋と

之豪稱組屋者、數百年之家、今當戶者名翰、字子鳳、博涉群籍、詩才殊雄、其人亦奇、又吹田孝、詩於余、歲時不懈、漸入佳境、若狹山、南爲丹波。

丹波則扶桑千家詩載、人見卜幽詩、未詳其人、近時龜山侯太夫、多好文雅、若夫松崎白圭、詳于服子遷文、今嗣職者君修、文辭益蔚、名聲煥發、篠山有儒學關士濟。

丹後則宮津水上士遜、最可傳者、子遜名謙、自幼好讀書、能詩能書、其人篤恭、季世無倫、今既八十餘歲、余恐子遜操行終泯沒、近爲著傳畧、又有三上宗純、爲士遜詩友、亦七十余云。

自丹後以西、但、因、伯、雲、石、隱、六州藝文、未有

稱する者、數百年の家なり、今戸に當る者名は翰、字は子鳳、群籍に博涉し、詩才殊に雄なり、其人も亦奇なり、又吹田定孝、詩を余に學ぶ、歲時懈らず、漸く佳境に入る、若狹の西南を丹波と爲す。

丹波は、扶桑千家詩に、人見卜幽の詩を載す、未だ其人を詳にせず、近時龜山侯の太夫、多く文雅を學ぶ、若夫れ松崎白圭は服子遷の文に詳なり、今職を嗣ぐ者は君修、文辭益と蔚、名聲煥發、篠山には、儒學關士濟あり。

丹後には、則宮津の水上士遜、最傳ふ可き者、子遜名は謙、幼より讀書を好み、詩を能くし、書を能くす、其人篤恭、季世倫なし、今既に八十餘歲、余子遜の操行終に泯沒せんことを恐れ、近ろ爲に傳略を著す、又三上宗純あり、士遜の詩友たり、亦七十餘なりと云。

丹後より以西、但、因、伯、雲、石、隱の六州の藝文、未だ考ふ

所考、雲州桃井源藏著世說考、引證精當可嘉近覽其絕句數首詩或非長技。

山陰山陽二道、到長門而盡、長門、南北西三面濱海、縣次公以來、以文學聞、次公已前錄服子遷所撰、周南墓碑中、列叙門人、曰若山子濯、田望之、津士雅、倉彥平、藤子夢、田子恭、仲子路、魯子泉、林義卿、瀧彌八、縣魯彥、秦貞父、彬、彬輩出、義卿、夙講學京師、彌八今在東都、聲名烜熾、士雅、子夢、前卷已論及、子濯、姓山根、名清、號華陽、子遷集中、褒稱特至、護園錄稿、載其詩、如鶴臺春望七律、殊雋爽矣、其男秦德、客歲遊京師、因武南山見余、頗能論詩、自運亦可觀、爾時謀刻乃翁集、望之彥平、子恭、子路、子泉、魯彥、貞夫、未詳其人、又左勃

る所あらず、雲州の桃井源藏世說考を著す、引證精當嘉す可し、近る其絶句數首を覽る、詩或は長技に非ず。

山陰山陽の二道、長門に到りて盡く、長門は南北西の三面海に濱す、縣次公より以來、文學を以て聞ゆ、次公は己に前に録す、服子遷の撰する所、周南墓碑中に、門人を列叙す、曰、山子濯、田望之、津士雅、倉彥平、藤子夢、田子恭、仲子路、魯子泉、林義卿、瀧彌八、縣魯彥、秦貞父が若き、彬彬輩出すと、義卿は夙に學を京師に講ず、彌八は今東都に在り、聲名烜熾、士雅、子夢、前卷已に論及す、子濯姓は山根名は清、華陽と號す、子遷の集中褒稱特に至る、護園錄稿に、其詩を載す、鶴臺春望七律の如き、殊に雋爽なり、其男秦德、客歲京師に遊ぶ、武南山に因て余に見ゆ、頗能く詩を論ず、自運も亦觀る可し、爾時乃翁の集を刻せんことを謀る、望之、彥平、子恭、子路、子泉、路彥、貞夫、未だ其人を詳にせず、又左勃、眞、晁世美の二人、儒林姓名錄に見ゆ、又扶桑千家詩に、山田原欽の詩を載す。

眞鬼世美二人見儒林姓名錄、又扶桑千家詩、載山田原欽詩。

從長門逾海抵豊前州、土伯擘石麟洲、前錄豊後莊子謙亦前錄、豊後而筑前、而筑後、扶桑千家詩、收錄二州人士、殊多、竹田春菴、黑田一貫、柴田風山、鶴原君玉、萩原隆亮、林恆德、林重一、竝前州人、伊藤愼菴、伊福勝之、村井定菴、松下雪堂、竝後州人、若夫貝原氏之於前州、安藤氏之於後州、亦已前錄、又前州神屋亨、著歸鞍吟草、其詩雖多、蕪累、而議論昂昂、定非碌碌士矣。

長崎隸肥前州、往有林道榮、劉宣義、僧玄光、僧獨立、僧道本、僧玄海等、有詩見諸選、道本清人、隨緣到此、所著有蕭鳴草、扶桑名勝詩

長門より海を逾えて、豊前の州に抵る、土伯擘石麟洲前に録す、豊後の莊子謙も亦前に録す、豊後より而して筑前而して筑後、扶桑千家詩に二州の人士を收録する、殊に多し、竹田春菴、黒田一貫、柴田風山、鶴原君玉、萩原隆亮、林恆德、林重一、竝に前州の人なり、伊藤愼菴、伊福勝之、村井定菴、松下雪堂、竝に後州の人なり、若夫貝原氏の前州に於ける、安藤氏の後州に於ける、亦已に前に録す、又前州の神屋亨、歸鞍吟草を著す、其詩蕪累多しと雖、而して議論昂々、定めて碌々の士に非ず。

長崎は、肥前の州に隸す、往に林道榮、劉宣義、僧玄光、僧獨立、僧道本、僧玄海等あり、詩ありて諸選に見ゆ、道本は清人なり、隨緣此に到る、著す所蕭鳴草あり、扶桑名勝集に南部昌明の長崎八景の詩を載す、余其人を詳にせず、或

集、載南部昌明、長崎八景詩、余不詳其人、或是草壽兄弟、近時高君秉、詞鋒頗銳、嘗東遊京師、締交諸文士、西歸後、作七言律八首、併書寄余、余心許和答而未果、亡何君秉沒焉、君秉本姓渡邊、名舜、號陽谷。

肥後近時有藝文之稱、秋玉山、名聲煥發、詩才可嘉、又、藪震菴、墨君徹、水屏山、水博泉、四人、見儒林姓名錄、余未詳其人。

薩摩州、及隅日二州、無考、對馬學事、前卷論及。

自海西九州、沿南海而東、歷長門、周防、到安藝、藝之都會曰廣島、大藩也、其文學、二屈氏、及松原一清、竝已前錄、又、味允明、見姓名錄、其人名虎號立軒、所著有問槎錄、云、近時竹

は是れ草壽が兄弟ならん、近時高君秉、詞鋒頗鋭なり、嘗て東、京師に遊び、諸文士に締交す、西歸の後、七言律八首を作り、書を併せて余に寄す、余心に和答を許して而して未だ果さず、何もなく君秉没す、君秉本姓は渡邊、名は舜、陽谷と號す。

肥後は、近時藝文の稱あり、秋玉山、名聲煥發、詩才可し、又、藪震菴、墨君徹、水屏山、水博泉の四人、儒林姓名錄に見ゆ、余未だ其人を詳にせず。

薩摩州、及び隅日の二州考ふるなし、對馬の學事は、前卷に論及せり。

海西の九州より、南海に沿ふて東し、長門、周防を歴て安藝に到る、藝の都會を廣島と曰ふ、大藩なり、其文學には、二屈氏、及び松原一清、竝に已に前に録す、又、味允明は、姓名錄に見ゆ、其人名は虎、立軒と號す、著す所問槎錄ありと云ふ、近時竹原邑に、頼惟寛あり、才子の稱あり、今浪華

原邑、有賴惟寬、有才子稱、今住浪華、本莊邑、有平賀中南、在京師講說、本莊邑北有佛通寺、奇巖環寺、地極幽遠、往有僧寰海、好詩、偶已寂、有遺稿二卷、閱之疵謬殊多、蓋雖有資才、師承不正、致此鹵莽、可惜。

三原、雖在備後、入藝侯封內、山海環抱、殊覺形勝、頗有好詩者、芥彦章往遊、其地、尋余遊嚴島、彦章貽書三原諸子、爲余西道主人、宇士龍、安子桓、川則之、敬待最至、三子好詩、士龍最錚錚矣、三原東有尾道、一名珠浦、地當海陸之衝、人烟稠密、多素封家、而文雅無聞、近有松本達夫者、子桓姻姪也、請賀島記於余、其人少時受學東涯、文辭則余不知焉。

備中文藝、余未考之、近總社邑人藤野如水、

に住す、本莊村に平賀中南あり、京師に在りて講説す、本莊邑の北に佛通寺あり、奇巖寺を環る、地極めて幽遠なり、往に僧寰海あり、詩偈を好む、已に寂す、遺稿二卷あり、之れを閱するに疵謬殊に多し、蓋詩資ありと雖、師承正からず、此の鹵莽を致す、惜む可し。

三原は、備後に在りと雖、藝侯の封内に入る、山海環抱、殊に形勝を覺ゆ、頗詩を好む者あり、芥彦章、往に其地に遊ぶ、尋で余嚴島に遊ぶ、彦章書を三原の諸子に貽り、余が西道の主人と爲る、宇士龍、安子桓、川則之、敬待最至る、三子詩を好む、士龍最錚々たり、三原の東に尾道あり、一名は珠浦、地海陸の衝に當り、人烟稠密、素封家多し、而して文雅は聞ゆる無し、近る松本達夫といふ者あり、子桓の姻姪なり、賀島の記を余に請ふ、其人少時學を東涯に受く、文辭は則余知らざるなり。

備中の文藝、余未だ之れを考へず、近る總社邑の人藤野

遊京師、數過余家、爲人短小、黑瘦、口訥、訥焉見之、如無才者、會晤再三、漸測其所蘊、殊爲該博、其詩雖乏華藻、意義自全、特怪西歸後、寧乎無音問。

備前、往時熊澤了介、爲政其國、舉世所知、余嘗閱松原一清、出思稿、其牛臚泊舟詩、有漁家兒女亦知字、笑將孝經教老翁句、一時教化可想、至今泮宮之設、尙有典刑云、若夫三宅氏、已前錄、崑玉集、載近藤士業詩、殊多、士業名篤、備前學職云、又湯之祥、井子叔、二人竝以文學仕其國、之祥名元禎、子叔名通熙、備前北有美作州、文雅無聞、東則爲播磨。

播州藩府、西近備前者曰赤穂、赤松良平、以詩雄視其鄉、赤穂東北有龍野、和田宗允、爲

如水、京師に遊ぶ數、余が家を過ぐ、人と爲り、短小黒瘦、口訥々たり、之れを見るに、才なき者の如し、會晤再三、漸く其所蘊を測るに、殊に該博たり、其詩華藻に乏しと雖、意義自ら全し、特に怪む西歸の後、寧乎として音問なし、

備前、往時熊澤了介、政を其國に爲す、世を擧げて知る所、余嘗て松原一清の出思稿を閲す、其牛臚舟を泊する詩に、漁家の兒女も亦字を知る、笑つて孝經を將て老翁に教ふの句あり、一時の教化想ふ可し、今に至りて泮宮の設、尙典刑ありと云ふ、若夫れ三宅氏は、已に前に錄す、崑玉集に、近藤士業の詩を載する、殊に多し、士業名は篤、備前の學職と云ふ、又湯之祥、井子叔、二人竝に文學を以て其國に仕ふ、之祥は名は元禎、子叔は名は通熙、備前の北に美作州あり、文雅聞ゆるなし、東は則播磨と爲す。

播州の藩府、西備前に近き者を赤穂と曰ふ、赤松良平、詩を以て其郷に雄視す、赤穂の東北に龍野あり、和田宗允、其儒學たり、文辭は聞ゆる無し、儒林姓名錄に川口子深

其儒學、文辭無聞、儒林姓名錄、以川口子深、爲姫路侯文學、名光遠、所著有斯文源流云、姫路東有麗川邑、邑有清田君履、名綏、號藍卿、余族也、既有學殖、又有文辭、恬不近名、人以長者稱、若夫赤石、梁蛻岩、以詩賦雄乎海內、前卷既詳論焉、赤石隔海、近對淡州云。

淡州航海達阿州、阿州學職有數人、柴野彥助有文辭、去年余弟祇役東都、屢相往來云、由岐浦有井河玄益、謹篤之士、詩文亦如其人、余弟詳錄於孔雀樓筆記、平島有島津琴王、時有詩筒寄余、阿州而讚州、扶桑千家詩、載阿部拙齋詩、近時高松侯文學、岡仲錫有文辭、玉壺詩稿、載其詩云、渺渺春波夕照微、白蘋風起鳥雙飛、曾攀楊柳江橋上、楊柳掛

を以て、姫路侯の文學と爲す、名は光遠、著す所斯文源流ありと云ふ、姫路の東に麗川邑あり、邑に清田君履あり、名は綏、藍卿と號す、余が族なり、既に學殖あり、又文辭あり、恬として名に近かず、人長者を以て稱す、若夫れ赤石は、梁蛻岩、詩賦を以て海内に雄たり、前卷已に詳論す、赤石海を隔て、近く淡州に對すと云ふ。

淡州より海に航して阿州に達す、阿州の學職數人あり、柴野彥助文辭あり、去年余が弟東都に祇役す、屢相往來すと云ふ、由岐浦に、井河玄益あり、謹篤の士なり、詩文も亦其人の如し、余が弟詳に孔雀樓筆記に錄す、平島に島津琴王あり、時に詩筒を余に寄するあり、阿州よりして讚州、扶桑千家詩に岡部拙齋の詩を載す、近時高松侯の文學、岡仲錫文辭あり、玉壺詩集に、其詩を載すと云ふ、渺々春波夕照微なり、白蘋風は起りて鳥雙飛す、曾て楊柳を攀づ、江橋の上、楊柳絲を掛けて人未だ歸らずと、婉順誦す可し、丸龜も亦讚の都會なり、曾羽山、往に其地に遊

「絲人未歸、婉順可誦、丸龜亦讚之、都會、僧羽山、往遊其地、藩大夫某、聞之、要羽山於途、邀遊山莊、爾後至今、詩筒無斷、其風雅可稱、羽山余方外友、屢稱其事、余老善忘、不記其大夫名氏、讚州而豫州、松山侯文學、前田子續詩、見諸選、子續名時棟、所著有二酉洞吟譜、云、豫州而土州、大高季明、前錄、土州隔海、東對紀州云、」

紀藩稱多學職、若夫活所、南海、玄輔已見前卷、永田善齋、名道慶、羅山門人、著膾餘雜錄、其詩見千家詩、荒川敬元、名秀、東涯門人、八居題咏、有和作、又附錄他作三首、頗巧整矣、陰山淳夫、名元質、強記無倫、至今爲藝苑話柄、著作非所長也、又、山君彙、名鼎、根伯修、名

ぶ藩大夫某、之れを聞き、羽山を途に要し、遂へて山莊に遊ぶ、爾後今に至まで詩筒斷ゆる無し、其風雅稱す可し、羽山は余が方外の友、屢其事を稱す、余老て善く忘る、其大夫の名氏を記せず、讚州よりして豫州松山侯の文學、前田子續の詩諸選に見ゆ、子續名は時棟、著す所二酉洞吟譜ありと云ふ、豫州よりして土州、大高季明は、前に録す、土州海を隔て、東紀州に對すと云ふ。

紀藩學職多しと稱す、若夫れ活所、南海、玄輔は、已に前卷に見ゆ、永田善齋、名は道慶、羅山の門人、膾餘雜錄を著す、其詩千家詩に見ゆ、荒川敬元、名は秀、東涯の門人なり、八居題咏に、和作あり、又他作三首を附録す、頗巧整なり、陰山淳夫、名は元質、強記無倫なし、今に至りて藝苑の話柄と爲る、著作長ずる所に非ざるなり、又山君彙、名は鼎、根伯修、名は遜志、並に祖徠の門人なり、紀藩に在りて、七經迄

遜志、竝徂徠門人、在紀藩、而著七經孟子考
 文者、詩竝見護園錄稿、又有本村源進、名之
 漸、東涯門人、享保中、蘭嶋、應聘紀藩、尋勸源
 進、源進沒而無子、今嗣職者任甫、名景尹、受
 業蘭嶋、本姓岩橋氏、因藩府命、爲源進嗣、遂
 冒姓木村。

伊勢宗廟所在、山田宇治之間、大小祠堂、無
 慮數百、奉職多暇、往往馳伎藝途、而以文辭
 稱者無幾、八居題咏、附錄度會清在、福島末
 茂、二人詩、又有白田陽山者、在山田講說、詩
 文無所解焉、丁亥之歲、祠官荒木田興正、遊
 學京師、屢過余家、戊子之秋、余父子遊勢州、
 留山田、凡三十日、館于興正家、興正以乃翁
 遺稿示余、翁名正富、字君忠、其詩間有可傳、

子考文を著す者なり、詩竝に護園錄稿に見ゆ、又木村源
 進あり、名は之漸、東涯の門人なり、享保中蘭嶋、聘に紀藩
 に應ず、尋で源進を勸む、源進没して子なし、今職を嗣く
 者は任甫、名は景尹、業を蘭嶋に受く、本姓は岩橋氏、藩府
 の命に因りて源進の嗣となる、遂に姓木村を冒す。

伊勢は宗廟の在る所、山田宇治の間、大小の祠堂、無慮數
 百、奉職暇多く、往々伎藝の途に馳す、而して文辭を以て
 稱せらるゝ者幾もなし、八居題咏に、度會清在、福島末茂
 二人の詩を附録す、又白田陽山といふ者あり、山田に在
 りて講說す、詩文は解する所なし、丁亥の歲、祠官荒木田
 興正、京師に遊學し、屢余の家に過ぎる、戊子の秋、余が父
 子勢州に遊ぶ、山田に留まると凡三十日、興正の家に館
 す、興正乃翁の遺稿を以て余に示す、翁名は正富、字は君
 忠、其詩間傳ふ可きあり、今其一を録す、能州の菊南山に
 答ふるに云ふ、孤鴻信を傳へて滄洲に落つ、玉露金風兩

今錄其一、答能州菊南山云、孤鴻傳信落、

滄洲玉露金風剛地秋、北海清樽分手後、南

天明月使人愁、當今山田能詩者數人、度會

雅樂爲翹楚云、津城勢州大藩、關關之富洋、

于山田文學、奥田士亨嘗受業東涯、世稱三

角先生、又有石川某亦其文學云、近時山田

東仙片岡順伯、二人來京師、攻黃岐術、兼學

詩於余、頗有才思、不懈有成、恐以刀圭、故廢

耳、又有大冢公委、字稷卿、稱正藏、秉志堅固、

將以有成、而溘乎夭折、頃日得一詩於篋底、

覽之慘然、因爲附錄、聞鶯云、翠柳參差弄晚

晴、爲聞黃鳥不堪情、一身已作他鄉客、辜負

春風喚友聲、津城支封有久居、照朝文苑、多

載、其士人士、平玄龍、押正胤、佐柳意、服彦進、

地の秋、北海の清樽手を分ちし後、南天の明月人をして

愁へしむと、當今山田の詩を能くする者數人、度會雅樂

を翹楚と爲すと云ふ、津城は勢州の大藩、關關の富、山田

に浮く文學、奥田士亨嘗て業を東涯に受く、世に三角先

生と稱す、又石川某あり、亦其文學なりと云ふ、近時、山田

東仙片岡順伯、二人京師に來り、黃岐の術を攻め、兼て詩

を余に學ぶ、頗才思あり、懈らざれば成るとあらん、恐ら

くは刀圭を以ての故に廢せんのみ、又大冢公委あり、字

は稷卿、正藏と稱す、志を秉る堅固、將に以て成るあらん

とするに、溘乎として夭折す、頃日一詩を篋底に得たり、

之を覽て慘然たり、因て爲に附録す、鶯を聞くに云、翠柳

參差晚晴を弄す、黃鳥を聞くが爲に情に堪へず、一身已

に他郷の客と作る、辜負す春風友を喚ぶの聲と、津城の

支封に久居あり、照朝文苑に、多く其土の人士を載す、平
玄龍、押正胤、佐柳意、服彦進、西正意、平一興等、余其人を
知らず、觀る所一篇一章、殿最を別ち難し、桑名も亦勢の
一都會、崑玉集に、平義意、水應春二人の詩を載す、又南川

西正意平一興等、余不知其人、所觀一篇一章、難別殿最、桑名亦勢之一都會、崑玉集、戴平鏡、意水應春二人詩、又有南川文伯、以詩著稱、嘗來京師、因僧金龍見余、又南宮喬卿、往下帷桑名、後遷津城、余自山田還、路出津城、留止數日、邂逅喬卿、喬卿邀余父子、聽其家樓、喬卿今在東都、又石大乙、滕文二、受業喬卿者、文二從喬卿、在東都、大乙蚤來京師、講說爲業。

志摩也、伊賀也、二國文雅無考、大和則南都松元規詩、見熙朝文苑、當今今井邑、有足高文碩者、其人奇、其詩亦可傳、受業余弟者、河內則有生駒山人者、詩集行世、和泉則唐金興隆詩、見八居題咏。

文伯あり、詩を以て著稱す、嘗て京師に來り、僧金龍に因て、余に見ゆ、又南宮喬卿往に帷を桑名に下す、後津城に遷る、余山田より還る、降津城に出づ、留止數日、喬卿に邂逅す、喬卿余が父子を邀へ、其家樓に講す、喬卿今東都に在り、又石大乙、滕文二、業を喬卿に受くる者、文二は喬卿に従ひて東都に在り、大乙は蚤く京師に來り、講說を業と爲す。

志摩や、伊賀や、二國の文雅考ふるなし、大和には則南都の松元規の詩、熙朝文苑に見ゆ、當今今井邑に、足高文碩といふ者あり、其人奇、其詩も亦傳ふ可し、業を余が弟に受くる者、河内には、則生駒山人といふ者あり、詩集世に行はる、和泉には則唐金興隆の詩、八居題咏に見ゆ。

攝之顯者、若水春叟、守靜等、既已前錄、今追考諸書、管子旭、阮東郭以下、脫漏不鈔、異日重考補遺、今不復喋喋、若夫當今下、惟授徒、島山、片山之輩、名聲顯著、無俟余言、亦復亡論耳、余男悰乘、在時、論詩不可一世之人、其所唱和、唯攝之葛子琴、子琴實工詩者、聞子琴社中、雁行子琴者有數人。

京師藝文、第三卷詳之、今追考之、遺逸殊多、亦俟異日重考、若夫當今藉甚之聲、無俟余之揄揚、亡論耳、溼晦無聞、而其實好詩善詩者、亦復不鈔、如松尾、桐官、田雨龍爲好詩者、如端文、仲爲善詩者、文仲、東都人、失意去鄉、西遊、窮困益甚、前日播磨堀生、口占文仲、秋日遊、巨椋湖詩三首、記得一首、欲得新詩、漫

攝の顯るゝ者、若水、春叟、守靜等、既已前に録す、今諸書を追考するに、管子旭、阮東郭以下、脫漏鈔からず、異日重考して遺を補はん、今復喋々せず、若夫れ當今帷を下し、徒に授くる、島山、片山の輩、名聲顯著、余が言を俟つなし、亦復論する亡きのみ、余が男悰乘在りし時、詩を論するに、一世の人を可とせず、其唱和する所、唯攝の葛子琴なり、子琴は實に詩に工なる者、子琴の社中、子琴に雁行する者數人ありと聞く。

京師の藝文は、第三卷之れを詳にす、今之れを追考するに、遺逸殊に多し、亦異日の重考を俟つ、若夫れ當今藉甚の聲、余の揄揚を俟つなきは、論する無きのみ、溼晦聞ゆるなくして、而して其實詩を好み詩を善する者も、亦復鈔からず、松尾の桐官、田雨龍の如き詩を好む者と爲す、端文の如き詩を善する者と爲す、文仲は東都の人なり、失意郷を去りて西遊す、窮困益甚し、前日播磨の堀生、文仲の秋日巨椋湖に遊ぶ詩三首を口占す、一首を記得す、新詩を得んと欲して、漫に獨遊ぶ、斜陽半响又留るを爲す、菰浦雨を経て沙初めて冷、雁驚人を畏れて未だ

獨遊斜陽半餉又爲留、菰浦經、雨沙初冷、雁
 驚畏、人禾未收、山色猶明危塔外、水烟徐起
 去帆頭、終宵弄月知何處、萬頃汪汪風露秋。

牧まらず、山色繪明なり危塔の外水烟徐に起る去帆の
 頭終宵月を弄せん知る何れの處ぞ、萬頃汪洋風露の秋
 と。

日本詩史卷之五 終

日本詩史跋

詩史就矣。使予及姪孔均，按焉。予會奉藩職於關東，孔均勤焉，未畢，孔均沒矣。予適歸，乃始從事。云論詩選詩，俱非容易。期主張者，率入頗僻，主調停者，或流軟弱，加之勢威所嚇，得失所眩，愛憎是非，自誣誣人。楚王弟與方城外尹，證驗非必真，鴛延項，髓縮頭，冷熱非必實，魏挾蝶非無史才，史以穢稱，胡釘鉸豈有詩學，詩藉妖顯，政理道術皆有，斯諸弊，近日詩家莫甚焉，必如斯書所論，而後可謂公且正矣。若夫命名之義，讀者自當得之，云。

明和辛卯之春

弟清絢拜撰

大正九年一月二十日印刷
大正九年一月廿三日發行

日本特許叢書 第一卷

非賣品

編輯者

池田四郎次



發行者

立田義元

印刷者

高木鳥三

印刷所

株式會社 秀英舎 第一工場



發行所

東京市神田區
小川町一番地

文會堂書店

電話神田三二一六番
接發東京三五一三番